
深層心理レメゲドン

オンダヒツギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深層心理レメゲドン

【Nコード】

N5024F

【作者名】

オндаヒツギ

【あらすじ】

モラトリアム

僕の非日常は終わったはずだった。村上水色と駆け抜けたあの夏休みと一緒に。だけど、僕の非日常はまだ続いている。スクールカウンセラー夢野かのかとの出会い。宮部現実との邂逅。メリケンサックの通り魔。悪魔憑きはもうこりこりなのに。まったく、やってられないね。そうは思わないかい。ねえ莉鈴さん？

ブローグですらないメランコリー 1

江戸川・フルフル・莉鈴^{りりん}。

この名前を、僕は決して忘れはしない。

高校生活最初の夏休み。

村上水色と駆け抜けた、あの悠久とも刹那ともいえるモラトリアム。

その虚う時計仕掛けの中で、僕は色々な人間と出会い成長した。

僕の恋人だった村上水色^{みずいろ}、然り。

僕のドッペルゲンガーだった東野露樹^{ろき}、然り。

僕の幼なじみである夢枕ありす、然り。

ヴァンパイアを自称する、太宰ルカ。

その従者の芥川ベリ子。

名探偵、京極京子。

天災、いや、天才科学者、森玉藻^{たまも}。

そして、僕の抑圧された精神を具現した魔術師、恩田黒瓜^{くろうり}……然り。

そんな数ある出会いの中でも、彼女だけは、江戸川・フルフル・莉鈴^{りりん}だけは、一際異彩を放っていた人間だったと、思う。

椿鬼姫^{つばきひめ}。

宇宙規格。

オールインワン。

人類のハイエンドモデル。

四凶。

四騎士。

外典。

ナンバー13。

レッドコメット。

ナイトメアー。

エトセトラ、エトセトラ……。

彼女の個性を現す通り名は引く手あまただけれど（露樹いわく、千の通り名を持っているらしい。、まったくラヴクラフトが妄想した神性でもあるまいし。信じがたい眉唾話しではあるけれど、まあ、莉鈴がトリックスターであるというスタンスはあながち的外れではないと思う）そんな作られた人格だけが彼女の全てを表現するものじゃないってことは僕にはわかってる。もちろん、江戸川・フルフル・莉鈴の本質が、そんな下らない文字列だけでは定義できないってことも……。

「ねえ、すけあくろー。村上水色が、本当に君のことを好きだと思っ
う？」

「ねえ、すけあくろー。村上水色は、本当は君に逃げて欲しいとは思
思っていないんだよ？」

「ねえ、すけあくろー。すけあくろーが、このまま変わらないとし
たら、村上水色は本当に君のことを殺そうとするよ？」

そう、異彩を放っていたのは、彼女のその姿形よりも、彼女が放
つその声その台詞。

真っ直ぐで実直で、

真っ直ぐすぎる故に実直すぎる故に、

彼女のあの声は、

莉鈴の紡いだあの台詞は、

僕の心を深く抉ってしまった。

だけど、僕はその頃まだ子供のままで、外敵である莉鈴を認めたく
なくて、恋人である村上水色を信じていたくて、大人になりたく
ない僕は、ずっと子供のままでいたかった僕は、心の抉れてしまっ
たその部位に深く深く抉れてしまったその部分に、彼女の言葉を仕
舞うことしかできなかった。

それは、まるで蜂蜜みたいなただ甘さ。

それは、まるで蜂蜜みたいな蕩ける粘性。

でも、僕は江戸川・フルフル・莉鈴のそんな言葉に溺れたく

はなかった。

でも、僕は村上水色の心地よさに漂いたかった。

現実には浮かぶよりも、理想に沈んでいたかったんだ。

だから、僕は彼女を傷つけてしまった。

ジーンズのポケットに隠した熱帯魚で、

如才なくフィジカルに彼女を切り刻み、

如才なくメンタルに彼女を切り刻んだ。

それでも彼女は、

それでも江戸川・フルフル・莉鈴は、

血に濡れた白い顔をほころばせて、

だけど少しだけ憤慨を伴った笑顔を僕に見せて、

彼女はこう言ったのだ。

「いい加減、目を覚ましなよ」

そして、彼女も僕を傷つけた。

彼女が持っている毒々しい深海魚に甘い言葉を乗せて。

その時は生き残ることに無我夢中で、彼女の言動はわけがわからなかったけれど、今なら、夏休みを終えた今なら、村上水色との逃避行を終了した今なら痛いほどわかる。

いや、本当はわかっていたんだ。

だからこそ僕はこうしてこの場所にいるから。

君のおかげで僕はこうしてこの場所にいられるから。

「はっはっ！。だったらあたしをリスペクトしな！ 蛞蝓みたいに地べたに這いつくばって神様みたいに感謝しろよな」

ああ、本当に感謝しているよ。

いや、でも、その言い草はあまりにも酷くね？

「酷くなんてないねー！ それを言うなら、可憐な乙女を血まみれにした拳銃、路上に放置プレイするすけあくろーの方が酷いと思うなー。ロリ大国日本では考えられない所業ぜよ」

いや、ロリ大国ってお前。

いやいや、それよりもどうして僕のモノローグにお前はツッコミ

を入れているの？

いやいやいや、それ以前に路上なんか放置してないから。

いやいやいやいや、そんなことよりもどうしてお前はここにいるの？ これは夢なの？

「あー色々と煩い！ すけあくろー、いい加減目を覚ましなよ」

ああ、久しぶりに聞いたなその台詞。

だったら、いい加減目を覚ますよ。

お前の言うことだったたらなんだって聞いてやるさ……。

そして、僕はおもむろに目蓋を開く。

どうやら僕は眠っていたらしい。

夏休みが空けて七日目。

モラトリウムを引きずるにはうってつけの期間。

皮膚の上にひりつくのは夏の日のプロミネンス。

目蓋の裏にひりつくのは夏の日のセンチメンタル。

「うわ！ センチメンタルだって、だっさ！ センセー！ あの席の男子が痛くて仕方ありません」

「痛い言うなよ」

そして僕は彼女と再会する。

今度は外敵ではなく、

今度は非日常でなく、

今度は普通の女の子として、

今度は平凡な日常として、

恩田崇は江戸川・フルフル・莉鈴と再会した。

プロローグですらないメランコリー2

これがもし小説だったならば、転校生（あえて美少女とは定義しない）の座る席は偶然にも空席で、尚且つその席が主人公と絡みやすい位置にあるものだ。例えば、僕の隣りの席だったり、前方あるいは後方の席だったり。ようするに、ゼロ距離とは言わないまでもお互いの声や手が容易に届く距離が望ましいし、都合が良い。ただし、僕がいるのは現実であり、ましてや僕は物語りの主人公でもない。よって、江戸川・フルフル・莉鈴は、最初は僕と絡みさえすれど、そこから物語りは加速度的に進行することではなく、淡々と自己紹介をこなし、お互いに声も手も届きそうにない廊下側の空席（もちろん、偶然空いていたわけではない、転校生のために予め用意されたものだ）に彼女は落ち着いたのだった。

「じゃあ、皆仲良くしてくださいってことで、ホームルームを始めますよ」

担任の声で、ざわついていた教室が静かになる。江戸川・フルフル・莉鈴に集束していたクラスメイトの視線がおもむろに教壇の三島桜子に向けられていく。僕も彼女から視線を外して、教壇の方角へ首を向けようとした。と、そのとき、隣りの席に座っている女の子と視線が重なる。黒色のセルフレームに収まった大きな瞳が、僕を真っ直ぐに捉えていた。

「知り合い？」 瞬きもせずに、彼女は訊いた。

「ん、まあ、ちよつと」

「ちよつと？ ふーん」 片目を細めて、彼女は不適に笑う。「お前の言うことだったらなんだって聞いてやるさ……」

「え？ 何それ？」

「寝言」

「誰の？」

「もちろん、恩田くんの」

「僕？」

「そう、君」人差し指を突き出して、彼女は首肯した。「お前の言うことだったらなんだって聞いてやるさ……、そしてはにかむ彼女の顔。^{かんはせ}それが、ちよっとした知り合い？」

「いや……」僕は口ごもる。「いや、本当に夏休みに一度会っただけなんだ」

「あ、そう。まあ、それは良いけど」

「いや……、って、良いのかよ!？」だったら訊くなよほつといてくれよ、とまでは口にせず。僕は彼女の言葉を待った。

「良いよ、私はね」ふふん、とせせら笑って彼女は言った。「私は良いけれど、ありすがね。彼女がどう思うか。問題はそれにつきると思う」

「眼鏡も黒いが、腹も黒いな。脅迫か？」

「そう思ってもらっても良い。でも、私がするのは脅迫ではなく、提案」

「で、その提案っていうのは？」

「まずは、受けるか受けないかの返答が重要」

「わかった」僕は首を竦める。「それで、提案っていうのは？」

「放課後、実習棟へ来なさい。もちろん、あの子も一緒にね」彼女はおもむろに後方へと首を向ける。「江戸川・フルフル・莉鈴と一緒に実習棟へ来なさい。ちよっとした知り合いなんでしょう？」

「わかったよ」

「良い判断。恩田くんの恥ずかしいポエムは、私の中で封印しておいてあげる」彼女は僕に微笑んでから、姿勢を正した。「じゃあ、大人しく点呼を待つ」

「あ、はい」僕も彼女に倣う。が、途中でそれを放棄。首を彼女に向けたまま、僕は訊いた。「いや、ちよっと待って、僕の恥ずかしいポエムって……」

「色々と聞かせてもらったわ」彼女は僕を一瞥して、鼻息を漏らす。「諳んじて欲しいの？ 多分、悶絶死は必須だと思う」

「いや、遠慮しておきます。桜庭の中に永遠に封印してやって下さい」

「良い判断」慇懃そうに彼女は頷く。って……、どんだけ恥ずかしかったんだよ、僕の寝言は……。

担任に名前を呼ばれて、それに応える。

それから、隣りの席に座っている彼女の横顔を僕は眺めた。

桜庭灰霧^{かいむ}。

クラスメイト。

夢枕ありすとは中学校以来の友達で、僕とは高校生になってからの知人。だけど、もちろん桜庭がありすの親友だったことは寡聞にして知るべくこともなく、ただただ席が隣り合っていたというだけで気づいたら良く話すようになっていた、という間柄だ。でも、桜庭は当然僕のことをありすから聞いていて、そのことを僕が知ったのは彼女と話し始めてから随分あと、僕が村上水色との逃避行を開始する前日、つまり一学期の終業式、夏休みの一日前である。ちなみに、桜庭、そのときにですら彼女からは何も言っていない。

以下、回想。

ひゃっほーい、明日から夏休みぞよ。崇ー、そういうことではっちり遊び倒そうぜ？ もちろん、灰霧も一緒にね。本ばかり読んでもつまらんどしょ？ ああ、でもでも三日に一度くらいは崇だけと過ごしたいなー。ねえねえ、灰霧、許してくれる許してくれる？ 許してあげる。

だっはー！ やったぜ崇！ 私たちは灰霧の公認会計士ぞよ。意味わかんねーよ。っーか、お前ら知り合いだったの？

友達だよん。灰霧から聞いていないの？

いや、聞いていないけれど……。桜庭、そうなのか？

そう。私とありすは中学校からの友達。

聞いてねー。

色々と観察させてもらったわ、飾らない恩田くんをね……。

回想終了。

そういうことで、なかなか手の内を見せてくれない、ワイルドカードはぎりぎりまで取っておく、そういう腹にいち物を持つ女の子である。油断できない、いや、油断することすら叶わない、何気に危険な隣人。それが桜庭灰霧。でもまあ、僕はすっかり油断しきつて、こうして新たに外交カードを彼女に提供してしまったわけだけれど。

それにしたって桜庭、それを行使するにはいささか性急すぎやしないか？

まったく、彼女らしくもない。

江戸川・フルフル・莉鈴を同伴させるのも理解できない。

わからないことだらけだ。

「理解できない。そういう顔をしている」ふと、そんな声が漏れるのを認識する。「それはまあ当然。でも、放課後になれば万事解決。実習棟へ来れば全てが十全になる」

見てみると、桜庭は人差し指で眼鏡を直しながら僕を見据えている。「それまで我慢、俥ぶ心で」

格好つけているところ悪いんですけど、

桜庭さん、その漢字間違っていますよ。

ブローグですらないメランコリー 3

桜庭の揚げ足を取るつもりはないけれど、少しだけ懐かしんでみようと思う。懐かしむというからには、僕にとつてその対象は過去であり、故郷やまして故人でもない。この街を故郷と呼ぶには僕はまだ若すぎたし、故人を思うほど僕はまだそれほど生きてはいないでも過去として懐かしむにはそれは色褪せているわけでもなく、あえて言うならば、その過去はインスタントラーメンみたいなもので、お湯を注いでしばらく待っていれば美味しくいただけってしまうようなお手軽なものだ。

教室での江戸川・フルフル・莉鈴との再会は、僕にちよつとしたサプライズを与えはしたものの、それはもちろん許容範囲内にある事象である。だから、こうして僕は平静を保っていられるわけなのだけれど、もし仮にその情報を事前に取得していなければ、僕はきっと江戸川・フルフル・莉鈴にたいしてとても冷静ではいられなかっただろう。

まかりなりにも、殺し合った仲である。

引き分けならぬ痛み分け。

常勝の鬼椿。

ガシャドクロの椿鬼姫。

江戸川・フルフル・莉鈴。

その彼女に、僕は勝利すらできなかったけれど、また敗北することなかった。

殺し合った故に僕たちはわかりあい和解したのだが、殺し合い和解したところで、ゆずれないものまで氷解することは難しいと思う。何せ僕が現れるまで彼女はこの街に君臨していたのだ。もちろん最強として。

最強。彼女が常勝していたが故に、手に入れることのできた最高の称号。それを僕は、まるで素人同然、素人と同義のこの恩田崇が、

彼女を、江戸川・フルフル・莉鈴を最強の座から引きずり降ろしてしまったのだ。

彼女は勝利はしていないが、また敗北もしていない。

痛み分けならぬ引き分け。

それはもう常勝すらでないし、最強なんておこがましい。

でも、彼女が再戦を望めば、全てがリセットされ十全になる。

それを僕は心のどこかで恐れていた。と同時に彼女との再会を漠然とだけれど、僕は予感していた。いつかまた会う日があるんじゃないかって……。僕が奪った彼女のプライドを、いつか返してもらいに来るんじゃないかって……。

時計仕掛けを三回半ほど逆に回す。

三日前。

恩田家。

午前六時。

「おっはいよー」

携帯から漏れ出てくる声に、僕は嘆息する。「何なんです？　こんな朝っぱらから」

「おっはいよー」

「……………」

「おっはいよー」

「いや、だから……………」

「おっはいよー？」

「お、おっはいよー」

「何だ恩田くん、君はちゃんと挨拶できる子じゃないか。それならそうととっとお返事してくれたまえよ。私はとても忙しい身なんだ、元気な子たちがやんちゃしてくれるおかげでね。正直、君と私とを繋いでくれているこの携帯電話を今すぐにでも放り投げてメスを持ち直したい心持ちだよ。まあ、そうはいかないから今こうして君とお話しているわけだけれど。あ、恩田くん、だったら左手があるじゃないかという野暮なツツコミはしないでくれたまえよ。携

携帯電話を左手に持ち替えるつてのもなし。私は左手で物を持つという行為が大嫌いなんだ。もちろん茶碗だって一度も持ったことはない。ぶっちゃけ犬食いだ。あははははははは、犬食いは冗談だとしても、本当に私は左手に物を持ったことがないんだ。これだけは本当さ。聡明な恩田くんなら信じてくれるよね？ いや、返事はいらないよ。その無言が何よりの肯定だ。ああ、君と知り合えて私は幸せだよ。こんなに私に理解のある人間は恩田くんだけだ」

いや、僕はあなたのことをまったく理解できていません。

「あの、それはそうと、夢野さん、僕に用件があるのでは？」

「そうだそうだ。私は君に用件があつたんだ。だから、私は君とこうしてお話をしているわけだな。なかなか鋭い洞察力ではないか、恩田くん。あの名探偵京極京子と肩を並べても遜色しない名推理ぶりだね。正直、私は君に感服している次第だよ。ああ、まったく、君の爪の垢でも煎じた青汁を露樹に飲ませたい心持ちになるなあ。いやはや、姿形は似ていても恩田くんと露樹とは対極の位置にあるね。ようするに、陰と陽だ。ん、そうするとこの場合、君が陰で露樹が陽ということになるな。うん、これは恩田くん大好きっ子のこの私には得心できかねるスタンスになるね。言いかえよう。君が陽で露樹が陰だ。陽と陰。陽と陰、陽と陰……、ああ！ 恩田くん突然で悪いんだけど、陽と陰ってよいどん！ とは似ていないかな？」

「あ？ ああ、似ているなあ！」そう快活を取り繕って返事をする僕。だけど、ケータイを握っている手は夢野さんをその中に閉じ込めようとうにうに蠢いていた。「じゃあ、夢野さん。僕はこれで！」うん、そうだね。私も忙しいし、また掛けることにするよ」そこで夢野さんは軽く舌打ちをする。

「あ、ごめんなさい。別に切ろうとしたわけでは……」

「何を謝っているのかな？ 私は、自分のおつちよこちよいさに軽く苛立ちを覚えたんだけれど……」

「あ、そうですか」

「それよりもね恩田くん。私は君に大事なお話しがあるのだよ。それを忘れていた」

僕は黙っていた。うつかり合の手を入れたら、またぞろ延々と喋り続けるかもしれないと思ったからだ。

「江戸川・フルフル・莉鈴が君に会いにくるそうだよ」

だから……、

だからこそ、僕の作り出したその沈黙が、夢野さんの発するセンテンスを吸収させるには充分すぎた。

充分すぎるが故に、そして沈黙で綺麗にパックされてしまったが故に、彼女が届けたそれを受け取るのに、僕は思わず躊躇してしまふ。

だけど、そんな僕の間隙を夢野さんが見逃すわけでもなく、

「江戸川・フルフル・莉鈴が、恩田崇に会いにくるそうだ」

そのパックされたセンテンスに、さらに言葉を押し込めてぎゅうぎゅうにして、僕の鼓膜に捻じ込んでくる。

もちろん、思考は飽和状態。

「江戸川・フルフル・莉鈴が、僕に？」脳に充填した酸素を逃がすように、僕は思わず言葉を口にする。

「そうだ。君が血まみれになって運んできた、君が血まみれにして運んできた、あの江戸川・フルフル・莉鈴だよ」

「どうして？」

「愚問だね、恩田くん。そりゃあ決まっているさ……、彼女が君に会いたいからに決まっている」

「会いたい？ この僕に？」

「そう君に、だよ。恩田崇くん」くすりと、夢野さんは笑い声を漏らす。「だけどね、恩田くん。恩田崇くん。君が考えてるほど、君が声を震わせるほど、事態は深刻でもないし事実には衝撃的でもない」「いや、だって僕は彼女を傷つけてしまったわけだし」

「しかし、彼女もまた君を傷つけてしまったのだろう？」夢野さんはやんわりと、それでも反論を許さないくらいに微妙な圧力を持つ

て僕を制する。

それでも、僕は彼女の名前を口にせざるを得なかった。
それは反論ではなく、確固たる事実。

「だって、江戸川・フルフル・莉鈴なんですよ？」

その事実には夢野さんは嘆息して、

「そして、何よりも彼女は女の子なのだよ」

嘆息しながらそう応える。

「恩田くん。君はいささか彼女のことを誤解している節があるね」

「誤解、ですか？」

「そうさ。恩田崇は江戸川・フルフル・莉鈴を誤解している」

誤解しまくっているのさ、君はね。そう言葉を繰り返して、夢野さんは続ける。「私もこういう身分なんでね、彼女の名声は寡聞にして知るところさ、もちろん彼女のその武勇もね。まったく、露樹が言うところの千の通り名を持つ少女とやらには失笑を禁じえないけれども、いや、しかし彼女の個性を表すにはそれもまた得心できる。それくらい彼女は、江戸川・フルフル・莉鈴という名は、この街に畏怖を与えるには充分すぎる個性なんだ」

「だったら……」

わかっているでしょう？

もちろん、そんな言葉を僕はひりだすわけでもなく、口腔に溜まった唾液の中にそれを沈める。でも、夢野さんはそんなことはお構いなしに、まるで僕のことなんか知ったこっちゃないというふうに、まるで僕のことを知ったふうに、

「わかっていないね」

そんなことを言う。

「わかっていない。君は全然わかっていないよ、恩田くん、恩田崇くん。君はまるつきりこれっぽちもわかつちやいないさ」

僕は黙っていた。

黙る以外、どうしろと？

夢野かのかは、一体僕にどうしろというんだ？

「簡単なことだよ、恩田くん。君はありのままの姿で、ありのままの彼女に接すれば良い」

「どういう意味ですか？」

「やれやれ、困ったちゃんだね君は。じゃあ逆に訊くけれど、君は一体、江戸川・フルフル・莉鈴となにをやっていたのかね？」

「殺し合い」

「そうだ殺し合いだ。お互いの中身を全部恥ずかしげもなく曝して晒してぶちまけて吐き出して、それをありったけの全力で、全身全霊を持って、持てるだけの力を、持て余した感情を、惜しげもなく勿体ぶるでもなく、ぶつけ合った二人。それが恩田崇と江戸川・フルフル・莉鈴ではないのかな？ それでも尚、そんな勝負をしても尚、そんな殺し合いをしてでも尚、君は恩田くん恩田崇くん、君は江戸川・フルフル・莉鈴のことを、わからない、と言うのかな？」

「そんなこと！？」

誰も言っていない。

彼女のことを、わからない、だなんて僕は言っていない。

彼女のことを、わからない、だなんて僕が言わせない。

僕が知っている彼女は、

僕が知ってしまった江戸川・フルフル・莉鈴は、

……、そんなものじゃない。

「何だわかっていないじゃないか」携帯の向こう側で、ぱちぱちと空気が爆ぜる乾いた音。「そういうことだよ、恩田くん。君が彼女に見せた個性が偽りだったように、彼女もまた君に見せたその個性も作られたものなんだよ。だからこそ、君は、江戸川・フルフル・莉鈴と殺し合いわかりあった、君ならば。彼女を、わかっている、君だからこそ、ありのままの彼女を受け入れることができるんじゃないかな？ そして彼女も然りだ。ありのままの君と再会することを、江戸川・フルフル・莉鈴は望んでいるんだよ」

それは非日常ではなく、極々平凡な日常だ。

夢野さんはくすりと笑って、そう締める。

「随分と彼女の肩を持つんですね」

「そりやそうさ。私は恩田くんと同じくらい江戸川・フルフル・莉鈴のことが好きだからね。いや、大好きになったと言うべきか……。くふふ、恩田くんの生徒手帳を眺める彼女の表情、君にも一度見せたかったな」

は？ 生徒手帳？

そんな僕の疑問に彼女は入り込む余地は欠片もなく、そんな彼女の台詞に僕が入り込む余地は微塵もなく、まるで友達にでも秘密を打ち明けるような親密さで、

夢野かのかは、

こう繰り返すのだった。

「君の生徒手帳を眺めるあの表情……、あれは乙女の顔だったぜ？」

「乙女ですか……」

「そういうことさ」うんうんと、声を出して彼女は言う。「あとは言わずもがな、言わずが華だよ。まあ、そういうことでよろしくやってくれたまえよ」

「いや、よろしくって……」

「おっと、これ以上何も言わないでおくれよ。そうじゃないと、君の唇に遅からず針と糸が通ることになるぜ？」

「そいつは御免ですね。まったく、冗談じゃない」僕は夢野さんに笑い返す。「用件とやらはこれで終わりですか？ だったら、僕は携帯を閉じますけど？」

「それは君の思うがままに。まあ、少しばかり寂しい心持ちではあるけれどね。しかし寂しくはあるが、同時に頼もしくもあるな。くふふ、恩田くん、やはり君の成長振りには目に見張るものがあるね。正直たまらないよ。今夜にでも君をおかずにしてもいいかね？」

「冗談じゃねーよ」

どさくさに紛れて何を言ってるんだ、この人は。

さすがは、恩田崇大好きっ子を自負する夢野かのか。

その探究心（性欲）はあなどりがたし……。
携帯を閉じた手がいまだに震えてたまらねーぜ。

ブローグですらないメランコリー 4

「もう少しの辛抱……」

ふと、そんな声が耳元をくすぐった。

と同時に右手にひんやりとした感触。

どうやら僕は眠っていたらしい。

巻き戻した時計仕掛けは気がつくもと元に戻っていて、気がついた僕はぼんやりと彼女の手を眺めていた。

「わかつているわ」

隣人の眼鏡っ子は優しく微笑む。それから軽く当てている僕の手に少しだけ圧力を加える。もう片方の手は口元に停滞したまま、白い人差し指を唇に当てて、何も喋るなのジェスチャー。「私は、わかつているから。だからもう震えないで」

彼女の真摯な瞳に、なんだか僕は笑えてきた。

どうやら彼女は僕のことを心配していたらしい。

でも、それはとんだ勘違いだ。

「いや、違うんだ。これは……」

「この人差し指が、親指姫に見えて？」鋭い視線と声調で、彼女は弁解しようとする僕を制する。いや、親指姫って意味がわからないんですけど。「だから、恩田くんは黙って待つ。それで全てが十全になる」

「そうですか」

そんな僕の相槌すらも彼女は無視して、僕の手にもその柔らかい手を当てたまま大人しくしていた。それからおもむろに数字を諳んじ始める。視線は僕に向けられていない。壁に掛けられている時計仕掛けを見つめたまま、

「ごー、よーん、さーん」

何故かカウントダウンをしていた。

「に……」唇を結び、彼女はにやりと不適な笑みを見せる。

そしてそれは訪れた。

だけど、それは彼女の掛ける魔法の合図ではもちろんなく、ましてや終末を予感させる不吉なラッパの音色でもなく、四限目の終了を知らせる極々平凡で単調なチャイムの音だった。

「ほらね」彼女は手を離して、につこりと微笑む。「恩田くんが待ちに待ったお昼の時間よ。震えるほど待ち焦がれていたなんて、とんだ腹ペコキヤラさんね」

「桜庭はとんだ勘違いキヤラだけだな」

「酷い言い草。あーあ、心配して損しちゃった。ねえ、恩田くん。さつき君にあげた私の優しい気持ち返してくれる？ その鞆の隣りに引っ掛かっている美味しそうなお弁当と一緒に」

「腹ペコなのは桜庭じゃないか」

「そう私は腹ペコ。そして今はお昼休み。腹ペコな私はありすと一緒にお弁当を突つつくことにするわ。だって今はお昼やすみだもの」そう言つて桜庭はおもむろに立ち上がる。それから僕を一瞥して制服のポケットから手帳を取り出した。「そして私はありすのメッセンジャー。楽しい楽しいお昼休みは、楽しい楽しい定時報告の時間、メモメモと。じゃあね恩田くん、良いシエスタを」

「いや待て！ 何だその定時報告つてのは！？ それに何だその手帳は！ メモメモって、一体それに何を書いていたんだ！？」

「ありすに君の動向を報告するためだよ。そしてこれは、君の動向を書き綴った真実のメモリー」

あの幼なじみ、最近めつぽう昼に姿を現さないと思っていたら影に隠れてこんなことを……。

いや、それよりも、そんなことよりも。

僕が今、気に病んでるのは、僕が今、気に病むべきものは……。

「お前が真実と言つて憚らない、その怪しげな手帳だー！！」

そう僕が叫ぶや否や、桜庭は身を翻し僕の追撃から逃れようとする。が、しかしそこは桜庭、持ち前の読書家スキルを発揮してその運動神経のなさを露呈、あっさりと僕に捕まる。

「にゃん」桜庭は借りてきた猫よろしく、大人しくなり僕を見上げる。「許して欲しいにゃん」

「キヤラ変わりすぎだってーの、可愛く懇願しても僕は騙されません」嘆息したあと、僕は桜庭から手帳を取り上げた。「まったく油断も隙もあつたもんじゃねー。悪いけど桜庭、中身は見せてもらうぞ」

きょうおんだくんがいやらしげなてつきでわたしのてをまさぐりました。

わたしがなくてやめるようにいっても、おんだくんは、しんぱいしないよ、とimiがわからないことをいつてわたしのてをまさぐりつつけています。それはおひるやすみまでえんえんとつつきそうです。わたしはもうどうしていいかわからなくて、ずっとなきつつけるばかりです。わたしがなきつついていゐるいまでも、おんだくんはひつようにわたしのてをまさぐりつつけています。めつきなんかもうすごいです。とてもじゃないけれどせいしにたえられるものではありません。はないきなんてもうけものそのもので、おもわずみをふさぎたくなります。ああ、ありすさん。ありすさん。わたしはずっとこのままおんだくんのなぐさみものになるのでしょうか？

「……………」

「……………」

「……………」

「にゃうん？」

これのどこが真実！？

そして、何故全てが平仮名！？

「僕は今日ほど桜庭の存在を恐ろしく思ったことはないぜ」

「誉めてるのに、握られている手に力が込められているのはこれ如何に？」

「いやいや誉めてなんかいないから」やれやれと、僕は桜庭をいなし握っている彼女の襟首から手を離れた。「まあ、最もこんな荒唐無稽なこと信じる奴はいないけれどさ……………」

「ふっ……、わかっていない」そんな僕を桜庭は嘲るようにせせら笑いながら言葉を続ける。「恩田君は何もわかっていない。世界は女の子にとってもとても優しくできていてよ？」

「どういう意味だ？」

「決まっている」唇を持ち上げたまま、桜庭は僕が持っている手帳を一瞥する。「恩田くんがそれを白だ白だと否定しようが、私がそれを黒と肯定してしまえば、それで全てが十全になる。何故なら私は女の子だから。ねえ、恩田くん。君になら、私が言っている意味がわかるはず」

「黒い……、どうしようもなく黒いぜ桜庭っ！ 桜庭を通して世間の抱えるジェンダーの憂いがまたひとつ露見してしまった……」

「そう。男女平等だなんてただの飾りですよ」

くう、確かにそうだが。

確かにそれっぽいふうだと僕も思うのだが。

例えそうだとしても。

例えそれっぽいふうだとしても。

まだ主導権は僕の手握られている。

「しかし、その真実とやらも、僕の手握られていてはどうすることもできない？」

僕はニヒルに笑って、桜庭から取り上げたその手帳を頭上に掲げる。

だけど、桜庭はそんな僕の行動にさして興味を示したわけではなく、軽く手帳を一瞥してから僕を見据える。

その瞳は、諦観ならぬ明らかな達観。

その唇は、侮蔑ならぬ明らかな愉悦。

彼女はそんな表情を、主導権を握って尚も僕を不安にさせるそんな表情を、まるでトーストに載せられているバターみたいに、その顔にしっかりと塗りたくっていたのだった。まるでそうするのが当たり前のように。

そして……、

そして彼女はこう呟くのだ、

「ニーソ」

と、ただ一言。

「……………」

「……………」

「は？」当然、僕は眉を顰める。そして必然的に口から漏れ出てくるのは、疑問符でアレンジされたこんな反芻。「ニーソ？」

「いや、ごめん間違えた。訂正、訂正」どうやら桜庭さんそういうことらしい。珍しく彼女は頬を赤らめてから、ニヤソ、ニヤソだった、と訂正した。

「ああ、含蓄のあることを表現したかったわけか」僕は短く鼻息を漏らす。「しかし、桜庭。お前って肝心なところでしまらない奴だよな」

「ほつといて」唇を尖らせて桜庭は僕を睨む。

「いやあ、僕はてつきり桜庭がニーソフェチで、好きで好きでたまらなくて思わず口にした言葉だと思ったよ」

「そういう恩田くんはどう？」反論するかと思いきや、桜庭は僕の思いつきの台詞に乗ってきた。

「まあ、眺めるくらいなら」

って……、何で僕も彼女に乗っているんだ。

「なるほど。恩田くんはフェチを自負するくらいにニーソ好き。毎日ハアハア悶えながらニーソっ子をねめつけている、メモメモ」

「いやいやいや、だからそうしてありもしないことを書くなって……」

……

えっ……………？

今、僕は何て言った？

桜庭のツールは僕が封じているのに、どうしてそんなことを言ったんだ？

「浅はか」僕のそんな動揺を、桜庭はシニカルに一蹴する。「真実は一つとは限らない」

思わず僕は桜庭から視線を外して、手にしている手帳を確認する。でも、やはりそれはそこに確かにあって、気づかない内に彼女の手に渡ったというわけではなかった。が、しかし彼女の言った通り真実は僕が手にしているのが唯一ではなく、また彼女が手にしているそれも僕が手にしているそれと同義、いや、それ以上の脅威を持つ危なっかしいツールには違いない。

僕は恐る恐る、桜庭がちらりと見せたそれを、彼女が持っているそれを確認する。

ちくしょう……。僕はまんまと彼女に踊らされていたというわけだ。

「提案があります」僕の視線を目で追ったあと、彼女は満足げに言った。

「で、その提案とは？」

「それよりもまず、受けるか受けないかの返答が重要」

「はいはい、わかりましたよ。最も僕にそんな決定権はないと思うけれど……」

「わかればよし」僕の返答を聞いた桜庭はことさら満足げに頷き、それから手にしている携帯を厳かに閉じた。「恩田くんに、良いシエスタを……」

「つか、桜庭さん。」

「ついさっき、僕は起きたばかりなんですけれど……」。

ブローグですらないメランコリー 5

髻削ぎ。びんぞり

平安後期から室町中期に亘って呼ばれていた髪型の一つ。

それは貴族の富と美貌の象徴であり、また庶民の羨望の対象でもある。

今となつてはその意味もはや形骸化し文字通り形だけになってしまったけれど、しかしそれは逆説的に言えば形だけとなりその意味が形骸化したからこそ、千数百年の時をえて尚も存在しえたのではないだろうか。その意味を失ったが故に庶民に波及し、その意味を失ったが故にそれは世間に流行したのだ。伝統という歴史的存在感として。

今、僕はその歴史的存在感をぼんやりと遠巻きに眺めている。

これほどあの髪型の似合う少女を、寡聞にして僕は知らない。

もちろん、その少女の名は、江戸川・フルフル・莉鈴。

顎の辺りまで流れる漆黒の髪、その狂おしいまでの悪魔的な美しさに包まれた均整の取れた小さな白い顔。かんぱせそして、その均整の取れた顔にさらなる存在感を与える厚く切り揃えられた前髪。

「あれは良いものだわ」うっとりとした声で隣人の眼鏡っ子は言う。

「良いものは決して無くなりはいししない。幾千幾百の時を流れて、その名が変わることはあっても、その本質は決して無くなりはいししない」かたちそして、薄く瞼を閉じた彼女はこう続けるのだった。

ビバ伝統、

ビバ姫カット、

と。

「いや、桜庭さん。見とれているところ悪いんですけど、早くその提案とやらを仰っていただけないでしょうか？」

「興醒め」嘆息したあと、桜庭は僕に方へ振り返る。「モノローグでノリノリだった君は一体どこへ行ってしまったたの？」

まったく、僕のモノローグにまで介入するなよ。

まあ、ノリノリのだったは僕も認めるところだけど。

「いや、そんなことよりもだ」僕は咳払いをして、壁に掛けてある時計仕掛けを見る。「桜庭とのやりとりで、昼休みが結構削られたみたいだけれど」

「恩田くんがエロリストだからよ。責任取りなさい」

「誰がエロリストだ！」

「じゃあ、エロエロリスト」

「……………」

「じゃあ、エロエロエロリスト」

「悪魔が呼べそうだな」

「私は黒い奴よりも、白い奴と呼ばれる悪魔が好き」

「いや、桜庭さん。量産型には量産型の良さがあってですね…………、いや、つーか、もうこれくらいで勘弁してください」

「そうね。エロリストの恩田くんと無為に時間を過ごすよりは、ありすと有意義に過ごしたほうがいいものね」

酷い言われようだ…………。

しかし、ここは忍ぶ心でぐつと堪えて、僕は提案を示すよう桜庭を促した。

「彼女とお昼を過ごしなさいな」桜庭は言った。

彼女？

僕は首を傾げる。

僕と桜庭以外のクラスメイトは、皆思い思いにグループを作り弁当を広げていた。その場に立っているのは僕たち二人だけ。もちろん、僕にはもう彼女と呼べる特別な存在は既になく、桜庭が言う彼女が単なる三人称代名詞だと凡そ検討はつくけれども、しかしそれにしたて桜庭…………。

「一体、僕は誰に声を掛ければ良いんだ？」

まさかオカルト好きが高じて、とうとう守護天使でも視えるようになったか？

彼方を見つめるような胡乱な眼差しを見ながら、僕はそんなことを訊ねる。

「そうだったら素敵ね」桜庭はくすりと笑う。「でも残念そうじゃない。私がしているのは素敵、そして捉えた姫カット」

「いや、相変わらず意味わかんねーよ」

「……まさか。」

「そう。恩田くんは、江戸川・フルフル・莉鈴とお昼を過ごすの」

「えっ？ それだけ？」

「そう、それだけ」桜庭は首肯する。「そして幸いにも彼女はまだ一人」

「うっ、何だその含蓄が見え隠れする言い回しは？」

「彼女、ずーとお昼まで女の子に囲まれていたよね？ 　いつ恩田くんがその中に入って、朝に私がした提案をこなしてくれるか？と観察していたんだけど……、まったく、とんだチキン野郎だわ」「悪かったな……、チキン野郎で。でも桜庭、別に今じゃなくても放課後に誘えば良いんじゃないか？」

「そうね。でも今じゃなければ、二番目にした私の提案は恩田くんには不可能と思うけれど？」

確かに。

「それに」と、桜庭は僕を一瞥して、それからおもむろに頷いた。

「朝のやりとりだけじゃ色々と物足りないでしょうね、お互いに」

「何だよわかったふうに……」

「わからないでか」そう言っただけで何故か桜庭は制服のポケットから携帯を取り出す。「ちなみにこれ、ボイスレコーダという素敵機能がオプシヨン装備されています」

「素敵でも何でもない標準装備だそれ」

「いや待て……、まさかこいつ！」

「私はあのときに言った恩田くんの台詞が、伊達や酔狂じゃないってことは信じているけれどね」動揺しまくっている僕をよそに、桜

庭は淡々と話しを続ける。「これは誰にも公表するつもりはないから、だから恩田くん彼女のことはお願いね」

「はいはい、わかりましたよ」

「あ、でも流出することはあるかも。しかもワールドワイドに」

「不肖、恩田崇、江戸川・フルフル・莉鈴に突貫したいと思えますっ！」

「良い返事」殊更満足げに頷いてから、桜庭は携帯を制服に仕舞い込む。「じゃあ、私はこれで。彼女と良いシエスタを……」

上機嫌の桜庭が廊下に消えるまで見送り（ちなみにこれ、桜庭がまた何かやらかさないかという監視を踏まえた上での見送りだ）、僕は机の横にぶら下げられた弁当を取る。と、そのとき聴き慣れた着信音が制服から漏れる。それは桜庭からのメールだった。

『きつと彼女、恩田くんのこと待ってると思う。これ女の感。天気予報と同じくらい信用しても良い』

「随分と当てにならない感だな」僕は笑って携帯を閉じる。

さてと、じゃあミッシェン開始と行きますか。

弁当を携えた僕は江戸川・フルフル・莉鈴、いや莉鈴の席へと歩いていく。そして、僕の気配に気づいた彼女は、いやもう気づいていたのだろう、桜庭と二人で見たときの彼女のその澄ました表情はそのときには既に消えていた。

「待っていたぞ、すけあくろー」子供みtainな邪気の無い笑顔で、莉鈴は僕を迎え入れる。

「何ですつと一人でいたんだ？ それに莉鈴、お前弁当は？」

「莉鈴が一人でいたのも、弁当を食べないのも、お前を待っていたからに決まってるじゃないか」

ふと、桜庭のメールを思い出した。と、同時に微かに体温が上昇するのがわかった。

待っていたのかこの僕を、

君を血まみれにしたこの僕を、

君を血まみれにしても尚、

僕にそんな言葉を、

僕にそんな笑顔を、

君は僕に向けてくれるのか。

「本当に、待ち焦がれていたんだからな」

「ん、悪い」気がつくと鼻の頭を掻いていた。

「ずっとずっと、莉鈴は待っていたんだからな」

「ごめん」

「じゃあ、いただきます！」

「じゃあ、はい召し上がれ、って……」

え、莉鈴さん？

今、何と？

何と仰いましたか？

「おおつ、タコさんウィンナーは弁当の定番だな！ なあなあ、すけあくろー、厚焼き玉子の味付けは塩？ それとも砂糖？」

莉鈴さん、僕の弁当にむしゃぶりついてました。

莉鈴さん、僕の弁当にむしゃぶりついてやがりました！

プロローグですらないメランコリー 6

僕は、魔術師の手によって獣を宿された。

自らも獣と称した銀色の魔術師は、その銀色に輝く自身の相似形を僕の右手に刻印し、獣の正体を暴く魔法の言葉を僕の耳に吹き掛け　そして僕は魔術師そのものになった。

僕に宿された獣は、それ呼び起こすことに抗うことのできない、快樂という名の毒を牙に湛えていて、ときどき滴り落ちるその毒は緩慢にしかし確実に僕の身体を蝕んでいった　やがて僕は、獣を呼び起こすことに何の銜いも覚えなくなった。

これが、僕と江戸川・フルフル・莉鈴とを引き合わせる切っ掛けとなった大まかな経緯である。

ぞんがい 存外にして外連見のある表現になったけれど、致し方ない。

夏休みの話だ。

あれから一ヶ月と少し。

江戸川・フルフル・莉鈴との出会いに至っては、一月も経っていない。

ことの顛末を詳らかにするには、僕にはまだ時間が必要だということとはわかっていて　わかってはいるのだけれど。

「なあ、すけあくろー。莉鈴は月見うどんとプリンが食べたい」

こう邪気の無い笑顔を見せられて、物腰が日和っている彼女を目の当たりにすると、まあ色々と思うことが無いわけでもない。

「僕の弁当を奪った拳句、まだお前は食い足りないのかよ……」

だから、そんな僕は莉鈴に悪態をつきながらも財布の中身を確認していたりする。

なんだこれ、レシートしか入ってねえ……。

平気で下手をやらかすうっかり者の姉を素直に呪いつつ、莉鈴のために小銭を漁るのはもちろんやぶさかではないわけで。

つまり、有り体に言うならば　恩田崇は江戸川・フルフル・

莉鈴に感謝しているということだ。

獣は赤い竜に助けられた。

赤い竜に獣は許された。

だけど、そうした押し付けがましい僕の気持ちを莉鈴は慮るわけでもなく、おもんばか

「何だ、すけあくるー。金が足りないのか？　だったら莉鈴は良い。お前の好きなものを食べ」

と、自分のことは顧みないで僕のことを気にかけるのだ。

まったく、これじゃ僕の立つ瀬が無い。

「じゃあ莉鈴こうしよう……、お前が月見うどんとプリンを頼む、だけど月見うどんとプリンを食べるのは、僕とお前だ」

「おお、良いなそれ。共食いつてやつだな？」

「まあ、莉鈴が伝えたいことは何となくわかるけれど」僕は苦笑を浮かべて、椅子から腰を浮かせた。その苦笑が照れ隠しを伴っていたのは、言うまでもない。「割り箸とスプーン、二人分貰わないとな」

昼休みが半分ほど過ぎたにも関わらず、学食の空席は相変わらず皆無だったけれど、そこに立っているのは僕くらいのものだろう。テーブルに座っている生徒たちの視線が、僕と莉鈴とを交互に向けているのが気配でわかった。何とか気恥ずかしいものがある。と、いうか　廊下で席待ちをしている生徒たちの視線がクリティカルに痛い。だったら譲るなよ、と非難をしたい心持ちはある。確かにそれはあるのだが。彼らが列を譲ったのは僕のためではもちろんないし。あのA定食を完食はおろか、あまつさえ箸もつけていないような状態でカウンターに持っていく羽目になった某生徒の英断は、もちろん僕のために下されたものでもない。ようするに、彼らを非難する立場に僕はいないわけだ。そう、まるでお嬢様に跨がれた馬になったような気分である　跨がれたから仕方なく来たようなものです。どうかそんな目で僕をねめつけないでください　みたいなの。やるせない。

そういつた僕と莉鈴との温度差をダイレクトに肌に感じつつ、僕はカウンターに身を乗り出して頬杖をつきながら月見うどんとプリンを待っていた。

「とりあえず頑張んなさいよ」などと、なんとも恣意的で、ある意味鬱になりそうな励ましの言葉と一緒に、学食のおばちゃん^{どんぶり}が丼に卵を二つ落として、それから僕に月見うどんとプリンが載せられたトレイをおもむろに差し出した。「女の尻に敷かれるくらいが丁度良いつて、おばちゃんは思うんだけれどね」

「エスパーですか？ あなたは……」
と。

僕が苦笑を浮かべたそのときである。

「見たぜ^{まなこ}、眼にドリルで穴を穿たれるくらい見ちまったぜ^{まなこ}？」
聞き覚えのある声とともに、ふと、右肩に圧力を覚える。

思わず振り返られずにはいられない。

「ちよつ、お前……、桜庭と一緒にじゃ」

「二進数――！」

そんな意味不明な雄たけびを認識した瞬間
両目に激痛が走った。

！？

「いつつつつてえええええつつつ――！」

「をおおおお――！」

指が勝手に目蓋を塞いだ。

暗転した視界に光の残滓が散逸する。

痛みは直ぐに引いた。

ゆっくりと目蓋を開く。

視界が広げた先には。

ぼんやりとした境界が鮮明になったその先には

「とんでもないことをした。今、凄く後悔している」

僕に土下座をしている幼なじみの姿があった。

ブローグですらないメランコリー

土下座という殊勝な態度をとっているありすに反して、僕の心中は安穩としたものではなかった。ぶっちゃけ 憤懣やるかたない心持ちである。しかし、これ以上衆目に晒され続けられては辛いものがあるのもまた事実だ。僕はやんわりとありすに立つように促し、それから紳士的に彼女の手をとって補助を努め、彼女が立ち上がった旨を確認したあと、スカートの埃を真摯に払ってやった。

ありすを元いたテーブルへ僕がエスコートしている間、彼女は終始うつむきっぱなしだった。凹んでいるのではないあいつはこの上なくリノリウムが好きなのだ。と、自己暗示。そうでもないと言っ
てられない むしろ僕がやられてしまう。精神的に。

「ゆるひてくれりゅ？」

席に座るや否や、ありすは瞳をうるうるさせて追い討ちの懇願。
衆目にプラスの補正効果。

説明するまでも無い 月見うどんとプリンが載せられているトレイを、己の胸元に手繰り寄せているあの食いしん坊だ。「すけあ
くろー、こいつ泣いてるぞ。許してやれ」

「仕方が無い」やれやれ、と僕は深く嘆息する。「次からは少し手
加減してくれ」

！？

僕の含蓄のある言葉尻に、ありすの泣きつ面の顔が変化の予兆を
見せる。

ほら見たことか あいつは本音を突っつかれると右の眉が少し
だけ吊り上る。

もつとも、僕しか知らない僅かな変化だけだ。

「わざとじゃないもん」唇を尖らせながらありすは言った。「祟を
驚かせようとしたただけだもん」

僕は静かに黙秘を貫く。

頬を突つつこうとしただけなんだもん。

狙ってやったわけじゃないもん

「なあ、すけあくろー？」

莉鈴の声に、僕は視線だけを動かす。彼女は小首を傾げて所在無
さに割り箸を宙に停滞させていた。

そろそろ頃合か　僕はもう一度だけ嘆息をして笑顔を取り繕う。

さあて……、

ありすさん。

月見うどんが伸びきってしまう前に、とつとケリをつけようじ
やないか。「わかったよ」

「わかってくれた？」僕の柔和な物腰に破願一笑するありすさん。

「ああ、わかってるさ」僕はそんなありすさんに鷹揚に頷いた。

そして、

「お前に悪意があるのは充分わかってるんだコノヤロー！　今度こ
んな真似をしたら本気でぶつとばすぞ！！」

と、毒づいた。

一瞬の静寂。

それを振り払うように、ありすはツインテールの髪をぶおんぶお
んと掻き乱し席から立ち上がる。固く握り締めらた左右の拳が、わ
なわなと震える振動を全身に加速させている。彼女の白い皮膚が少
しずつ激情の色に染められていくのがわかる。不機嫌オーラが静寂
した空気を綺麗にラッピング。羞恥に結ばれた唇なんて酷い有様だ。
ほらほらありすさん本音がだだ漏れていますよ。

空気に触れて酸化した真っ赤な真っ赤な鉄臭い本音がね。

そう僕がほくそえんだ瞬間。

空気が　爆ぜた。

「だからあれはフラックだったんだってば、意地悪！」

「お前はまごうことなきブラックだよ、性悪！」

うぎにににiiiiiiiiiii！

食堂に木霊する二つのハーマーモ二ー。

額の皮膚を重ね合い沸き上がる感情を擦れ合う、幼なじみ二人。
そんな僕たちを、不思議そうに見上げる莉鈴さん。

そして、にっこりと交互に箸を動かして彼女は言った。「お前ら
仲良いのな」

悪いわ！

恩田崇と夢枕ありす。

そんな

どうしようもなく噛み合って、

どうしようもなく噛み合わない二人だった。

プロローグですらないメランコリー 8

夢枕ありす。

幼なじみである。

幼なじみ　この言葉を聞くと世間は典型的な類型（有り体に言えば漫画やアニメに登場する幼なじみキャラというやつだ）を往々にして想像してしまいがちだけれど、しかし、世界広しといえど、本気で殴り合いの喧嘩をした幼なじみは僕とありすくらいなものだと思う。それを鑑みてみれば、世間の妄想に近いそんな関係に相對して、現実が期待値を上回ってしまった好例といえるかもしれない。なにをいわんやあにはからんや。

夏休みの話である。

僕という原罪に^{けもの}触れ、闇の奥深く　精神の深淵に抑圧された大罪を地上に曝し出すことになった一人。

ありすが曝し出したのは　嫉妬。

彼女もまた悪魔に魅入られた一人である。

悪魔に魅入られたが故に、彼女もまた悪魔に憑かれた。

嫉妬に比肩する悪魔は　リヴィアタン。

そう。自らをリヴィアタン（いささか語弊あり）と称する悪魔と僕は対峙したのだ。

あつはーん　呼ばれて飛び出てシャララライン　嫉妬の

権化リヴィアたんがあ、崇きゅんの心をひねって捻って渦巻いてあげる。

はい回想終了。

だって仕方ないじゃん。

所見であの衝撃だぜ？

思い出すのが辛すぎるってーの。

ありすが馬鹿なのはもちろんわかっているけれど、なんというか馬鹿のベクトルが違うっていうか……。

「あによう」

嘆息してありすを改めて見る僕に、彼女は抗議の視線でそう応える。

「いや、あいっもありすなんだなって……」

「はあ？ 意味わかんない」

さっきまでの険悪な雰囲気はどこへやら、ありすは僕たちと同席するのが当たり前というふう^{じやくじやく}に綽々とした態度をとっていた。あまつさえ割り箸まで握っているオマケつきだ。

「お前、桜庭と一緒に昼メシ食うんじゃないの？」僕は、ありすから割り箸を奪い返す。「こちらは食糧不足に喘いでるんだ。お前に恵んでやる余裕は無い」

そんな僕に、ありすは頬を膨らませるという仕草で応えた。

「なあ、すけあくろー。うどんが伸びてしまうぞ？」

「ああ、悪い莉鈴。それじゃあ食べようか。っと　その前にトレイを僕の方へ近づけてくれ。このままじゃ僕の腕が伸びきってしまいそうだ」

莉鈴はこくりと頷いてトレイに手を掛ける。「ほら。すけあくろ

ー、受けとるが良い」

「献上の品しかと承った」

そう言って手を伸ばしたのは僕ではない。ありすだ。

恭しくトレイを受けとろうとするありすの頭頂部に、すかさず拳骨をお見舞いする。軽快な殴打の音と共に、星が散りばめられたのはきつと錯覚だろう。ごろごろとした違和感に苛まれた眼球は、まだ目蓋に優しくされたいと思っているらしい。

「何すんじゃー！」

「それは僕の台詞だ！」僕はありすに怒鳴ってからトレイを引き寄せる。「まったく……、油断も隙もあつたもんじゃないな」

まあ、油断も隙もあつたから、僕はありすに目潰しをお見舞いされたわけだけど。

「別に食べようとしたわけじゃないもん」

「じゃあ、どうするつもりだったんだよ？」

「食べさせてあげようと思ったの」

「は？ 誰に？」僕は訊いた。

「誰につてゆーか」「唇を尖らせたありすは、上目遣いで僕を見つめる。黒に比重を置いた眼球が右往左往。どうやらありすさん何かを逡巡している様子。それからややあつて小首を傾げながら彼女は言った。「ステンレス製の胃袋を持ったときウェットな人？」」

それたぶん人じゃないし！

もしかして、捨てるつもりだったのかよこいつ……。

だったら尚更たちが悪いじゃないか。

ささやかな疼痛ようとうを覚えた僕は、思わず額に手のひらを当てる。

「昼にお前と会つのは久しぶりだけど。それにしたって、いささか悪戯がすぎやしないか？ 例え幼なじみといえども 分別を忘れた悪戯は可愛くないぜ？」

まったく可愛くない。

僕にだけ被害が及ぶなら我慢もできるが あのときの土下座にしたってそうだ。他人を巻き込みすぎる上に打算があげすけなんだよ。

まあ、ありすのその傾向も昼休みに姿を現さなかったのも、いずれにしろ僕が起因しているのは概ね理解はできる。でも僕がいけ好かないと思つた以上、ここは訂正して然るべきだろう。幼なじみとしてのささやかな配慮だ。

僕が業腹だという癖サインをありすに送る。

「でも」と。そこでありすは唇を固く結び、それからおずおずと言葉を続ける。「ごめんなさい」

「他人を巻き込むのは、これで最初で最後だ」

「うん」

「約束はできる？」

「うん」ありすは慇懃に首肯する。「今度からは崇だけにするね」

いつか刺されちゃうかもね僕。

そんな洒落になりそうもないジョークは腹の奥底に仕舞って、僕は「うん、まー、そうね」と適当な相槌を返す。まあ、ここまですが現状でとりうる最適の妥協案といったところか。本当は色々と訂正したいんだけどね。

ヤンデレありすさんはあの夏でもう懲り懲りだ。

ちらちらと莉鈴に目配せをするありすを、苦笑混じりに僕は眺める。

ありすの中にいた悪魔は消えた。

でも、消えたからといってそれはいなくなっただけではなく。僕の中にいた獣と同じように、彼女のそれもまた自身の一面にすぎない。僕たちが死に至らない限り、そいつらは決して消えることはないのだ。認めるか認めないか　この明確な差異が悪魔を手懐けるコツだと僕は思う。認めた上で、それを受け入れるか否かは個人の勝手だけれど。少なくともありすはその両方を肯定した。まあ、だからこそ今のありすが継続中なわけで、奇しくも僕は十数年のときを得て彼女の本物にお目にかかったわけだ。まったく頭の痛い話になるのだけれど、こればかりは仕方が無い。愚鈍な自分を呪うしかなかった。

それにしても　あの夏に出会った他の連中といい、それに桜庭にせよありすにせよ、どうして僕の周りには腹に一物を抱えた人間が集まるのだろうか。

僕が思索に耽ようとしたそのとき。

ふと、朝のホームルームのことが頭を過ぎった。

そういえば……、あのとき会話した莉鈴って黒い方の奴だったよな。

「ん、どうした？　莉鈴の顔に何かついてるか？」

ブローグですらないメランコリー 9

「うどん汁がしとどについてるよ」

「ん、そうか。すけあくるー、悪いが拭いてくれないか？」

訥々と評価を下した僕に、莉鈴はさもありませんとばかりにテーブルから身を乗り出して顔を近づける。莉鈴の腕に挟まれているように佇んでいるのは、あれだトレイというやつだ。井の縁にはうどんの切れ端がでろりと飛び出ておりその先端から何やら汁を出している、溺れかけた人間がぐったりしている感じに見えるのは、何だ僕の妄想か？

「あ、あの莉鈴さん　今何と？」

「拭いてくれないか？　と莉鈴は言った」

「いや、そんな小説の一文みたいなのやつじゃなくて……、今何て僕は言ったかって、僕はそれを訊きたかったんですけどっ！」

「？　可笑しなやつだな」

「あ、あ、あたひが　ふふふいてあげゆっ！」

「ん、そうか悪い。お前優しいな」

「きやきやきやきやん違いしにやいでよね！　よね！　別にあんたによために……、あんたにやんかのために、やりゆんじやにやいんだかりやつ　！」

りや　！

そんな雄たけびに、混濁した思考が次第に鮮明になる。

どうやら僕は正気を失っていたみたいだ。

ドグラマグラでも読み耽っていたのだろうか？

いや違う。ここは学食だ。僕は昼メシを食いに来たのだった。

確か僕は莉鈴のリクエストに応えて。

月見うどんとプリンをおばちゃんに注文して。

卵を二つのつけてもらって。

それからありすとすったもんだして。

え？

「あの莉鈴さん。僕の、僕たちの月見うどんは？」

今度こそ本気で冷静になった。

いつの間にか莉鈴に引き寄せられたトレイをぼんやりと眺め
いや、直視できない。だってそうじゃないと確実に僕は死ぬ。

「ほひるほひへなひふあらふつふえふいふあつふあぞ」

「た、崇つ。じゃ邪魔しないでよね！　わ、私だって好きでこんな
ことやってるんじゃないんだからっ！　別にあんたに触れて欲しく
ないって思ってたわけじゃないからそこんと勘違いするなあ
っ！」

ありすの捲くし立てるような剣幕はともかく、莉鈴の言葉ははっ
きりと聞き取れた。もはや言葉としての体裁は皆無だったけれど、
莉鈴が何を言わんかは手に取るようにわかる　わからいでかつ。

というか　さっきまで顔についてたじゃん！

おびただしいまでのうどん汁がさあ！！

半ば生ける屍と成り果ててしまった僕は、さらながら死人遣いの
操る魔力で引き寄せられるかの如く、ゆらゆらとトレイを招き寄せ
る。

それから井を恐る恐る覗き込んだ。

旬を終えたプールの姿がそこにはあった。

言葉が出ない。

魂は出ているけれど。

どうやら莉鈴と再会した時点で、僕と昼メシの因果は断ち切れて
しまったらしい。まあ、ありすとのやりとりに集中していたので、
こうなったのは仕方の無いことだけれど　そんなことをぼんやり
と考えながら深く呼吸をする。

「ほら莉鈴、デザートだ」プリンが入っている容器を、僕は莉鈴に
差し出した。

「すけあくろー、食べないのか？」

「いや、僕はもう良いです」

「じゃ、じゃあ」「うどん汁が染み込んだハンカチをひらひらさせながら、ありすは言った。「あ、あたひが食べゆっ」

「もう好きにして」

椅子の背凭れに腰を沈めて、僕は天井を仰ぎ見る。気だるさはまだ身体に充填されたままだったけれど、不思議と悪い気はしない。笑い話の種になったと思えば安いものだ。

すけあくるー、か。

ふと夏休みの風景が、僕の眼球を通して天井に投影される。

ねえ、ねえ。かかしくん。

いや水色さん……、僕は崇ですって。

「ねえ 崇さあ？」

「何だよ？」目蓋をきつく閉じたあとで、僕はありすを見る。

「どうしてこの娘、あんたのことを、すけあくるー、って言うの？」目蓋に焼きついた人影は消えない。

「たぶん」「瞬きを数回繰り返して、僕は人影を記号に変換する。

「水色さんに関係してるのかも」

関係してるのかもだって？

まったく……。

存外にして歪曲わいきょくな言い回しじゃないか。

笑えてくる。

「ふうん」ありすは頬杖をついて僕を見据える。「村上先輩ね。すけあくるー、か。ああなるほどね」

「何だよ？」

「何でもない」ありすは嘆息をして椅子から腰を浮かせる。

あたかもその場から逃げようとするように。

あたかもその言葉が取り繕ったものだと言わんばかりに。

「さてと、あたしは灰霧かいむのところに行こうとするかね」

と、ありすは一人ごちる。

「昼休み終わりそうだけど？」

「なあに」にんまりと破顔してありすは言った。「オレサマオマエ

マルカジリってね。お弁当なんかものの三秒で沈めてみせるぜっ。
はっはっー」

「僕にも分けるよ」

「やだ」

僕が舌打ちをする暇もなく、ありすは身を翻し廊下へ走っていった。

振り子みたいに揺れているツインテールを目で追ったあと、僕は莉鈴の方へ振り向いた。

「じゃあ、僕たちも」

そこで目的があつたことにようやく気づいた。

プリンを食べている莉鈴に、僕はその旨を伝える。

もちろん莉鈴は快諾した。

カラメルソースがひりついてる彼女の唇が、美味しそうに見えるのは僕の錯覚だろう。

ブローグですらないメランコリー 10

「不思議　「桜庭灰霧^{かいむ}はそう囁いたあと、朶を挿めて文庫本をそつと閉じる。「どうしてかしら？」」

「ティンダロスの獵犬のこと？」

黒いセルフフレームに人差し指を添えた桜庭は、不思議そうに首を傾げた。

「朶の位置」机に載せられている文庫本を、僕は顎で指し示す。「いま、そこら辺じゃないの？」

「ああ　」と、首肯する桜庭。「そうね。でも残念、恩田くん。私が話したいのはそれじゃない」

「あ、そう。そういう話じゃないんだ」

椅子に腰を沈めた僕は、パンツのポケットに両腕を滑り込ませる。外に顔を向け、飛行機雲の軌跡を追った。その僕の姿を、廊下の硝子が冷たく反射していて、細長い無数の影がそこに同化しようと這い寄ってくる。否応なく、一日の終わりを認識させられる瞬間。

放課後。

僕と桜庭は黄昏に沈んでいた。

僕が黙っていると、桜庭は再び文庫本を手にとり、そして俯く。

桜庭が頁^{ページ}を繰る姿を硝子越しから大人しく眺める。

聞こえるのは、紙が擦れる静かな音と僕たちが繰り返す小さな息遣い。

そこはとても静謐^{せいひつ}に溢れている。

「それで、不思議って一体何のことだよ？」

桜庭の横顔に見惚^{みと}れていた自分を認めたくなかった僕のその問いは、自然と蓮つ葉な口調になってしまった。思わず僕は硝子から視線を外す。

「うん　」文庫本を閉じる乾いた音が空気に震えた。「どうして私たちには声が掛からないのかと思って。私にはそれが不思議」

「声って、誰から？」

「決まっている」

と。そこで桜庭は言葉を切った。

しばらく待ってみただけで、桜庭はそこから言葉を紡ぐとはしない。僕は肩を竦めたあと、窓硝子を介して桜庭の様子をそつと窺う。桜庭は僕の横顔を眺めていた。両手を組んで、組まれた手の甲に顎を載せて、じっと僕を見つめていた。

「何だよ？」と、おもむろに桜庭のほうへと振り返る僕。もちろん、その口調は蓮つ葉なことこの上ない。

桜庭と視線が重なる。

それを合図にして、ペーパーナイフで手紙を開封したような、僅かに薄く開かれた桜庭の唇から静かな息が漏れる。仄かに甘い匂いのする吐息に思わず眉を顰め、かろうじて拾い上げた桜庭の言葉を僕は反芻する。

軽い疼痛を僕は覚えた。

こいつ本気で言ってるのか、という気持ちが半分。

こいつなら本気で言いそうだ、という気持ちが半分。

だけど、いずれにせよその言葉が桜庭灰霧という個性を如実に表しているのは明らかだった。冗談にしろ本気にしろ頭が痛くなるのは至極当然のことだ。

やれやれ、と僕は方を竦める。

「私たち、ってことはさ」「嘆息をしつつ、僕は再び外のほうへと顔を向ける。「もしかしたら、僕もその中に含まれている？」

「当然」

「あ、そうっすか」

まったく、やれやれだ……、本当に。

正直、頂垂れたい気持ちで心が一杯だ。

どうしてこんな奴を、僕は友達に持ったのだろうかと思う。

そう思いながら桜庭との馴れ初めを回想 苦笑。

ああ、そうだった、こいつはこんなやつだったな、と再認識。

改めて桜庭の漏らした吐息から件の異物を抽出する。

ああ、ヤバイ笑えてきた。

やっぱ本気で言ってるよこいつ。

まったく……、甚だすっぱいことこの上ない。

桜庭灰霧が転がした果実。

僕が拾い上げた異物。

それは。

秘密結社だった。

ブローグですらないメランコリー 11

「 どう思う? 」

「 いや良くわからない 」

課外活動申請書と銘うたれたB5サイズの用紙を凝視したまま、僕は桜庭の質疑に応答する。もっともそれまでの間に、僕は思い出へと旅して一時的な停止状態へと陥っていたわけで、桜庭の言葉（トリップ）例えそれが文字列にしろ周波数にしろ）に反応するにはそれなりの時間を消耗したはずだと思う。まあそのおかげで僕の精神はトリップすることはなく、桜庭の提示した言葉を理解し尚且つその意図を汲むことができ、結果僕と莉鈴が置かれているこの不可解な状況を冷静に分析できたというわけだ。しかし分析はできても、やはりわからないものはわからないのである。桜庭が何をやりたいのかはわかるけれど、それについての感想を求められても、もう僕にはわからないとしか言いようがなかった。

そう。

秘密結社への入会 それが、僕と莉鈴が実習棟へ呼び出された理由だった。

そういうわけで実習棟である。

僕と莉鈴は、桜庭の半ば脅迫じみた提案に従うようにして実習棟のとある一室に腰を据えていた。一時期コンピュータ研究会として名を馳せていたこの部室も、今ではタワー型のパソコンが一台とそこに傾いているキーボードを残すばかりでもはや見る影もない。かつての喧騒、いや打鍵はどこへやらだ。いやなんでも N島という二年生が悪魔を召還するプログラムを開発したおりに部室が半壊しその責任を問われて研究会は解散した、と生徒の間では真しやかな噂が流れているが どうだろう。真偽のほどは定かではない。

「 まったく、根も葉もない噂。コンピュータ研究会は部へと昇格して、ただ単にお引越したただけ。ゲームのキャラクターを使って勝

手な妄想はしない」

「妄想なんてとんでもない。これはオマージュですよ、桜庭さん」
などという意味のないやり取りをしつつ、僕は壁に掛けられている時計仕掛けを盗み見る。

分針は見事に前進していた。

なるほど僕が放心していたのは十分弱か。

B5サイズの用紙に記されている文字列を改めて確認し、僕は軽く咳払いをする。

「つまり桜庭的には 声を掛けられないならつくってしまえ、という発想なんだよな？」

「ご名答」

「で、課外活動として申請する腹積もりなんだぞつと、桜庭はそう考えているわけだ」

「的確すぎて賞賛する言葉も出ない。でもね、同時につまらなく思ったり」

いや、あんなものを思い出したらな ていうか。奇を衒った答えを導き出すほうがよっぽど難しいわ！

一体、僕に何を求めているんだお前は

「秘密結社とは何だ？」半ば不意を撃つ形で、莉鈴は僕の肩に顎を載せてきた。

「え それはまあ、フリーメイソンとかシオン修道院とかの団体、だよな？」

「概ね合っている。でも有名どころでつまらない受け答えね 嫌いになりそう」

「マニアック どんだけ僕に高度な受け答えを期待しているんだよ」

「せめてフリーメイソンをフリーメイソンリーと呼ぶくらいには」

ああ。

つまり、個人と団体とを混同するなつてこと？

細かいなあ。

ちなみにフリーメイソンは個人を指す呼称で、団体を指す呼称が

フリーメイソンリーらしい。

「しかし」「桜庭に向けられた視線を切り、僕は莉鈴を一瞥する。眉根を寄せる。そんなストレートなりアクションを莉鈴は維持していた。「有名無名いずれにしろ、名前を挙げただけじゃあお前はわからないよな?」

「ああ、わからん。さっぱりぱりぱりだな」
ですよね。

一般的な用語じゃないもん。

それに加えて、興味本位で調べた程度の知識しかない僕には、名前を挙げるくらいが関の山だ。漠然とそれが何なのかは概ね理解しているけれど、莉鈴にわかるように説明するのは、とてもじゃないが僕にはできそうもなかった。だから莉鈴があんな顔をするのは、まあ無理もない。

再び桜庭へと振り返った僕は、お前が説明しろよな、とそんな意味合いを含めた露骨な視線を彼女に送る。

「面倒」

露骨に厭な顔しやがったよこいつ。

「せめてどんなものくらいかは説明してやれよ。僕の知っている桜場ならそんなの簡単だろ。僕じゃあ無理だ知識が浅いからな」

とりあえず桜庭さんを持ち上げてみる。

しかしそれで上手くいくかどうかは桜庭次第だ。

こいつ変なところで気まぐれおこすからな。

僕は黙って桜庭の様子を窺う。レンズの奥からは芳^{かんば}しい色は見られない。

やれやれ、もう少しだけ桜庭を持ち上げてみますか。

かつて魔法使いだった僕の高度な呪文を諳んじてあげよう。盛り上がることを請け合いだ。

これで反応が無かったら仕方がない。

「桜庭さん?」

囁き……。

「よいしょっ！」

詠唱……。

「頼むぜオカルトクイーン！」

祈り……。

「来たか？ 来たか？ 来たんだろ来たんだよなあ！？」

念じる！

「やらいでかつー！」

ハイになった。

もちろん僕ではなく桜庭が。

瞬間、桜庭の眼鏡レンズに照明が反射した。

おおっ！？

その光景にただならぬ雰囲気を感じた僕と莉鈴は、思わず歓声を上げその声をハーモニクスさせる。

「仕方がない」腕を組んだ桜庭は不敵に笑う。黒いセルフフレームに添えられた人差し指が妙に心強い。「では、フリーメイソンリーを例に挙げて、江戸川さんの疑問を詳らかにしようと思う」

「頼むぞ桜庭」

スイッチが入った桜庭を見て、僕は安堵の拍手かしわでを打つ。正直、片足をつ突っ込んでしまっている僕としては、この手の話はまんざらやぶさかではないと思っている。というより寧ろ期待さえしている。桜庭の蒞蓄うんちくはそれはもう大したものだからな。暗黒情報オカルトには事欠かない。それが桜庭灰霧という存在おんなのこである。まあ秘密結社なるものがそこにカテゴライズされているのは、いささか偏見気味ではあると思うのだが。しかし物事を広義でしか認識できないのは往々にしてあるものだ。まあこれは桜庭の受け売りではあるのだけれど……。おもむろに椅子から腰を浮かせた桜庭は、クリアボードに向け歩を進める。それから振り返ってひとくさり僕たちを見回したあと、首肯してからマジックを握る。白いアクリル板に黒い線が描写され、やがて二次元のピラミッドが構成ビルドされる。

「ああ、あのシンボルマークか」

ピラミッドの中心にある異物を視認し、僕はぼんやりと呟いた。

「江戸川さん見える？」

「莉鈴のことは莉鈴と呼んで良い　えっと」

「桜庭灰霧。灰色の霧で灰霧。私のことも灰霧で良い」

「そっか。じゃあ灰霧よろしくな」

「よしなに　」

「ところですけあくろー、見えないんだが」

とそこで莉鈴さん、灰霧ではなく僕に声を掛けてくる。さっきの莉鈴と桜庭のやりとりで得心した僕は、おずおずと慎重に顔を莉鈴に向ける。向けるが、如何せん距離が近すぎて莉鈴の体温が僕の鼻先を翳める。というかこいつまだ僕の肩に顎を載せていたのか。あまりに自然すぎて気づかなかったよ。まだ耳がこそばゆい。

「莉鈴、離れれ」莉鈴から顔を遠ざけて、僕は言った。

「わかった。じゃあ今度はすえあくろーが、莉鈴の肩に顎を載せれ」
「どうしてそうなる？」

「借りたものは返さねばな」

「バカップル」そんな呟きに僕は慌てて振り返る。桜庭さん、どうしてか目が据わっていらつしやる。「ちよつとした知り合い、ね。その言葉の認識を私は改めるべきなのかもしれない」

「ち、違うんだ桜庭」

「否定してもらっては困る。証拠は拳がつてるのよ、恩田くん」

「え　証拠つてお前まさか……」

「良い写真が撮れたわ」ふふん、と桜庭はせせら笑い。手にした携帯電話を撫で擦る。「恩田くんと莉鈴さんがぺろちゅーしてるとこ」

「いや、桜庭さん。事実を捏造しないで下さい。鼻先がちよつとだけ触れ合っただけだろ？」

「いや、私からは見えないし」それに　と桜庭は言葉を結ぶ。「

歴史は勝者が刻むものだから」

「ただだけ暴君なんだよお前は。とりあえずそれは消去してくれ。万が一ありすにでも見られることがあつたら命が幾らあつても足り

ないからな。そいつだけは本気^{ガチ}でヤバイ」

「私もそう思う」桜庭は慇懃そうに首肯する。「取引材料にしてはいささかスパイスが効きすぎている」

黙々と携帯電話を操作している桜庭を見守る。

「さて仕切りなおし」携帯電話を制服のポケットに仕舞う桜庭。「どこまで話してたっけ？　フリーメイソ^{くだり}ンリーが大工の集団を起源とした秘密結社である、という件辺り？」

「はしょってるんだかいらないんだか微妙だなそれ　まあ桜庭はとりあえず何も喋ってねえよ」

「もうぶつちやけ面倒」

「何故にいきなり機嫌を損ねる？」

「わからない。でも、興ざめであることは明らか」そう言って、桜庭はセルフレームに人差し指を添えて小首を傾げる。本当にわからない、そんな不思議そうな表情だった。「まあ気が向いたらいずれ話してあげるわ。ごめんね莉鈴さん？」

「うむ、灰霧がそう言うなら仕方がない」そう莉鈴は頷いて、それから僕が持っているB5用紙を取り上げた。「とりあえず莉鈴は、これに莉鈴の名前を綴れば良いのだな？」

まあそれが目的だからな、と僕は心の中で相槌的な言葉をつくる。

「しかしこんな怪文書じみたもの実際通るのかね」

「びつくり」そんな言葉に僕はB5用紙から視線を外して、桜庭を見た。首を掴まれた猫みたいに瞳を大きく見開いている。「恩田くん、それは乗り気な発言だと私は受け取るけど？」

「賢しいなお前。だけでももちろん乗り気じゃないよ、こんな出鱈目^{でたらめな}な申請じゃな。でも、まあ僕の選択は多分間違っていないと思う。

僕をだしにして呼び出した過程はもちろん気に入らないけれど」そこで僕は一呼吸置いた。ふと思考にざらざらとしたノイズが混じる。教室の隅で黙々と頁を繰る桜庭^{レフリカ}の姿。ああ、そうだったけ　声を掛けたのは僕が最初だったな。「しかし　アグレッシブな桜庭に従うのは悪くはないさ。どうせ帰宅部で暇なわけだし。で、僕たち

は
一
体
何
を
や
る
ん
だ
？
」

ブローグですらないメランコリー 12

「何で僕はこうお人好しなんだろうな？」

課外活動申請書を^{すが}眺め見て僕はそう一人ごちる。

申請書に名前を明記した僕は、桜庭の言うがままに部室（かつて部室だった 場所だけど）を出て、実習棟と教室棟を結ぶ連絡路をとぼとぼと歩いていた。もちろん、桜庭灰霧と江戸川・フルフル・莉鈴の名もそこに連ねている。あとは桜庭の指定した場所へ僕が赴き、そして然るべき人物にサインと印鑑を捺印してもらえば、見事この申請書はその体裁を整えるというわけだ。しかし幾ら体裁が整ったとしても、この申請書のしょんぼりさは何ら変わることはない。いや寧ろ、下手に体裁が整えられることで、しょんぼりさが一層際立つのではないかと僕は危惧してしまう次第である。

今はまだ決めてない、これから考える じゃねえよ。きちんと計画を立ててから僕たちを呼び出せよな。

とまあ、心の中で桜庭にどう悪態をついたところで、結局は僕も同じ穴の貉である。半ばノリに近い衝動でサインをしたのは僕だからな。いやあ、どうして思い出つてのはこう蜂蜜みたいにだだ甘く補正されているんだろうね。桜庭を文学少女^{なごいっぴん}だと思っていたあのころ頃が普通に懐かしいよ。

突き当たりに差し掛かったところで、僕は中央にある階段の踊り場へと向かう。教室棟へ繋がる連絡路は三本通っているが、僕が歩いているのはその端っこ、東側にある一つだ。ちなみにここは地上一階。生徒の間では『^{インフェルノ}地獄』と揶揄^{やゆ}されている場所だったりする。僕たち一年生がいる三階は『^{パラディソ}天国』と呼ばれているから、まあこれはシニカルな意味合いを含んだアイロニー的な表現だろう。尖ったセンスをしている 嫌いじゃないけど。

職員室を抜け踊り場に足を踏み入れる。ステップに脚を載せて、僕は煉獄^{ブルガトリオ}へと続く階段を浮かんでいく。二階に辿りついた僕は右折

しそのまま歩を進めた。『保健室』と白い文字で綴られているプレートを確認。ここを訪れたのは、入学して以来初めてのことだけれど、しかし保健室というのは僕の経験則からして普通一階にあるものじゃないのか？ 天国も地獄も、僕たち生きの良い人間にとってあまり歓迎できたもんじやないってことかね。どうせなら煉獄しにかけのほうはまだマシだと？ うーん、やはりこの学校からは全体的に尖ったセンスを覚えてしまう 笑えてくるくらい嫌いじゃないけどね。

僕は、保健室の隣りにある部屋の前で立ち止まった。白い文字列がひしめきあうプレートを見上げ、改めてB5用紙を眇め見てひとくさり躊躇する。ハブられるのはほぼ確定事項だけれど、ここまで来たからにはもう試して見る以外に僕に選択肢は無かった。

ええいつ……、ままよ

スライド式のドアをノックする。

数にして三回 完全無欠の完全数。トリニティ

しかし返事は無い。

「どうやら僕は屍ゾンビになったみたいだ。僕の前頭葉にゾンビパウダーを振りまいたのは一体誰だ？」

などと、辺りを見回しても誰もいない。当たり前だ今は放課後だからな。何というか色々な気まずさを抱えた僕は、とりあえず軽く咳払い。再びカウンセリング室のドアを眺める。

今頃の時間なら職員室にいるか、それとも帰ったんじゃない？

そんなテロップが蛞蝓なめくじみたいに愚鈍に思考を這い回っていたけれど けれども僕はドアの取っ手に指を掛けていた。

それが当然みたいに。

そうすることが必然のように。

さながら当たり前のように。

さながらうつつつけみたいに。

そのドアには鍵が掛かっていなかった。
ドアがゆっくりとスライドする。

また。

また僕は
な気がする。

迂闊にも、触れてはいけない因果^{いと}に指を絡めたよう

ブログですらないメランコリー 13

この学校にあるどの空間よりも、ここはその趣を異おもむきにしていた。有り体に言えばプライベートな空間といったところか。もしかしたら校長室がそれに近いかもしれない。いや、校長室なんか僕は入ったことはないけれど。まあとりあえず寛げるようにはデザインされているように思う。もっとも、その対称がこの部屋の主だけに限られている気がしないでもないが。

主の性格が昇華され具現化された空間を、僕は再び眺めてみる。部屋の中央には黒い革張りのソファが二つ相對しており、ソファに挟まれる形で木製のテーブルが配置されている。テーブルの上には先ほどまで閲覧していたのであるう、数枚の資料が無造作に載せられていた。宮部現実みやべりある とルビが振られている文字列を視認。恐らく、というかきつと東ノ園ひがしの生徒の名前に間違いない。そこから先はそれこそプライベートなもので、意味の無い文字列として呼吸と一緒に空気に昇華させた。

板チョコみたいに整然と並んだ書架に近づく。ざっと見た限りカウセリング室に相応しい書籍がそこには押し込まれている。ジークなんたら・フロイトやらカール・なんちゃら・ユングやらだ。その数ある書架の中に『ライ麦畑でつかまえて』のハードカバーが紛れ込んでいたのは、僕たちに少しでも近づこうと試みたこの主の名残だろうか。とにかくきちんと分類しなさい とりえず背表紙を奥に向けて突っ込んでやった。

やはり留守にしているみたいだ。主が不在の机を眺めて、もしかしたら、というそんな僕の妄想は嘆息とともにどこかへ掻き消えた。さて、これからどうしようか。職員室かそれとも実習棟か と僕が黙考しているとき、スライドするドアの無機質な摩擦音が鼓膜に伝播する。それからしばらくして、「煉獄に仔羊が一匹」と、いがらっぽいハスキーな女性の声が背中に這い寄ってきた。

肩に手を掛けられたような錯覚を覚えた僕は、そこに左手を当ておずおずと振り返る。白衣を羽織った黒いスーツ姿の女性と視線が合う。彼女は閉まりかけのドアを後ろ手で引いてこの部屋を完全な密室にする。そして、まるでそうすることが当たり前みたいにゆっくりと彼女は人差し指を僕に向けた。

「煉獄に仔羊が一匹だ　唇に当てた缶コーヒーの中身を音もなく嚙下して、その女性はプラスチックみたいな硬質な瞳で僕を見据える。しかし少年よ、何も悲観することはないぞ。君が思っているほど地上はそんなに遠くはないからな」

明らかに笑顔とは程遠い表情だった。これらなら、ありますが持っているビスクドールのほうがまだ愛嬌があるってもんだ。つまり僕は歓迎されていないってことだよな。さっきの彼女のジェスチャーから察するに、僕の第一印象は『最悪』と烙印を押されたようなものだし。もちろん、彼女の台詞に至っては、『この部屋から出て、とつととお家に帰りなさい』的なニュアンスを含めた迂遠な言い回しだろうと思う。ふむ、彼女も中々に尖ったセンスを持っていらっしやる　嫌いかどうかはまだ評価し辛いけれど。

「すいません。鍵が掛かっていなかったの……、つい」

「迷った」頭を垂れようとした僕を、やんわりと右手で諫め彼女は言う。「羊飼いの不在が、君にちよつとした懊悩を抱かせたわけか。悪かった少年。しかし僕もまた休息を必要とする身だ。とりあえず、ソファにでも腰を下ろして寛いでくれたまえよ」

「いや、あの……、勝手にこの部屋に入ったのを咎めていたのでは？」

「咎める？　僕が君をか？」女性小さく顎を引いて、眉根を寄せ、瞬きを数回繰り返す。それから何やら得心したように彼女は頷き、口の端を僅かに持ち上げた。「僕の心とこの部屋は、同じ定義で繋がっているのだよ。部屋に施錠がされていないという状況は、すなわち僕の心が少年に対して開かれている状態であるということだ。だから少年、君が気に病む必要は一切ない」

「はあ、そうですね」少なくとも僕を苛む言葉ではなかった事実、僕は安堵の呼吸を漏らす。

「座りたまえ」胸元で腕を組んだ女性は、僕をソファに座るよう顎で促した。「お茶でも淹れてあげよう。だが生憎コーヒ―は切らしている。緑茶で良いか？」

「いや、お構いなく」

「君たちに構うのが僕の仕事だ」

と、彼女はそう言い放って、立ち尽くす僕の横を通り過ぎようとする。そして、僕の肩と彼女の肩が交差する瞬間　彼女の視界と僕の視界が死角に入ったその刹那、彼女が立ち止まる気配を僕の皮膚は貪欲に感じとった。それから彼女は一言、「ふむ」と、たったそれだけ。たったそれだけを残して、彼女の気配は僕から遠ざかる。

まあ心当たりが無いわけでもない。

僕に近づく全ての対象が該当するとは限らないけれど、それを目の当たりにしたら、やはり大よそ気分の良い代物では無いのは明らかだった。思わずメラニコリックに陥りかねない。そんな危険な要素を孕んでいるのが僕の性質である。しかし、悪いことばかりじゃないってのが、せめてもの僥倖だと思ってもみたり。

「どうした少年？　浮かない顔をしているな」

「いや、冴えないだけです。気分はもうつきうきです。本当、月まで飛んで行きたいくらい」

「そんなに緑茶が好みなのか？」

「もう超好きっ」

ふむ、ありますが口にする分には問題ないけれど、いざ自分が口にする気恥ずかしいものがあるなこれ　あれ？　宇宙船射出装置は一体どこだったっけ？　月まで加速してみたいんだけど……。

「濃いのと薄いのと、どちらが好みだ？」

「濃いプロセスを希望します」

「変わった物言いだな？　今の若者たちの間で流行っているのか？」

「そりゃもう　指恋と同じくらいメジャーですよ」

嘘である。

恩田くん絶好調だ。脳を駆け巡る電気信号の流れは、シリアスからおバカへと順調にシフトしていた。

ソファに腰を沈める。

テーブルに載せられた資料を裏返しにして、机に置かれた電機コンロを眺めている女性を観察するセオリ。おっと、いけないなんちゃら語を頭から排出しなければ。

彼女からもつとも目立つ部位を挙げるならば、僕は迷わずその首を指し示すことだろうと思う。ポリウムのある栗色の髪は三つ編みで太く束ねられていて、恐竜の尻尾みたいに腰までぶら下がっている。ちょうどアルファベットのUを連想させる形だ。つまり、腰まであるのが終着点ではないってこと。そう。Uの字の軌跡は彼女の首をもつて初めてその終着点を迎えるのだ。

ぐるぐると　まるで、本当にそれが恐竜の尻尾ではないかと勘違いしてしまうくらいに。

ぎりぎりと。

ぎしぎしと。

みしみしと。

満ち満ちと。
くるくる

狂狂と。

彼女の三つ編みは自身の首を絞め上げていた。

彼女の端正な容姿が霞んで見えるくらいに、それは圧倒的な存在感を誇示していた。電気コンロを眺めている彼女から覚えた一瞬の既視感はどこへやらだ。ふむ、宇宙船射出装置はどうやら僕の脳みそに埋め込まれていたらしい。きっと月までぶっ飛んだに違いない。ということで彼女の観察はすぐに終わった。

しかし、目を逸らすのが何となく憚れた僕は、やかんが悲鳴を上げるまで彼女と一緒に電気コンロをぼんやりと眺める。その折に、ネームプレートに見覚えのある文字列を視認したけれど、見ていない見ていない。心のモザイクをそのネームプレートに投射する。

変人はあれ一人で充分だ。いや、寧ろあれは存外にして変態の部に当てはまるけれど。が、いずれにしろ僕はやはり触れてはいけないものに触れてしまったようだった。

ブローグですらないメランコリー 14

今の僕の挙動を敢えて挑戦的に例えるならば 隣りのおねいさんの胸部の膨らみにときめきを覚え始めた極々一般的で健康的な少年 といったところか。

もちろんこれは、主観的な思考に反映された現実逃避である。もし仮にこの僕の挙動を客観的に評価し得るならば、僕はすぐさま自己の妄想に意義を唱えて、真っ向から先生のたおやかでゆんゆんとした胸の膨らみをガン見するのは間違いないと思う。しかし、忸怩たる思いを抱えながら尚、僕は主観的な思考に身を委ねることしかできなかった。僕の視線が現実には漂うのを拒否っていたからだ。拒否っている上が故に、僕は図らずともキョドっている。つまり初心な少年を計らずとも演じている道化がこの僕なのだった。甚だ滑稽なことこの上ない。それもこれもあの変態外科医の先生が全ての起因だ。とりあえず呪ってやろう ドクロマーク。

「どうした？ 少年」

「いや、ちよつと思考で指恋を嗜んでいました。というか毒電波発信中です」

いささか常軌を逸脱した僕の言動にも関わらず、対面する先生は伶俐を彷彿とさせる無表情でお茶を啜っていた。苦笑を浮かべて、彼女が入れてくれた緑茶を僕も啜る。

「ときに少年よ」

「はい何でしょう？」

「先ほどから僕の胸が気になっている様子だが」

「ぶっ！？」先生からのクリティカルな指摘に、顔の穴かんはせという穴から緑色の汁が吹き出る。

「そんなに可笑しいのか？ 僕の胸は」表情を崩さないまま先生はこともあるつか、細身のシャツに拘束されても存在を強調して憚らない、たおやかでゆんゆんとしているその部位に右手を躍ら

せた。「そうか　僕もこの胸にはコンプレックスを抱えていてな」
ありますが聞いたら発狂してしまうぞそれ。などと、冷静な評価をしている場合ではない。明らかに勘違いしているのは明白だ。まあ先生の指摘はあながち的外れではないのだけれど、だからって捨て置くわけにもいかないだろう。このままだと、緑色の汁に赤い汁が化学反応して僕のほうが発狂してしましそうだ。だって今、驚が舞い降りてるんだぜ？　先生のたおやかでゆんゆんなあれにさ。
「いや、あの……、僕が気にしていたのは、そのネームプレートなんですけど」

そんなに可笑しいのか、僕の胸は　と、呪詛を呟きながら五指をわしわしと唸らせていた先生は、その動きを止めておもむろに僕のはうへと顔を上げる。疑問符を織り交ぜた先生の視線が皮膚に投射され、心臓は収縮と膨張を繰り返す。血液の流れは劇的に加速し、鬱血していた電気信号が体内を蠕動する。ぜんどう

「これがどうかしたのか？」眉根を少しだけ寄せて、先生はプラスティック製のそれを摘み上げる。

そして　思考の片隅で何かが爆ぜた。は

両目が、文字列の認識を開始する。

夢野かのん。

と。そのネームプレートには記されていた。

ああ、とうとう見ちゃったよ僕　どうしよう。

これじゃあ、思わず関連づけずにはいられないじゃないか。

脳内をリフレインする『おはいよー』の挨拶と一緒に某外科医の影に対面した先生を照らし合わせる。そして、僕は疼痛を覚えながら親近の物思いを彼女に重ねた。

「いや、素敵な名前だと思ひまして」などと、宇宙船射出装置の気まぐれに身を任せなくなる言葉を、僕はのうのうと諳んじる。

僕の心無い物言いにも、彼女は表情を崩すことがなかった。少しだけ変化があるとすれば、唇にマグカップを運ぶ回数が上昇したくらいだ。きつと、咽が渴いているか、あるいは彼女の勘違いはまだ

継続中でそのことを気にしているかのどちらかだろう。

しかし、あのときの気視感、やっぱり偽者じゃなかったのか。

そう僕は一人得心し、この場はお茶を濁す旨を密かに心へ宣言する。

「そ、それで少年。き、君が抱えている懊悩は、い、一体何なのだろうか？」

「懊悩ですか？」僕は二つの疑問に首を傾げる。「それよりも先生、なにやらだもっているみたいですけど……、具合が悪いのでは？」

「ぼ、僕は。ど、だもってなどいない。ば、馬鹿者……。ぐ、具合は、そ、その……。良好だ」

否定された上に馬鹿者扱いされた。しかし、具合は悪くないみたいなので良しとする。良いのか？

「で、懊悩って？」

「君が訊いてどうする？ まるで立場が違うぞ。君は懊悩を抱えて、僕の元へそれを吐露しに来たのではないのか？」

「いや、僕は桜庭に頼まれて先生にプリントを提出しに来たんですけど」

「桜庭？」先生は顎に指を当てて、逡巡するような物思いに耽る。

「少年。君が言っているのは桜庭灰霧のことか？」

「ええ、その桜庭です」

今までのやり取りで、何というか先生の性格の片鱗を垣間見たような気がする。実直というか、寧ろ天然と評したほうがしつぽり当てはまるな。まあ、先に用件を話さなかった僕にも問題はあるのだけれど。自分の胸を異性の目の前で驚づかみにする人間はそうそういないし。いや、たおやかでゆんゆんとした先生の胸は、おいておいて。

僕はテーブルを眇め見ながら、資料の隣にあるB5用紙に手を伸ばした。

それを反転させたあと、忸怩たる思いで先生の元へスライドさせ

る。

「先生に渡せば全ては十全に 桜庭はそう言っていました」

セラミックスのボールでなぞった憂鬱をトレースしているであろう先生に、僕がここを訪れる際、桜庭に吹き込まれた希望的観測を
ワイルドカード
空気に伝播させた。

僕たちを取り巻く空間は沈黙に綺麗にパツクされていて、その沈黙に耐えかね僕が焦燥を覚え出すまで、ゆるゆるとそれは維持されていた。

ブローグですらないメランコリー 15

海馬のクエリーへ、『宮部現実』というキーワードを戯れに打鍵してみた。

今まで蓄積されてきた映像やら会話やらがノイズに変換され、それはやがて寂寥感漂うシーク音へと還元される。

シーク音は悪戯に長い。

まあ宮部に関する記憶があやふやなので致し方ないことだけれど、何分稀有にしてインパクトあるのが宮部の姓だ。僕の海馬が例えばぽんこつ仕様だったとしても、よもやレスポンスがないとは思えないが。

ずるずる。

ずるずる。

と。

対面する先生、夢野かのんの様子を窺いながら、僕は緑茶を音に乗せ嚙下する。先生は恐竜の尻尾みたいな極太の三つ編みに顎を埋めて、件のしょんぼり文書を見下ろしていた。

マグカップのお茶はこれで三杯目だけれど、彼女からの応答は未だにない。さすがに焦燥を禁じ得ない僕なのだが、臨界にきているのは尿意ではないのか？ と緩やかに蠕動する下腹部がそれを暗に示唆しているような気がしないでもない。結局、どちらとも判断がつかない僕は、何かを急かすように小刻みに運動を繰り返している両脚を弛緩させるべく、こうして思い出に耽る心算に至ったのである。

しかし、こうして泥濘とした記憶に浮かんでいると、僕の海馬が溜め込んでいる思い出は、その殆どがありすと揃姉に占められているのがわかる。何というか、蜂蜜に漬かっている檸檬にでもなった気分だ。ただ甘なのに抜け出せない、そんな酸っぱい僕の生き恥。

皮膚の体温が上昇するのを察知したので、海馬のレスポンスの遅

さに業を煮やした僕は、大人しく自ら過去へ遡行することに決めた。しばらくすると、ようやく海馬から『もしかして：ベリアル』と、まるでフライパンの底を眺めているみたいなの、どす黒な暗黒情報を送信された。いや待て。僕には悪魔の知人はいないぞ。悪魔な友達は少なからずいるけどな。そう益体もない突っ込みとフォーローを交え、海馬からの送信を拒否^{どすこい}。引き続き泥濘^{ぬかるみ}の深淵へと意識を埋没させる。

砂嵐がふんだんに塗^{まぶ}された映像と音声^{へび}が色彩を失った鱗へと変じ、時系列を無視した連結する集合体となつて意識に纏わりつく。意外なくらいの情報量の多さに辟易としながらも、僕は懇切丁寧にその一枚一枚を剥ぎ取っていく。

その中に、宮部現実の面影があつた。

僕はその一枚を注視する。

首にヘッドフォンをぶら下げた目つきの鋭い女の子。

間違いない。彼女が宮部だ。

そう僕は確信し。

まるでありすがつけ爪を装着するみたいな気軽さで、僕は当たり前^{アート}に宮部が描かれている鱗をジャックする。

脳と視界が淡い白色に包まれる。

瞬間、白が黒へと反転。

それから、全身が嘘みたいに粟立ち。

そして、全身が感電したみたいに震えた。

暗闇が不気味に明滅する様は、僕が思い出に耽るのを明らかに拒絶している。

ここでもうやく、海馬からのレスポンス。

呼吸をするみたいに、嘘をつく

それが彼女を証明する個性らしい^{アイデンティティー}。

思わず軽く舌打ち。

だけど、それがほんこつな海馬に対するものなのか、宮部自身に對するものなのかは、良くわからない。

「これは僕が担当の先生に提出しておこう」

気がつくと夢野先生が僕を見据えていた。ようやく返ってきた先生の思ってもみないリプライに、僕はすっかり人間へと還ってしま

う。
先生は既にことを終えて、マグカップ片手にすっかり優雅に寛いでいた。

ブローグですらないメランコリー 16

温くなったお茶に手を伸ばしている、僕の二の腕が視界に入った。目蓋の裏にはさつきまで流れていたテロップが淡い残滓となつて蓄積されていて、センサーみたいな周到さで斑模様を二の腕へと投射している。まるで皮膚の上で苺をすり潰したみたいな赤色が散見している様は甚だ滑稽ではあったけれど、でもファンシーと揶揄するにはおこがましいくらいの様相をその赤い斑模様は不気味に演出していた。

僕が、過去の邂逅との接続に失敗したのは明らかだった。

しかし、そのことに疑問の余地を挟む暇は、対面する夢野かのかの言葉によつ如才なく塗りつぶされてしまう。零とも壱ともつかない宮部現実の果敢ない記号は、僕の無味乾燥且つ凡庸な返答によつて空気へと昇華され、皮膚との同化を拒絶していた夥しいまでの苺の種も、マグカップで数回唇を湿らせただけで跡形もなく消え失せてしまった。

手のひらから伝播する拒否反応を舌で転がしたあと、咽の奥へ流し込む。

これで綺麗さっぱり宮部現実を棚上げにした心算だったけれど、租借した携帯食料みたいな気の利かない言葉は只今咽頭にひりついて舌咽神経を絶賛逆撫で中です。

「どうした？ 浮かない顔をしているな」

「あはっ！ 冴えないだけです」

何？ このデジャブ と半ば憧憬に似た感情を抱きながら、僕はありす式笑つて誤魔化す作法を実践しその場を取り繕う。その他にも『ぐへっ！』とか『あへっ！』とか、あの幼なじみが持っている隠し玉は枚挙に暇はないけれど、ここはあえて地味な作法で相手を接待することにする。我ながら最適な選択である というか僕の頭がまったく最適化されていない。

やれやれと、僕は頭を掻き毟って反転反転されたしょんぼり文書を手に取る。それから口元に拳を当てて慇懃に咳払い。咽頭から迫り上がる言葉を舌で絡め取った。宮部の唯一の個性に毒されないよう密かに念じつつ瞬きを数回。視界を現実に着させる。もちろん、固有名詞じゃない『りある』なやつだ。

「安心して良い。少年が抱えているのはまったくの杞憂だ」せきばく 寂寥としていた空間に、先に水を差したのは先生だった。「担当の先生には既に話は通してある。例えどんな形式であれ、桜庭の意思は無駄にはならないよ」

「えっと」

先生の言葉を理解するのに、決して少ない時間が必要だった。僕が浮かない顔をしていたが故の先手を打った応えであるということとを、四杯目のお茶を淹れる道中でようやく僕は理解するに至った。先生が激しく勘違いしている感はあるけれど、まあ良いや。お茶請けにしては破格なサプライズには変わりがない。桜庭に持って帰るお土産としても万々歳だ。

いささか納得しかねるけれど。

「ようするに、これは確定事項だったわけですか？」

「肯定しよう」

「僕が、村人に酷使される勇者であるか？」

「いや、それはわからないが」

アンニユイな僕の言い回しに眉を顰めたあと、先生はしょんぼりじゃなくなつた文書を引き寄せた。そしてそれを四つ折にし、白衣のポケットへと刺し入れる。うーん、致命的にカタルシスが不足している。どうせなら、肌蹴たシャツの谷間に押し込んだりぎゅうぎゅうしたりするくらいの気概は欲しいものだ。いや、決して冗談だと言えないのが、何というか、心苦しい。とりあえずご不浄を拝借したい次第である。あ、これは冗談だけれど。

「それを見て、先生はどう思いました？」

僕は視線だけを白衣のポケットへ移動し、先生に感想を求めた。

正直、結果は既に出ているわけで、僕がこの場に留まる理由はないのだけれど。しかし、ソファに沈んでいる臀部はそうは思っていないらしい。まったく未練がましいくらいに正直な奴だ。そう僕は心の中で苦笑し、彼女から発せられる言葉を大人しく待つ。

「先行きが不透明な感否めない。だが、桜庭が重い腰をようやく上げたのは評価に値する」

「そうですか」

「なる、と僕は首肯する。共犯者じみた感想は期待通り。なるほど僕の慧眼はやはり的外れではないみたいだ。いや、慧眼を酷使するほど立派なものではないのだが。でも、白衣のポケットで悶えているあれはともかく、桜庭自身の評価を耳にしたのは思わぬ収穫だった。」

それに加えて

ぼく、いこーる、しょうねん。

さくらば、いこーる、さくらば。

で ほおう、である。

僕と先生が所見であるということを考慮しても、いやはや待遇の差は明確ですな。自ずと先生が桜庭を故意にしているのが、容易に想像がつく。しかし桜庭、意外なところで意外な顔を見せるものだ。まったく興味がつきない不思議少女である。僕の腰が重いのも頷ける。彼女もまた煉獄に迷い込んだ仔羊だったのか。

「少年」と、声を掛けられたので、僕は顔を上げて先生を見る。彼女は目を細めて物憂げな瞳で僕を捉えて離さない。それはこの先の言葉を否定させない輝きを内に秘めていた。「猫を被った道化になるのが君の望みか？」

「滑稽ですね……、それは」僕は苦笑を浮かべる。「僕だって信頼いのちは惜しいです。軽率でした余計な詮索をしたことは謝ります」

「桜庭の友達である少年だからこそ、踏み入れてはいけない領域がある。彼女に対する君の思いは尊いものだが、それは決して彼女のためになるとは限らないよ。今はそのパトスは心の中に仕舞って

おくことだ。いずれは桜庭のほうから歩み寄ることがあるかもしれない。まあそのときは彼女の相談に友達らしく気安く請け負ってくれ。だから、君のそのっ謝罪はありがたく拝聴しよう。桜庭に代わって、この僕がね。君は友達思いの良い奴だな」

と、先生はそう締めたあと、初めて僕に相好を崩す。

羞恥心を煽るその表情に、僕は思わず視線を逸らせてしまう。

まあ 彼女の大人な笑顔が魅力すぎた意味合いもそこには含まれているけれど。

まったく、何もかもお見通しな上に、そこはかとなく余計な配慮までしてくれる。

これじゃあ、あの変態外科医を彼女にたぞろ重ねてしまうではないか。

いやはや、本当に

「やっぱり夢野さんは夢野さんなんですね」

そう僕がばやいてしまうくらいに、夢野先生はどうしようもなく夢野先生なのであった。

ブローグですらないメランコリー 17

「すけあくるー、遅かったな」

「莉鈴さんに同じ」

ゆるい音楽に混じって、僕を苛む莉鈴と桜庭の声が重なる。

二人は僕に背中を向けたままだった。炬燵の中に潜んでいる猫みたいにごそごそと肩を蠢かせている莉鈴を桜庭は無表情に見下ろしていた。ようするに、僕なんか眼中にないという物腰を彼女達は提示してたというわけ。莉鈴の場合は携帯型ゲーム機にお熱なんだろうけれど、こと桜庭に至っては僕に課したミッションがやつつけ仕事だということを暗に示していることの表れだろう。

タッチペンをあくせくディスプレイに走らせている莉鈴を横目に、僕は嘆息しながら彼女の隣りに腰を下ろす。僕と莉鈴のニツチを埋めるように桜庭は納まっていて、ときどき短い声を上げながら莉鈴と一緒に遊戯を嗜んでいた。相変わらず顔^{かんはせ}に変化は見受けられないものの、愉しんでいる雰囲気はなんとなくわかる。

しばらくバンズとパティの良好な関係を維持した。

やがて携帯型ゲーム機から流れていたゆるい音楽は電子の世界に閉じ込められ、外部から漏れる運動部の声が次第に鮮明になる。『お疲れっした!』、と野太い周波数。それに呼応するように桜庭は咽を鳴した。「それじゃ、帰ろうか」

「そうだな」首肯してから、莉鈴は僕を見て頬をほころばせる。「莉鈴は腹ペコだ」

「僕のほうが腹ペコだったっの」僕は苦笑を浮かべた。「レシートしか財布に入っていないから、買い食いはできません」

「いっそ腹にベコでも飼ってなさい。非常食に。」

「何なら奢りますけど?」

「どうしたんですか? 桜庭さん、やけに慇懃ですけど」

「うーん」「桜庭は、セルフレームの中央に人差し指を当て目を

細める。そして、首を傾げて僕を見下ろす。「劳い？」

「いや、僕に訊くなよ」

「じゃあ、打ち上げ？」

「何の？」

「じゃあ底上げ」

「何を？」

「厭？」

桜庭は僕を見下ろしたまま、目蓋をそつと伏せる。半ば虚を突かれた形の僕は、人間であることを忘れ桜庭の睫毛の長さを測るメジャーに変わる。しかし遺憾ながら睫毛の震えを計測するのは不可能だった。そういえば桜庭に買い食いに誘われるのはこれが初めてだな。ありすか水色さんに誘われるのがデフォルトだったし。もっとも水色さんと付き合い出してからは、ありすとのその交友は途絶えたけれど。

おつと駄目だ　甘酸っぱい思い出に埋没しそうになる。

「そういえば桜庭。お前、ありすに変なこと吹き込んでないだろうな？」

「約束したから。私の提案に、君は応えてくれたでしょう？」

逆に聞き返された。

僕が無言でいると、桜庭は『いのちは大事に』、と静かに呟く。それから「余計なことは言っていない」、と一言。

「明日が楽しみだわ」

「どういう意味だそれ？」突然な物言いに、思わずすつとんきょうな声を上げる僕。やっぱり何か仕込んでるよ桜庭。

「じゃあ帰りましょう莉鈴さん」

「そうだなー。莉鈴は肉が食べたい」

「バンズで挟んだパティで良い？」

「というか僕、外連味がまされてるし」

「行かないの？」

「いや、そういうことじゃなくて　」僕はひとしきり嘆息したあ

と、椅子から腰を浮かせる。「ああ、もう。どうしても良いや。悪いが桜庭、僕は昼間から何も食べてないんだ。だから、そこんところしく」

「しこたま食べなさいな」

頬をほころばせて桜庭は首肯した。

一瞬だけ血行が良く見えたのは、錯覚だよな？

ブローグですらないメランコリー 18

駅前のマックからの帰り道、私服姿のありすと遭遇した。

ありすは僕のことには気づいていないらしく、自身の横幅よりも遙かに大きい紙袋を肩に掛けて、自慢（もちろん主観です。はい）のツインテールをぶんぶん躍動させていた。まるで機嫌が悪いモデルみたいな足取りで歩道を蹂躪している。アスファルトに負荷を強要しているのは明らかで、僕がいる位置からでもヒールに踏まれているアスファルトの悲痛な声が認識できるくらいだった。

ふと制服の奥から携帯電話が産声を上げる。パンツのポケットに腕を滑り込ませ携帯電話を取り出す。視線はありすを捕捉したままだけど、雑踏に溶け込んで姿を識別できなくなった。小刻みに震える感触を弄びながらサブディスプレイを視認。そこには、恩田揃音そろねという文字列を形作るドットが集積していた。

「あー、私だ。悪いが、今日は遅くなりそうだ。夕飯は一人で勝手に食ってくれ。私の分は作らなくて良いぞ」携帯電話を耳に当てると、滑舌の良い男前の声が鼓膜に響いた。僕の返答を待たずに揃姉は、「じゃあな」と通話を強制終了しようとする。

桜田門の諸君に属している揃姉のことなので、定時には帰れないという不確定要素は既知だ。それに揃姉の一方的な通話にも慣れてもいる。だけど、そのことを鑑みるにしても、僕が良い子ちゃん（もちろん、主観ですよー）でいるのも冷蔵庫と財布の中身がとても許してくれそうにない。

両者の寂寥感に駆られた僕は、下克上等な気概で揃姉にパシリを命じる。有能な腹心に囲われた有能でない重臣は、こうして乱世に翻弄されていくわけなのです。戯言にして嘘だけど。

冷蔵庫と財布の現状を説明した上で、揃姉に買い物を依頼する。揃姉は舌打ちをしつつ渋々承諾してくれた。まあもつとも、こういうことに至った起因は揃姉にあるわけで、僕がやんわりとお願いす

るのは的が外れていると思うのだけど、そこは両親不在の恩田家を支える大黒柱でおっとこまえなお姉様。ありがたくストレスを拝聴しつつ、それを脳内で洗浄して感謝の意に変換する。こうして良妻賢母な人間が形成されていくのですな。すわ戯言で嘘であります。

「しかし崇、お前今日の夕飯はどうするんだ？ 遅くても良いなら鰯でも持つて帰つて来るが？」

「いや、良いよ」「マツクでの暴食祭りを思い出し、思わず吐き気が咽頭に充填する。」「さつき食べたばかりだし」

「そうか。じゃあ嫁の所でご馳走になるんだな」

まったく聞いちゃいねーし。

しかし、嫁ねえ。

「ん　なんだお前。まだ嫁と喧嘩しているのか？」

「いや喧嘩してるわけじゃないよ。別に学校じゃ普通に喋るし」

「そうか？　それにしてはここ最近、家に寄らないけどな。まあこれは良い機会だ。やはり、今日は嫁の家で夕飯を食うんだな。そしてしっぽりと仲直りしろ」

「いや、だから喧嘩しじゃないって」「本当にマイペースなんだからこの人は。そう諦観しようとした矢先、揃姉の言葉に違和感を覚えた。」「でも、揃姉。良い機会つて、どういうことなの？」

仲直りする良い機会　ってなわけじゃないだろう。そもそもありすとは喧嘩はしていないし。ありすを溺愛する揃姉にしてみたら僕とありすの現状に穿った見方をするのはわからないわけでもないけれどね。うーん、それ以前に別の意図が見え隠れしている気がするんだよな。

ブローグですらないメランコリー 19

「何をやっている？」

揃姉からの応答を待っているとき、ふと後ろから声を掛けられた。
「え そりゃあ電話だけど」そのままの体勢を維持し、声の主に応えた。明らかに眼球が拒絶の意思表示をしている。ごろごとした違和感が僕を苛み始めて、水晶体はあらゆる現実から逃避するかのようには仮想体験に傾倒しようとして試みている。一瞬だけ目蓋の裏にお花畑が投影されたのは、後ろを振り返った先の僕の末路だろうな。重力に引つ張られるほろ苦い塩味に唇を濡らしつつ、人生終了の苦悶を舌で転がす。はっはー。戯言と嘘の舌妙（誤字にあらず）なハーモニーが口の中で踊っているぜ。「お前こそ、何やってんの？こんなところで」

「え そりゃあ面白い物に決まってんじゃん」

「あ、そう」

「そうなのよ」

なるほど と、幼馴染とのやり取りに僕は一人得心する。

バンドの代わりにパンケーキでパティを挟んだような違和感。もっぱら気まずさを通り越して異質な白々しささえ醸し出している。まあ、ある意味斬新な空気ではある。新鮮な空気でないところが、僕達二人の関係を表していて笑えるけれど。しかし、登下校を共にしなくなっただけでこうも格差が生まれるものかね。

「誰かいるのか？」幼馴染と疎遠をテーマに分析をしていた最中、揃姉の周波数が鼓膜へ届けられる。

「ありすだよ」一拍置いてから僕は応えた。

「嫁だと？」杞憂だったか、と呟いてから揃姉は短く息を漏らす。
「仲が良ければそれで良い。じゃあ、あとはお前がしっかり守つてやるんだな。切るぞ」

合いの手すら入れる間隙すら与えず、まったく要領を得ないまま

揃姉は一方的に通話を終了させる。ディスプレイには眉根を寄せた僕の透過された顔^{かんはせ}。嘆息をして、携帯電話を閉じパンツのポケットに仕舞う。

「誰からだったの？」

「ん　揃姉」

「ふーん。で、何だつて？」

「お前を守つてやれつてさ　意味がわかんないんだけど」

「あ、あああ、あたひを！？」舌をもつれさせた頓狂なありすの声に、思わず心の中で舌打ちをしてしまう。不条理な通話に面食らつて、うつかりありすさんのタブーに触れてしまったらしい。「を、をまえが、あああたひを、まますつてくれゆゆゆゆゆ！？」

「いや、わかんないけど」

落ち着けよとは口にできず。愚考にすら至らなかった結果を言語に変換して、ありすにそのまま投げる僕。

「ぱえ？」しかし、既に錯乱フィルターを施しているありすさん。言葉のキャッチボールさえできやしねえ。

錯乱しているありすは僕をサンドバッグに見立てたようで、しきりに背中を殴打し始めた。僕が何を言つても上の空で、一心不乱に拳を叩きつけるありすさん。まさか男の背中が硬いからといって、頑丈な使用だと思つていないだろうな？　威力が尋常じゃないんですけど……。

このままでは背骨を粉碎されそうな勢いだったので、いい加減僕は後ろを振り返ろうと試みる。そして、振り返った刹那、顔面に良いものもらつちやつたわけだけど。しかし、それが二進数の脅威ではなかったことが、せめてもの僥倖なのかもしれない　男の子にだってちゃんと柔らかい部位はあるんだぜ。眼球とか　頬に余分な質量を加えられた錯覚を覚えながら、とにかく僕はありすと距離を置くことに専念する。

だけど、思わずたたらを踏んでしまったのは、邂逅にすら似た放課後（で、あつてるよな？）での久々のありすとの対面。

幼馴染という要素を加味したところで、穿たれた溝は容易には埋まってくれない。

一体、誰が穿ったかは置いておくとして。

金属みたいな重々しい空気を精製しているのは、僕達二人であることには違いなかった。

「ご、ごめん」頭を垂れることで、ありすは謝罪を垣間見せる。

トーストにバターを塗るみたいな気軽さで事故を肯定する僕。殊勝にも笑顔を取り繕ってもみた。だけど、如何せんこの笑顔にはグラスファイバーは混ざっていない。ちょっとしたショックで壊れそうなのが不安の種だ。

でも、そんな種でもありすの安心は芽吹くわけで、彼女は少量のぎこちなさを体躯に停滞させつつ、咳払いを交えて平静に回帰する。それから、ありったけの虚勢。

思わず苦笑を浮かばずにはいられない。

もちろん、好意的な意味でだけ。

ブローグですらないメランコリー20

エレベーターでの密室。

静かな稼動音と微かな息遣いだけが充填する箱の中で、僕とありすは大人しく密室にパックされている。

横目でありすの様子を盗み見る。箱に飾られたビスクドールみたいに鼻先をツンと澄まして、ありすは虚空を見上げていた。一見、不機嫌そうな物腰だが、そこは幼馴染冥利に尽きるといったところか。ありすの呼吸を拾い上げる皮膚のセンサーは、満場一致でオルグリーンの信号を脊椎へ送信している。

いい加減、お互いに唇も解^{ほく}れてきた頃だろう。そう僕は判断して、会話のキャッチボールを試みることにした。

「今日は、買い物にでも洒落込んでいたのか？」

「今日も、買い物にしゃれこうべよ。主にお財布が」

「骨までしゃぶりつくしているし……。どれだけ買い込んでるんだよお前。洋服だろ？ それ」

「まあね」肩に掛けている紙袋を一瞥して、ありすは僕を上目遣いで見る。「乙女を高めるツールとしては、足りないくらいだけど？」

乙女のクローゼットは四次元にでも繋がっているのか？

「で、崇は？」

「マックで暴食祭りやってた」

「夕ご飯の前なの？」

「昼食と夕食を兼ね備えた、ハイブリッドな食事だったのですよ」

僕の粹な応答に、ありすは鼻息で感想を漏らす。

路上での錯乱振りが嘘みたいなクールさだった。

リハビリとしては及第点だな　幼馴染の反応を素直に評価する。自宅であるマンションまでの帰途。終始僕達は無言を貫いていた。だけど、お互いに会話を切り出す機会を窺っていたのは明らかで、水槽に漂う魚を連想させるように口だけはぱくぱくと有酸素運動を

繰り返していたのである。まあ、ようするに僕達の関係はある日
境に錆びついたままだったけれど、再生不能に至るまでは劣化して
いないということ。しかし、逆説的に捉えるならば、このままの状
態を維持しては酸化の進行は止まることはなく、いずれは腐り
落ちてしまう危うい状態だったといえるのかもしれない。

だから、こうして会話をすることが劣化を食い止める最適な方法
だと、お互い無意識に認識してはいたのだと思う。わりと平静を装
って過ごしてみたけれど、やはり片割れがいないと僕達は成立しな
い。つまり、半身を失うという過程を得て、ようやく僕とありすは
その考えに行き着いたわけだ。そのことに気づくまで、それなりの
時間を消耗することになったけれど。

有体に言えば、僕とありすはバタフライナイフのグリップみたい
なもので、幼馴染というデリケートな部分を二人で覆っていたのか
もしれない。

それが、ふとした切っ掛けで分解して。

デリケートな部分が露呈して。

鋭利であつたが故にそれは酸化して。

かくして、

恩田崇は夢枕ありすの恩田崇ではなく、
夢枕ありすは恩田崇の夢枕ありすではなくなった。

よくもまあ、今までの日々を安穩と過ごしていたものだ。
なるほど。

水色さんの存在が、実に大きなものだったということが再認識で
きる。

「というか、足痛いんですけど」

ありすの声に、眼球が現実の認識を開始する。

スライド式のドアが、馬鹿みたいに開閉を繰り返していた。その
中央にはありすが履いているミュールが、黒い存在感を強調してい
た。

「いや、ボタン押したら？」

「煩いなあ！ とつとと表にでろうい！」巻き舌でキレられた。半ば追い出される格好で、エレベータから通路へ這い出る僕。緩慢にドアが横にスライドする中、対面する幼馴染に向かつて、どう言葉を紡ごうかと考えあぐねる。答えが導き出される前に、エレベータは再び密室を作り出そうとする。持て余した思考を嘆息に変換して、僕は踵を返した。

揃姉の言葉が、瞼の裏でテロップを張り巡らしていた。

ふむ、たまには僕から誘ってみるか　そう、ぼんやりと明日のプランを立てているとき、後方から歪な、そして泥濘とした音が漏れてきた。

歩みを止め、後ろを振り返る。

ドアの隙間から、黒髪に絡められた白い両手が這い出ていた。

抵抗を覚えたドアは、ゆっくりとスライドしスリットへ収まる。

「いや、だからボタン押したら？」

「うるっさい！」歯軋りを立てながら、ありすは僕を睨みつける。

「崇。お前、明日覚えてるよ」

「はあ」ありすのあまりの剣幕に思わず狼狽する僕。もちろん、口から出るのは相槌的な応答だけ。

「ああ、違う！ そんなんじゃないかって！ もうっつ！」顔の皮膚の

体温を少しだけ上昇させて、ありすは大袈裟に頭を振る。しばらく

シェイクしまくっているツインテールを呆気にとられて眺めている

と、二匹の大蛇を連想させるそれはやがて大人しくなった。すつか

りホラーの様相を呈しているありすさん。唇に髪を数本絡めながら

僕を真っ直ぐに見据えて、「とにかく、明日、首を洗って、待って

る、馬鹿！」まるで咽頭からオレンジの果汁を搾り出すかのような

声調で一語一句言葉を噛み締める。

『明日、迎えに来るから』とまあこんなところか。希望的観測だけれど、恐らく誤差は生じていないはず。

ざわめくものを胸に仕舞って、僕は無言で首肯することで幼馴染に応えた。

ブローグですらないメランコリー 21

さて。

これで、恩田ハーレムに迎える面子が概ね揃ったわけだけど

「あー」

思考がひりだすモノローグに羞恥を覚えながら、僕はソファへと倒れ込んだ。

リビングの滞留した空気が、皮膚の温度を上昇させることで空調の確保を推奨していたけれど、泥濘とした思考は身体へと伝播していて現状維持で妥協することを訴えている。

そのまま怠惰に身を任せる。

抜けきらない疲労はソファへと沈殿して、癒しを与える家具はその効果と相乗して睡魔を誘う小道具へと変化していた。

咽頭から競り上がる欠伸を噛み殺す。

仰向けになって天井をぼんやりと眺める。

「あー」思考を活性化させようと声を上げてみた。声は空気へ昇華されずに、高度を下げ僕に降り注ぐ。声を上げたのが返って逆効果だと評価してみる。しかし、まったく反省はしていない。「うー」

江戸川・フルフル・莉鈴 望む望まないに関わらず、僕達は再会した。赤い竜と獣の末路は、未だ見えていない。

桜庭灰霧 秘密結社同好会（仮）の創設に僕は巻き込まれた。

彼女が、何をやるうとしていいのかを考えているのか、僕にはわからない。今後の動向に注目したい。

夢野かのん 桜庭と因果を結んでいる事実に驚いた。あと、あの変態外科医の関係者であるのはほぼ確定事項だろう。たゆんたゆんがゆんゆんとしていて、ぶちゃけ好きになりそうだ。

宮部現実 かつてのクラスメイトだという記憶はある。それ以外はまったくの謎。夢野先生のカルテで発見したのも何かの因果だろう。追々調べることにする。思い出せないのも気になるし……。

恩田揃音^{そろね} 要領を得ない通話。でも、僕の隣にありすを据えよ
うとする意思是窺える。揃姉は僕にナイトの誉れを与えたいらしい。
剣呑。剣呑。

夢枕ありす とりあえず、幼馴染を再開することを約束した。
お互い色々なものを棚上げにしているのは明らか。それを全て清算
した先に辿り着くのが破綻だとしても、きっと僕はそれを享受する
だろう。

村上水色

「あー、うー」

天井へとただ漏れる思考を遮断する。

投影された映像は急速に精彩を欠き、本来あるべき時間軸へと回
歸していく。そして、泥濘とした思考は次第にクリアになっていく
のだけど

目蓋の裏にひりついている水色さんは、今日もご機嫌。

立ち直ろうとしている思考を一気に疲弊させた。

「息災です」

目蓋をそつと閉じ、未練を贈呈している水色さんの虚像を暗闇に
溶け込ませる。

機能が回復するまで、あと数十分。

それまで、じつと大人しくするしか僕にはやることがない。

虚脱状態にある身体を緩慢に反転させて、ソファに顔を埋める。

できるだけ水分を身体から排出して、水色さんの成分を薄めない
と。

おいそれと明日の行動基準も設定できないしね。

それでは皆さん、

僕は一時、降り注ぐ現実をまどろみに逃避させますので、
どうか息災で。

感情複合パッドステータス1

夏休みになんかあった！

夏休みになんかあった！

夏休みになんかあった！

あいつを見かけたときに、あたしを抑止していた理性はぶっ飛んだ。

鏡に向かって、できるだけ優しく微笑んでみる　目の周りの隈が苛つく。

思い出せない思い出がエスプレッソに浮かぶ泡状の牛乳にみたいになって、すっかりカプチーノ気分で気取っている　正直、いけ好かない。

とにかく、あいつに会ってカプチーノを掻き混ぜさせちゃわないと。

あいつを好きになるのが止まんないのをどうにかさせちゃわないと。

どっちか早く決めちゃわないと　脚はシンメトリーで黒と白がアシンメトリーになっちゃったままだし。

ところで、あいつ……。

白と黒　どっちが好みなの？

（鏡の前のありす）

携帯電話のアラームが起床を推奨していた。

鈍痛に苛まれる頭を抱え、上半身をベッドから引き剥がす。

キツチンに向かうため、脚をフローリングに馴染ませる。

それからしばらくして部屋を後にする。スーパールの袋がリビングに置かれたままなのを思い出した。

リビングに入る。揃姉がスーツ姿のままソファにうつ伏していた。

テーブルに置いてある袋をそつと手に取りリビングを後にする。

廊下に出ると僕の部屋から音が鳴っていた　ああっ、忙しいっ
たら！

足早に部屋へと戻り、電子音を空気に昇華させ続けている携帯電話のサブディスプレイを見る。

変態外科医からだった。

感情複合パッドステータス2

「おっはいよー」

「おはようございます」

「おや？ 今朝はやけに電導率が低い声だね？」

「何なんですそれ？」

「声が良く通っているってことだよ。うん、つまり、目覚めが良いってことを、歪曲に表現してみたわけ」

「そういう夢野さんは、今日も三次元曲面みたいな滑らかな舌ですね」

僕のシニカルな言葉の応酬に、あっちはーと夢野さんは快活に笑う。「それはそうと、彼女との久方ぶりの逢瀬はどうだったのかな？」

「彼女って」「皮膚の温度が少しだけ上がったのがわかった。『彼女』と『逢瀬』を思わず関連づけしてしまうのは、ひとえに夢野さんの人格がなせる業である。まったくハード的には申し分ないけれど、ソフト的に問題があるんだよなこの人は。『莉鈴のことですか？』」

「もちろん、江戸川・フルフル・莉鈴のことだよ」

「夢野さんが期待していることは何も起こってないですよ」

「あ、そう。まあフラグを立てたからって、すぐにイベントが起きるわけじゃないからね。恩田君は、出会い頭にパンツを脱ぎ始める女の子は好みじゃないだろう？」

「はいそこまで」

通話、強制終了ね。

携帯電話をベッドへ放り投げ、こめかみに指を当てる。変態外科医の番号を着信拒否にしようか否か逡巡しているとき、再び携帯電話が産声を上げた。

「ああ、ごめんごめん」悪びれる素振りも微塵もなく、謝罪を申し

入れる夢野先生。「座薬を入れようとして、うっかり媚薬を入れてしまった感じだよね」

「ただだけクレイジーな医者ですか　あなたは」

僕の蓮っ葉な物言いに、『淫乱だけどー』と自らの人格の破綻を夢野さんは証明してみせる。突っ込めば突っ込むほど無軌道を貫くのはわかっているの、「あ、そうですか」と感慨もなく返答をする。

さて、どうやって合理的に通話を終了させようか　変態外科医に対するアプローチの方法を模索していたとき、

「あ、そうだ。夢野さんに聞きたいことがあったんですよ」

声帯はオートマティクに雄弁を振るっていた。いやまったく、カスタマーセンターにクレームを入れる必要があるようですな。身に覚えのない自分の仕様に頭を捻ったあと、左手に携えているスーパリーの袋を眇^{すぐ}め見る。生鮮類の末路が新鮮^{フレッシュ}ではなく死肉^{フレッシュ}にならないことを厳かに念じるばかりだ。

「僕の通っている学校に夢野さんの関係者とかいたりします？」

「君の学校にかい？」夢野さんはそう僕に訊き返してから、無言の電波をしばらく送信した。「ああ、恩田君。君つてもしかしてエデンの生徒なのかい？」

訊き返す夢野さんの質疑に僕は、おや、と首を捻った。

「あれ？　僕言っていませんでしたっけ？」

「そうだね」僕の疑問に肯定で応える夢野さん。「君にプライベートなことを話す余裕はなかった。と、あのときの恩田君の雰囲気鑑みて、私はそう評価するけど」

ああ、そうだった。そんな余裕とでもなかったもんな。

夢野さんの的確な分析に、思わず納得してしまう。

自分のことではいっばいっばいになっていた夏休みの日々が、脳裏に再生し始める。

やや駄目駄目！

ようやくメカニズムが維持できたのに、またぞろカウンターバラ

ンスで憂鬱になってしまっただぜ？

とつとと自分を取り戻さないと……。

「まあ、とにかく。僕は東之園高等学校、つまりエデンの生徒なわけ、そこで夢野さんの関係者と思しき人物とばったり遭遇しちゃったわけですよ」

感情複合バッドステータス3

「そう」「僕の冗長な解説口調に反して、夢野さんの反応はシンブルだった。「あの子は元気だったかい？」

疎遠を垣間見せる質疑に僕が応えあぐねていると、夢野さんは朗らかに笑い声を上げて停滞した空気を弛緩させる。

「私の妹だよ」

「妹さんですか」

「チュパカブラちゃんと言ってね……、まあ良くできた自慢の妹さ」
「未確認生物を妹に持てば、そりゃあ自慢にもなりますけどね」まあ夢野先生の上半身はある意味稀有な存在ではあるけれど　脳裏にひりついた、たゆんたゆんがゆんゆんしている電波を頭を振って乖離させる。「初見で評価するのもなんですけど、まあ元気そうではありましたね」

「そいつは重畳だね。ところで恩田君、あの子と出会ったてことは、君は懊悩でも抱えていたのかい？」

それは、懊悩抱えまくりですけれどね……。

「いや、ちよつとした経緯いきわづがあつて因果を結ぶ関係になっただけですよ」事実を背景になんとなく嘯いてみる。「他人に内臓をひけらかす気概を持つほど、大した悩みはありませんから」

「まあ狂った人間が、自分が狂っているとは認識してないからね。往々にして、狂人は自分が正気であると常々錯覚しているものだよ。つまり主観的にアプローチするのではなく、客観的にアプローチされるのがここでも必要になってくるわけだ」

「まあ慧眼ですこと」揶揄するように僕は言った。しかし僕の懊悩は狂人の心理と同義扱いですか……、少なくとも自覚はしてるんですけどねえ。

「そう照れるなよ。健全な青少年であるところの、恩田崇君」くすりと、夢野さんは笑い声を漏らす。「経緯はどうあれ、チュパカブ

ラちゃんとは因果を結んだのは、恩田君にとってはプラスの補正に傾くとは思っよ。あの子、堅物そうに見えて実は色恋沙汰には手馴れていてね。気が向いたら相談してみるといい」

「ご高説痛みいりますにゃー」おどけてお茶を濁そうと試みる。

「お褒めに預かり恐悦至極でございますにゃん」と、夢野さんは僕の心理を汲んで乗ってきた。いや、本当　夢野さんの性能にはまスベックいつちやうであります。

「そういうことで、いささか変わり者だと思っけれども、今後ともチュパカブラちゃんをどーぞよろしく」

未確認生物に祭り上げられままの親族に憐憫の情を抱きつつ、携帯電話の向こう側の姉君に了承の意を示す伝播を送信した。

「あー、お姉さん、少しだけ真面目なお話ししちゃったからエロい気分なっちゃったな。ちょうど話題にも上がったことだし、チュパカブラちゃんのオッパイについて考察しようよー」

「どんだけ無軌道なんですか、あなたは……」

「エロのベクトルは常に変化しているのですよ」にゅははー、と年甲斐もなくきやわいさを前面に押し出した笑い声を送信する夢野さん。その奇声にささやかな電子音が混入する。「おっと、アラートが私を呼んでいるぜ」

「そうですか。相変わらず多忙ですね」と、社交辞令を含んだ切断の合図。

「じゃあ恩田君。また電話するよ」

通信が切断されたことを鼓膜に認識させてから、僕は携帯電話を閉じる。

いささか変わり者だけど　ねえ。

携帯電話を手の中で転がしながら、夢野先生のおっぱい、いや違う、性癖について考察してみた。

フロイト先生にでも聞いてみなきゃわかんねーや。思考が江戸っ子ふうにそんな答えを導き出した。まあ妥当なところだろう。

持て余したエネルギーを、携帯電話のサイドキーを押す作業に割

り当てる。ふむ、良い時間になっているではないか。
今日も、弁当なしの方向で

感情複合パッドステータス4

フライパン片手に炎と対峙する。

筋肉を弛緩させるほど手馴れてはいないし、逆に緊張させるほど経験は浅くもない。つまり、可もなく不可もなくの通信簿の三みたいな技能ではあるけれど、気を抜くと目玉焼きがさーさいどあつぷあつぷになるのは予想できるので、こうして僕は大人しく月見に興じているのである。もちろん、他の食材は既に救済措置を施してある。痛んでないかと心配だったけれど、きっとそれは杞憂かもしれない。だって、リビングの空調がぎんぎんに効いていたし。

「あー、温まった」シャワーを終えた揃姉が入室する。もちろん、背中を向けているので姿は視認できない。「くそう油断した。お前を注意した私があの様とは……、本末転倒だな」

「まあ お仕事お疲れ様です、って僕にはそれしか言えないけれど」揃姉に殴られた後頭部が痛覚の妄想を訴える。「コーヒーは？」

「頼む。生でな」

「は？」

「いや、悪い」いつもよりは二倍増しの低い声で、「まだ寝ぼけているな……、しかも酒も抜けていない、最悪だ」と、揃姉は呟いた。

僕は肩を竦めてから、目玉焼きをフライパンから皿に移動させる。食材のほとんどが肉類だったのが妙に納得できる台詞だった。桜田門の諸君であるところの揃姉が、よもや飲酒運転なんぞしていないだろうな？ と、訝しんでみたけれど、それは皆無と判断して間違いないだろう というか絶無だ揃姉の場合。生まれながらにジャスティス仕様だし 余計な詮索をしたことを反省。美味しいコーヒーを淹れることに専念する。

僕と入れ替わりに揃姉がぺたぺたとフローリングに足音を残して、一人分の目玉焼きを押収する。

『鑑識に連絡を！』などと、そんなリアルな冗談を揃姉が言うこと

はなく、目玉焼きを一瞥したあと、踵を返して黙ってテーブルの席へと戻った。ちなみに、ワイシャツ一枚でした。うほっ！ コーヒーの隠し味は酸化した体液に決まりですね、奥さん
ジョークだらあ。

感情複合バッドステータス5

「崇、バターを取ってくれ」

揃姉に促されるまま、チョコバーみたいに硬化している食用油脂に腕を伸ばす。アルミホイルから覗いている黄色味を帯びた固体を一瞥して、それから逡巡。

「僕が塗ってあげようか？」半ば常套句になっている提案を囁つてみた。

「馬鹿を言つな、それくらい私でもできる」僕を睨んだあと、揃姉は任意同行をバターに求める。しかし、のっけから黙秘権を行使していたので、あえなく強制連行と相成った。「まったく、私を何だと思っているんだ」

揃姉の不機嫌な言葉も場合によっては、こつとも意味合いが異なるのか。自身の妄想に感心しながら、揃姉の一挙一動を大人しく見守る。舌を鳴らして、僕から視線を外す揃姉。どうやら僕の生暖かい視線に気づいたらしい。込み上げてくる笑いを殺すため、奥歯を噛み締めた。

息を殺した揃姉は、眼前の牛酪にバターナイフを刺し入れる。小刻みに揺れるナイフの振動が、緊張しているのがあけすけで滑稽なくらいだ。しかし、敢えて言及はしない。

バターナイフはその存在意義を全うするためスライドを開始する。滑らかとは評価しがたい、ぎこちないくらいの機械的な動作。

「あ」「ややあつて、揃姉の小さな喘ぎ声。

その声に呼応するかのように動きは加速度を増し、そして勢い余って空気を引き裂いた。

眉根を寄せ、バターが剥離したステンレスの先端を揃姉はじつと見つめる。

で、件のバターはというと 見事な放物線を描きながら滑空していた。

揃姉の今の機嫌と同じくらいの角度で視界に入る軌跡を、しみじみと見守る。それから程なくして、重力に打ちひしがれた鈍い効果音。死角になっていて視認はできなかったけれど、フローリングが不要な栄養摂取をしたことはまず間違いない。

恩田揃音そろねが不器用を露呈した瞬間である。

我が姉ながら、完成度が高い故に……、萌えますな。

さて、揃姉が意地を反復する前に行動しましょうかね。

僕は椅子から腰を浮かせて、揃姉に拘束されているバターとナイフに手を伸ばした。明らかに指が抵抗の意思を示していたが、フローリングの清掃係を僕が命じると、渋々と揃姉はその抵抗を和らげた。

揃姉が席を外している間に、トーストに薄化粧を施した。ちなみに、この何てことのない一連の動作も、揃姉は壊滅的に下手くそだったりする。根本的に道具を使うのが苦手な人なのだ。携帯電話も通話以外の機能はまったく使えないし、車の免許を所持しているのが奇跡以外に表現する術がない。揃姉の後輩にあたる人間いりまさんが語るまことしやかな語りでは、被疑者に手錠を掛けきれなかった挙句、同情した被疑者自らが手錠を掛けたという話もある。まあ直接見たわけではないし、眉唾な感否めないけれど、否定できないのが微妙なところだ。

でも、化粧をこなせるのが不思議なんだよなあ。

自身を高めるアイテムは、身体の一部だと認識でもしているのかね。思考にそんなしこりを膿みながら、二枚目のトーストに化粧を施す。

しこりといえば、気になることがもう一つ。

「揃姉、昨日の」

「電話だ」言葉の続きを紡ごうとしたら、揃姉の周波数がそれに追隨した。「まったく、かましいい。お前の鼓膜は揺らいでいないのか？」

気がつくともパンツのポケットの中で携帯電話が太ももをくすぐっ

ていて、くぐもった電子音が空気を震わせていた。

「あ、先輩。事件のこと私なりに考察してみたんですよー。聞いてもらえます?」

人間依^{える}流さんからの電話だった。

感情複合バッドステータス6

まるで拾われた仔犬みたいな底抜けに明るい声調に、思わず手のひらから携帯電話が零れそうになった。

携帯電話を持ち直して鼓膜へと漸近させようとしたが、その必要はなさそうだ。というか寧ろ、近づけたら聴覚障害を引き起こしそうな危うい声量である。顎を引きつつ、携帯電話をテーブルの上に載せる。その間も人間さんの『事件の考察』とやらは続いていた。だけど、如何せん戦闘機ばりの音速トークだったので、話の内容を把握するどころか単語を抽出することすら困難だ。せめて、レシプロ機並みに緩やかに飛んでほしい。

「で、以上なんですけどー、って先輩、聞いてます?」

「今、ブラジル辺りだと思いますので、もうしばらくお待ちください」置いてけぼりな現状をシニカルに表現してみた。

「はあ、ブラジルですか? まあ良いですけどー。それで、先輩どう思います?」皮肉通じないし……。自我を貫き通す天然ものの個性に僕が手をこまねいているとき、人間さんは「おや?」と頓狂な声を上げる。「何か声、凛々しくくないですか? 先輩。それ、もしかしたらイメチェンだったりします?」

イメチェンだったりするどころか、キャラもジョブもチェンジしてますが

というか、気づけよ。

「いや、人間さん。脈絡のないお話の途中で申し訳ないのですが……、僕ですよ」

「はあ」と相槌的な返事をする人間さんに一泊置いてから、「いつも姉がお世話になってます」と、僕は言葉を上書きする。

「およ? もしかしたら先輩の弟さんですか?」ようやく、電波の終着駅が揃姉ではないことに気づく人間さん。「ああ、分かりました。先輩、まだ寝ているんでしょう?」

「いや、起きてますよ。今、床をワックス掛けしてます」

四つんばいでフローリングと格闘している揃姉を一瞥してから、携帯電話に視線を戻す。というか、人間さん。軽く推理を否定したのに、「なるほどっ！ 忙しいから代わりに出てあげたんですね？ しかし、朝から先輩をこき使うとは継母冥利につきますなー」などと僕の言葉をハブった挙句、新たな推理を披露してその上メルヘンを脚色する始末。

「じゃあ私が魔女役ですねー。履かせる靴は鉄下駄で決まりですね！ 馬車の代わりは先輩のシトロエンで構いませんかー？」

それで興に乗ったのか、人間さんは勝手にシナリオを進行させてきた。茨のマイウェイだそりゃあ。

いやまあ、揃姉が傍にいないことを前提で話していると思うんだけど 　しかし鋼鉄の姉君は、フローリングの上で青い炎を肅々と滾らせ中なんですけどね……。

「ああ 悪いがシンデレラ役は人間に譲るよ。シトロエンは元々私の物だからな。鉄下駄をもって迎えに来てやる……、待つてろ」

「あれ？ 先輩、いたんですか？」 悶死しそうな僕の心中に反して人間さんは绰々な電波をゆんゆん送信する。「しかし先輩、今日はやけに乗りが良いですねー？ 化粧の乗りは大丈夫ですかー？」

「お前に履かせる鉄下駄、じっくり温めてやんよ」嘆息を混合させた二酸化炭素を吐き出す揃姉。

「いやんっ。足の裏だけ 本能寺の変 みたいないな！ そんな先輩は亭主関白みたいないな！」

誰が上手いことを言えとっ

感情複合バッドステータス7

「お前、あとで手打ちな」

「寧ろ手籠めにされてーっす」

語尾にはあとマークどころか、ついでに鳩までぶら下げていそうなおめでたい声調で、揃姉にアウトローな欲求を吐露する人間さん。そんな人間さんを、半ばフローリングに寄生している形の揃姉は、短く鼻息を漏らすことで一蹴する。

気まずさの予兆を一切殺した寸陰が僕に纏わりついて、牛乳を嚙下する旨を推奨していた。

大人しくその空気に従う。

火照った皮膚が、緩慢に正常で上書きされる。

一度身震いしたあと、コップをテーブルへ戻した。

「崇、どうした？ 顔色が優れないようだ」揃姉が訊ねる。

「気のせいじゃない？」そう嘯いてから、僕は一度首を竦めた。

目を細めながら揃姉はひとしきり僕を観察して、それから作業を再開する。「それで、人間。用件は済んだのか？」

「あ、はいはいそうでした。先輩、聞いていたんですよね？ それで、私の考察どう思います？」

「出勤してから話す。あと人間……、不可抗力とは言え、民間人に饒舌なのは感心しない」

「う……、ごめんなさい」

揃姉は僕を一瞥したあと首を捻った。どうやら音量を抑えた人間さんの声を聞き取れなかった様子なので、謝罪している旨をそのまま伝えた。

「じゃあ弟さん。私はこれでお暇しますが、さっき話したこと、頭のゴミ箱にドロップアウトしてくださいね」

「いや、保存すらできていないので」

冒頭に限ってのことだけだな。そこから先のことは、額から吹き

出る汗が証明している。もちろんそれが、牛乳の冷却作用を凌駕しているのは明白ですな。心臓がカミングアウトしろって、今でも鐘を体内に響かせてるし。こういった揃姉と人間さんのやり取りは機知だが、だけど知っているからといって別に耐性がつくわけでもないのだ。

揃姉は存外にしてその耐性はついてるみたいだけれど。

まあ腐れ縁という因果を踏襲すれば、僕とありすも似たようなものか。あいつも結構、辛辣にものを喋るときがあるからな。

「あつと、切る前に訊きたいことがあるんですけど、良いですかー？」

「はい、何でしょう？」

「不可抗力とかなんとかって先輩が言ってましたけど、もしかしたら私が掛けた電話って、弟さんのだったりします？」

「人間。お前は興奮すると視野狭窄に陥りやすいからな。大方酩酊した勢いで、登録されている名前を識別できなかったんだろ」僕の代わりに揃姉が応えた。

「え？ 私酔ってませんけれど……」

「アイデアが浮かんた状態は、酔っているのと近似してるんだよ」

「はあ。そういうもんですかね。まあ良いですけど。それじゃあ分かりやすくどちらかの登録を更新しておきますね」

「それではお二方、息災でー」と快活に人間さんは言って、通話を切断する。

「まったく、かましいい」嘆息をしてから、揃姉はそうフローリングに囁き掛ける。そして、おもむろに顔をこちらにかんはせ向けて、「そういえば、今日も嫁は来ないのか？」と僕に問い掛けた。

我が姉ながら、上目遣いがコケティッシュで、萌えますな。

ふむ。人間さんが呼び水となりましたか。「ああ、多分。今日から来ると思うよ」

感情複合バッドステータス8

「随分と、希望的観測な物言いだな」上目遣いで僕を見つめたまま、揃姉は言った。

僕は肩を竦めることで揃姉に応えた。とりあえず上手く笑えたと思う。

しばらく、揃姉は僕への視線の投射を維持していたけれど、短い息を漏らしたあと、口の端を僅かに持ち上げその視線をフローリングに移行させた。

揃姉の目的は、言葉を投げ掛けることにより、僕の反応を促し、表情の変化を読み取る。その結果として、僕の言葉の信頼度を高めることに主眼があつた。奇しくも僕の反応は概ね良好。まあその結果に至る起因は明確なわけで、不思議でもなんでもないんだが

現在僕は思春期というホルムアルデヒドに片足どころか全身浸つちやっているわけです。心中はお察し下さい。とにかく、揃姉は僕の反応にご満悦の様子。さっきからちらちらと廊下のほうを振り向いている。まったく、見ているこっちがそわそわしちゃうぜ。この寂しがり屋さんめ。

というわけで僕が揃姉を観察していたとき、インターフォンが鳴った。

「僕が出るよ」立ち上がろうとした揃姉を制して、ホスト役を請け負う。

廊下へ出る間に、室内に設置されている時計で時刻を確認。来訪用の体内時計でも特注していそうな正確さだ。つまり、奴が来るにはうってつけの時間。それに、インターフォンを連打する感覚も錆びついてはいないみたいで、いつもみたいにふつつつと苛立ちが込み上げてくるんですけど、まあ良いか。

廊下へ出て玄関子機を手取る。

「こちらスネーク、飯はまだか？」

「いや普通に現地調達だろ」

僕の返事を最後に交信は途絶えた。ステルスなゲストを迎える気概は僕にはないぜ。

しかし、どうにもあいつ蛇に絡まれたり絡んだりする性質らしいな。無意識下に蛇を飼っているのが起因しているのかねえ。

思考を這い回る、夏の回顧^{レブリカ}を堰き止める。

前頭葉でのたまう悪魔が顎を小さく引いて赤い舌をひけらかす。

でしゃばるなよ　飼い主のどこにでも引き籠ってる。

「開けるよカス」現実を開始したところに、幼馴染の苛立ちを内包した声。というか、苛ついてるのがあけすけだ。なんでこいつこんなにもムカついてんの？　あとでカルシウムとマグネシウムを贈呈しないと。

ドアチェーンを外し鍵の開錠をしてから、「入れよ」とセキュリティの無効化を幼馴染に報告すると、それから間を待たずにしてドアが勢い良く開かれた。

肩で息をする幼馴染と視線がかち合う。

久方ぶりの、朝っぱらからの対峙。

いつもと違うのは、こいつが多少色気づいたことか。

すっぴんがデフォルトなはずだったのにねえ

僕の下世話な視線に気づいたのか、ありすは瞳孔を収束させ僕を睨みつけ、

「べ、別にあんたのためじゃないし」と、ツンデレ要素を加味した意味不明な言葉を解き放つ。

「あ、そう」某犀川先生ばりに僕もツンデレしてみた。

感情複合バッドステータス9

「あ、そうっでお前……」不機嫌を頬張った膨れっ面な顔が、僕の鼻先まで漸近する。「身だしなみに手間と時間を掛けた結果が、それか？」

「うひゅふひい！ ふひゅふひいです！ まじふえ！」

王妃にガン視されながら頬をこねくり回されている僕は、迂闊にも心無い賛美の祝詞を諛^{のり}んじてしまう。僕が魔法の鏡だったら、白雪姫に降りかかる惨劇を未然に防げたかもしれないねえ。

「ブラフだろ？ それ」

「いひゃ、はっひやりにやんてめっひようもない。ぼひゅがちひんなだけでひゅびょ」うむ、また迂闊にも嘘が露呈するような否定をしてしまった。姫様の安否よりも、まずは自分の身の安全を確保したい所存であります。もう無理だけど。

瓦解したドームに特攻^{ぶっこみ}を仕掛ける某大佐の如き気概で覚悟を決めたものの、しかしもちろん、ありすの目からビーム兵器とか実弾兵器などがびびびと発射されるわけでもなく

「まあ良いや。気づいただけでも由とするか」存外にも、あっさりと武装解除してしまう。「あー、ねむねむ」

悶々と、中途半端に熱を帯びた頬を交互に撫で擦る。

どうやらありすさん寝不足らしい。

「で、どんだけレベル上がったの？」出力不足の起因を探るべく、ありすにカマを掛けてみる。

「寧ろ、お前のレベルを上げたほうが良いんじゃない？」顎をしゃくり上げて、ありすは僕に鼻息を吹き掛けた。「デリカシーのステアップをお勧めしたいけど？」

「あ、はい、まあがんばります」首を傾けて破顔するありすに気圧されて、思わず殊勝な返事をし、お香を吸引したり種を齧ったりしても能力が上昇しない現実を心の中で呪った。

「上がるわよ」

と断りを入れてから、ありすは靴の踵に手を掛ける。その際、ちらちらと視線が僕のほうへ泳いでいたので、先にキッチンへ戻ることはせずに靴を脱ぐ作業を甲斐甲斐しく見守る。ときどき視線がち合う度に、瞳孔が何かを期待している色彩で反射しているのだけど、ありすは口を噤んだまま作業に勤しんでいたのでその真意は図りかねた。

「とりあえず、自分の好きな色で選んでみたんだけど」フローリングに片足を載せ、僕を見据えるありすさん。

何かしらの反応をありすが要求しているのは明らかだが、それって、パンツの色のことを言っているのかい？ など、もちろん某変態外科医よろしくたおやかに訊き返すこともできず、「ああ、まあそうねー」と対象の不明瞭さを有耶無耶にする。

軽く舌打ちして、ありすは僕と肩を交差させる。「崇、あたしコーヒーね」

「はいはい。ただ甘に淹れさせてもらいますよ」

「……、たまには素材を大切にしたい」

「豆でも齧るきかよお前……、知性でも欠けてるのか？」

「お前のゲーム脳に理性が欠けそうだ」

嫌味を交えた嘆息を空気に昇華させたあと、ありすは足音を立てながら不機嫌を廊下に染み込ませる。

幼馴染の言葉を頭の中で反芻するまでもなく。

そのセンテンスに謎を解く数価が隠遁としているわけでもなく。

容易にニュアンスを汲み取ることができるのだけど

「難しい年頃だしねえ」

そうお互いに。

大股で廊下を闊歩する幼馴染を追隨して、誤差が生じている日常に苦笑した。

感情複合バッドステータス10

先行していたありますが立ち止まる。

キッチンの敷居を跨がずに反転し、僕へ手招きをして距離を詰めるように促した。

幼馴染の意図の読めない行動にいささか困惑しつつも、思惑が隠蔽された瞳に引き寄せられる。

漸近それから停滞。

口を開く暇も与えずに、ありすは僕の背中へと回り込んだ。

薄っぺらなワイシャツを通してありすの体温が伝播する。

手のひらを媒介にして僕達は密着し、そして背中に張りついたそれは擬似的な脊髄へとその役割を与えられ、僕を前進させようと信号を送信する。

入り口へ辿りついて、信号は命令を変換した。

というか、痛いんですけど……。

痛みに苛まれて思わず後ろを振り返ろうとしたけれど、皮膚に上書きされる鋭利な痛みが指示系統の喪失を再認識させ、目の前の情景を僕は空虚に視認を開始する。まるで地獄の監察官に繰られる死体みたいなアンニュイな気分です。

僕の視線の先。フローリングの上で脚線美を具現化したおみ足を、太ももから脚の裏まで惜しげもなく晒したご婦人が一人。何を隠そう いや、一部分が明らかに隠れていないけれど、まあ良いかなにをいわんやあにはからんや、恩田掬音（おんだそらね26）こと僕の姉である。ちなみに、括弧に区切られた数字は心のモザイクを掛けて戴くようお願いしたい。

思春期を未だ迎えていないお隣のいーくんもお二階のみーくんも、堪らず前傾姿勢になること請け合いの、そんなふしだらな情熱パトスを開眼させそうな姿で四肢を蠢かせている様は、本人に自覚があるか否かは別としても、幾ら実弟の僕といえどその情景に扇情の念を覚え

ざるをえないわけで

僕の気配を察知した揃姉がおもむろに振り返り、

「ん もう少しで終わる」

囁き、

上目遣いを停滞させ、

体温を僅かに上昇させる。

非日常が日常を凌駕している事実、思わず視線がフローリングを彷徨うのだった。

「僕の姉貴がこんなに可愛いわげがないっ」

「何を言っているんだ馬鹿者」

柔和な表情が一転して、揃姉はいつもの凜々しいそれへと回帰する。

「いや、揃姉……、観察力、観察力」

メンタルな痛みに苛まれながら、背中に同化している幼馴染に視線を注ぐ。すわ妄言を吐き出したのはこの阿呆であり、間違っても僕ではないのだ。その妄言に概ね同意してしまった事実は、黒歴史として既に心の最奥に仕舞っているけどな。わはは。

まるでゾンビに齧られたみたいに頭の一部分だけしか視認できない。本人は上手く隠れているつもりだろうけれど、僕の肩甲骨から芽吹いている触手が隠遁の滑稽さを証明している。知性なき神性に使役される旧支配者に同調したい気分だ、まったく。

しかし、嘲笑はせずに視線を再び揃姉へ向ける。

胡乱に僕を眇め見ていた揃姉の瞳が、親愛の色彩を反射した。「

おおっ、来たか」

「久方ぶりだね、揃姉。というか声で気づけよ」

感情複合バッドステータス11

僕の裏側で、挨拶を交えたギミックの破綻をありすは自ら口にした。

「敢えてスルーしてたんだけどな」数歩下がってありすと対面し、ツンとお澄ましさんしている黒色のアイデンティティーをそれぞれ驚掴みにする。「お前の突っ込みは、人間さん並に音速なのですか？」

「止める！ 力が抜けていくっ！」いや寧ろ漲みなぎってんじゃねーか……。僕にツインテールを持ち上げられ、獵師に狩られたあとの兎みたいな格好になっているが、眼球の表面を覆っている攻撃性はまるつきり狼そのもの。額を苛むフィジカルな苦勞クローがいてーいてー。うぐぐう……、追撃よろし！」

ありすのさらなる抵抗に備え身構えようと身体を緊張させたとき、ふと空間に木霊する笑い声が弛緩を呈する。

「その意味のわからないやり取りも、久しぶりだ」くすくすと指の隙間から声を漏らして、揃姉が可笑しそうに僕達を見上げていた。

お気に入りの映画を鑑賞する子供のような眼まなこが、粘度を帯びて皮膚を這い回る。ありすの髪から両手を剥離させ。そして、抵抗と甘受を緋い交ぜにして膿みだされる拒否反応に、幼馴染の情報を摩り込み馴染ませる。

こいつも同じようなことをしているから、笑えてくる。

だから、まったく問題なし。

しばらく、それを繰り返していれば僕とありすはいつも通り。きっと、細胞が僕達の間を思い出ししてくれるはず。

それまでしばらくこの関係で。

嘘も吐き続ければやがて本物になるって言いますもんねえ。

「やはり、嫁がいないとどうにも違和感が拭え切れなくてな」
ふむ。

我が姉ながら、ストレートに欲求不満を吐露する実直さも、また萌えますなー。

「よっ！？ よよよよ」

「ヨグ……、ソートス！」

ありすさんがどうやら時間連続体の外側から送信される暗黒電波で精神に異常をきたしたため、偽者でありますが、まかりなりにも魔術師でありますこの恩田崇めが、幼馴染に代わって外なる神に接触を試みた次第でございます。たっはー。

頭頂部から湧き上がる目一杯の疑問符を可視化できるくらいに、不思議そうな顔^{かんばせ}を揃姉^{しじり}は拵^{こしら}えていた。

というか、まったく噛み合っていない僕達なのである。

いやはや、水色さん成分は一筋縄じゃいかない模様ですな。

やれやれ と。水色さんではない村上さんふう^{ふう}に自嘲^{じちやう}すること
で自分を戒める。

「どうやらこの子、寝不足でバステ気味みたいねえ」

どん引きしている揃姉に愛想笑いを振りまいてから、ばんこつし
ているありすの手を引きテーブル^{いざな}へと誘う。

感情複合バッドステータス12

ありすを牽引したあと、揃姉にも席へ座るように促し雑巾を頂戴する。意地を反復されたフローリングの末路は酷い様で、なんとうかハルマゲドンしていた。雑巾もそこはかとなく黙示録しているし。それに、死臭が漂っているように思うのは僕の錯覚だよな？

戦乙女さまが降りなすったあ　などと心の好々爺が戦慄を禁じえない様子なので、フローリングに出現したメギドの丘を削り取って、死臭をバターのそれへと還元する。二枚目の雑巾とかで拭く。ごりごり。

作業が終わってテーブルを一瞥してみると、娘っ子達（いささか誇張表現あり）が談笑に興じていた。

寂寥感を覚えながらも、かましい二人を微笑ましく眺めたりする。こういうノスタルジーに似た感慨をなんて表現するんだっけか

あー……、殺意？

「ぼさつとしてないで、コーヒーでも淹れなさいよ」

自己修復を終えた幼馴染の突っ慥貪な声に、シンデレボーイは業腹だ。お前に履かせる鉄下駄じつくり温めてやんよ。と、先代シンデレラ（揃姉リミックス）の呪詛が脳裏を霞めたけれど、世界で一番お姫様している奴にそんな虚勢を取ったりでもしたら、逆賊の謗りは免れまい。下手をすると、火炙りどころかコロンビヤード砲で太陽まで射出されてしまいそうだ。よって自重。憤怒の形相も苦笑するまでに止めておく。

揃姉にありすに対する呼称の更新を推奨するか、それともありす自身の耐性付与に期待するか　歩きながら裁定を懊悩していたとき、

「で、どうしてしばらく顔を出さなかったんだ？」

ふと、揃姉のそんな詰問を、コーヒーメーカーの前で聞き取る。

その瞬間。

どろり　と。

コーヒーマーカーの分解能が、カップにコールドを精製させる。

内心に認識される妄想に戸惑いながらも、コールドが形成する輪郭をじつと見つめる。

リヴィアさんの声は、ありすの声そのものなんだよ。

とぐるを巻いた蛇が、色彩の欠けた眼をおもむろに僕へ向ける。
滑り気を帯びた湿気が目蓋の裏にひりつく。

目を擦ると、コーヒーマーカーは本来あるべき機能を取り戻していた。

しかし、カップが許容範囲を上回るという代償を糧にして。

「うん、まあ……。その、色々あるのよ……。思春期だし」

言葉から生成される微妙な間に、投射される視線が皮膚をひくつかせる。だけど、それは不快を有する視線ではなかった。そんなことより、憂うべきは、視線に内在する、幼馴染が抑圧していた、僕に対する特別な価値観。

「そうか、まあ良い。お前が話したくなければ、私は無理に訊かんですよ。またこうして顔を見せてくれたしな」

「ありがとう、揃姉。まあ今後ともよろしくってことで。それで崇、お前コーヒーマーカーは？」

「お前のそのスタンスは変わることがないのな……」

感情複合バッドステータス13

相も変わらずお姫様お姫様な態度を取っているありすに、堪らずそんな愚痴を溢した。

心の中で舌を鳴らして、唇から顎へと横断している迂闊な言葉を、慌てて手の甲で拭う。

「は？ あたしはいつだって一軍じゃん？」

「イケメンをラーメンのメニューだと勘違いしてそんな英語力のなさだそりゃあ」

僕の突っ込みに、ありすは「そんなことないもんっ」とのたまい唇を窄める。

というか、こいつが阿呆で本当に良かった。

いやそれも、記憶の一部を代償にした偽者がなせる業故……、か。そうじゃなかったら僕の言葉にボケを返すほど、ありすというおにゃのこは愚鈍ではないですからねえ。

「ねえ、コーヒークーヒークーヒーまだあ？」

「へいへい。只今、お持ちに馳せ参じますよ」杞憂をポケットの奥に仕舞い込んだやさぐれ執事は、パンツのポケットに右手を仕舞ったまま横着にも左手でカップを牽引するのでござえます。「お待ちたせしました、おぜうさま。ご所望のアメリカン、グラン・ギョニール仕立てでございます」

「まあ、コースターにだだ漏れているコーヒークーヒー汁が、まるで血生ぐさを演出しているようで素敵だわ」つつつい、と膨れっ面でコーヒークーヒーを僕の元へスライドさせるありすさん。高評価のわりには僕の淹れたコーヒークーヒーはお気に召さなかったようで。まあ、僕に漸近する度に、縁から吐瀉を散見させているのだから嫌悪するのは仕方のないことだけれど。「淹れなおせ」

「んもうつ　我儘さんなんだからっ」

「誰が我儘か。明らかに淹れすぎだろこれ……」

「へいへい。とびっきりのやつ^{じつめ}搾えさせてもらいますよ」
表面張力が作用して憚らないコーヒーカップを黙って受け取り、
自分の席へと移動させて、それから再びコーヒーメーカーと対峙す
る。胸キュン（ストレス的な意味で）させる悪魔が再び鎌首を持ち
上げないよう念じつつ。コーヒーメーカーの分解能を大人しく見守
った。

感情複合パッドステータス14

「崇さあ、このジャムなんか錆びついてる」

カップを唇に当てたまま、顎を引いてありすの顔をかんはせ眇め見る。口にトーストを咥えて

いるありすは、半ば睨むようにしてガラス製の瓶を見下ろしていた。うっかりフォアグラのペースト（ダウト！）でも奮発したのかと胡乱に思い、ラベルに綴られている文字列を目線で追ったけれど、それはなんてことはない普通のミルクジャムだった。

いや、斬新な味覚を提供している時点でミルクジャムはその普遍性を喪失していることになる。しかし、これは僕ではなく、ありすの視点から観測した場合に限っての事象であり、やはり僕にとってしてみればミルクジャムは普通のミルクジャムでしかないのだ。よって、幼馴染の尖った指摘には外連味を感じざるを得ないわけで、その演出には「てやんでい！ おれっちのミルクジャムにケチつけようってのかい？」と、江戸っ子ばりに憤懣やるかたない気分すら覚えてしまうくらいである。まあ奴の歌舞いた顔かんはせを見なければの話しんだけど……。

なんだかんだ言いつつも、テーブルを見つめたままトーストをはぐはぐ皆既月食しているありすさん。だけど、消失しているトーストに反して、鼻から供給されている液体は止まることとどを知らなかった。終いには、ぼたぼたと赤い斑模様をテーブルクロスに描き始める始末。

「あれ？ 鼻から苳ジャム出てるよ」舌で上唇を端から端までなぞったあと、ありすはぼんやり天井を見上げる。「ミルクジャムに苳ジャムを混ぜると、鉄の味になるんだね……、知らなかった」

サンジェルマン伯爵も思わず大絶賛の錬金術ね。などど桜庭好みの突っ込みはおいておいて。

「いや、それはなぢだから」空想科学実験している幼馴染を嗜め、

僕は椅子から腰を浮かせる。「そのままじつとしている。今ティッシュ取ってくるから」

「うい」

「病院とか行かないで大丈夫なのか？」僕とありすを交互に見ながら、揃姉は絶え間ない瞬きを繰り返す。「救急車呼ぼうか？」

肩を竦めて、首を横に振った。

遺憾ながら、揃姉の期待に応えられそうな病院はどこにも該当しそうにない。かろうじての候補の一つとして動物病院が上がったけれど、鯉の病気はその治療対称に該当するのは、浅学な僕には図りかねる。

というか魚類違うから。

いずれにしろ、揃姉の提案は徒労に終わることは自明だ。「ま、ティッシュ突っ込んでけばその内止まるでしょ」

つと 語尾を殊更強調し、その勢いに乗じて程好く丸まったティッシュをありすの鼻穴に突っ込んだ。せ、積年の恨みを発散させただけだからね！ べ、別に照れ隠しなんかじゃないし。などと、内心でツンしてみたけれどまったく萌えない。やれやれ、当然だけど。

「ふまつ！？」

感情複合バッドステータス15

奇怪な喘ぎ声を上げて、ありすは目を大きく見開いたあと、睫毛を数回瞬かせる。

僕のツンつぷりに不満を覚えたらしい、「このお人形なんだかいけ好かないのー」と幼児特有の無自覚な悪意を行使されたビスクドールみたいに、目一杯首を『ぐきい』と僕の方へと回転させ、『くわっ!』と先駆者の威厳を開眼させるありすさん。そんな底冷えする圧力の中で、本格ツンのなんたるかを教示され、その奥深さに驚嘆と感化に打ち震える僕なのである。出鱈目だけどねっ。

しかし、ビスクドールのやつは本当にあつた怖い話しなんだけど……。

「崇さあ、なんかここ息苦しくない?」

「さぞかし空気が綺麗だったんだろうね、お前のいたところ」

「は? なんの話し?」

「涅槃ねはんの話し」

「意味わかんない」

「意味はわからなくても、人生は謳歌できるのだよ。とりあえず食せ」

「うい、食す」

魂が定着し現実へと回帰したのを見計らったあと、一分の一スケールありすさんから退去する僕。なにやら味がしないだのどうだの騒いでいたが、まあ気にしない。再発防止を兼ねた行為なのだから、それは仕方がないですよ。

「本当に大丈夫なのか?」

保護欲をフルスロットルさせた揃姉が、顔を寄せて僕へと訊ねる。ただ視線は僕へと向けてはおらず、二枚目のトーストにかぶりついている気になるあの子にご執心中だ。まあ幾ら軽症とはいえ、『嫉妬』は奴の専売特許なので心の最奥にそっと仕舞っておく。

「別に淋しくなんかないしい」

「淋しくなると鼻血が出るものなのか？」

兎ですらそんなもの出ませんよ。やだなあ揃姉。

「さては揃姉。空気詠み人知らずのジョブを取得していますな？」

「いや、私は刑事だが」視線を固定したまま揃姉は言った。天然をとことん貫く揃姉、超絶可愛い。

揃姉の横顔を盗み見ながら、すっかり冷め切ったトーストを頼張る。それからアリスへ視線を向けて、軽く逡巡。他愛無い日常の延長線上だと思っていたものが、存外に厄介を秘めたものだとは再認識した。

江戸川・フルフル・莉鈴を捌け口とした、夢枕ありすの感情の露呈。

そう……、昨日の昼休みの一件にその兆候は窺えたはずだけどな軽く見ていたどころか、軽く見すぎていた。

まさか、揃姉の言葉に過剰に反応して壊れてしまうとは思ってもしなかった。

まったく、僕という人間を意識しすぎなんだよお前は。

「ん」「僕の視線に気づいたのか、ありすは大仰に頭を振って、そして敵愾心露に僕を睨みつける。「な、なによ？　じろじろ見ちゃったりしてさ、あ、あたしの顔になんかついてるとでも言いたいわけ？」

「ついてるといつか……、ティッシュが鼻に突き刺さってるよお前」

感情複合バッドステータス16

僕の先走りすぎた指摘ネタバレに、ありすの頬の肉が痙攣した。困惑をあけすけにさせた視線を僕に停滞させたまま、おずおずと指先が件のティッシュに接触する。ある切欠を境に、仄かに熱を帯びて朱色になっていた顔かんはせが、加速度的に深紅で染められていく。

意味を違たがえて羞恥の色に上書きされる様子を眺める中、自業自得とはいえ後悔の念が頭の中で蠕動ぜんどうした。自重という単語が今頃になつて展開していたけれど、砲撃手なにやってんの！？　って感じで、遅すぎる弾幕に絶望気味だ。

「にやにやにやにやにやんでっ！？」そうありすは悲鳴をあげて、それから一拍おいたあと瞳孔を収束させ手で鼻を覆い隠す。明らかにありす自身の疑問おほと思しき声音だけど、擬人化された猫が狼狽するような鳴き声に聞こえなくもない。ありすの眼球を、猫のそれと連想したからかな。もしかしたら、ありすの中の人は妖精猫ケットシーで、我輩は猫でなかった事実に驚いてるのかも。そういう可能性も考慮する。「ふななななななっ！？」

まああり得ないと思うのだが、罷まかり間違つて仮に後者だとしたら、妖精王国ご帰還の際には是非とも鯉と蛇をお供に加えてほしいものだ。

しかし。

それが正しいか否かは、僕の裁量では決めかねるけど。

さて、妄想と懊悩はさておき。

「ところで揃姉。昨日の電話、もしかしたら揃姉の仕事と関係あったりする？」何の前触れもなく、そんな質疑をする僕を揃姉は流し目で一瞥し、そして黙殺する。

はい。では、肯定ということ。

そんな評価を下したあと、二杯目のコーヒーに口をつけた。

ありすに駄目出しされた荒唐無稽を嚙下する。しかめっ面してい

る自分が容易に想像でき、そんな事実になんて首を捻る。見た目もさることながら、味もグラン・ギニョールのとはこれ如何に？
「というか、血液の匂いが顕著なんだけど」カップに鼻を近づけて、くんかくんかする。しかし、ずびびびと音が漏れるのはどうしてだろうな？

感情複合バッドステータス17

洗面所を兼任したバスルームをあとにする。

まだ鼻にありすの体温の余韻が残留しており、それが温床となつて実体のない質量を芽吹かせていた。

「あででで……」今だ痛み^{かまいたち}に苛まれ続ける鼻の表面を撫で擦る。「まるで鎌^{かま}鼬^{いたち}だな」

もつとも実際に切れたのは、表面ではなく鼻腔なんだけど。

しかし、気づかなかつた点を踏襲するならば、どちらにせよそれは同義であると認識せざるを得ない。「顔を洗って来い」そんな揃姉の言葉で、初めて僕は自分の顔^{かんはせ}の異変に気づいたわけだし。

「女の子の鼻に、勝手にティッシュを詰め込むやつがあるか」僕がキッチンに這入ってくるなり、開口一番揃姉はそう呟く。

ありすの手のひらで圧縮された鼻を搔きながら、天井を見上げた。呆けていた幼馴染に処方できる最適な手段はあれくらいなものだろう。それよりも上位の方法はあるにはあるのだけれど、鼻の入り口に唇を押し付けて蝙蝠みたいに鼻血をちうちう吸ってみたりでもしたら、眼前の姑が夜な夜な欲求不満で憤りそうなので敢えてソフトな手段に落ち着かせたのである。と、「冗談はほどほどにして。

「あれは不可抗力なのです。溢れ出る情熱^{パトス}を堰き止めるには仕方がなかつたのですよ」たはは、と揃姉に愛想笑いを振りまく。

揃姉は目を細めただけで、僕の言葉に言及はしなかった。コーヒ―を嚥下したあと、カップをコースターに載せてテーブルに目線を置く。それから、僕にまた目線を配置して「で、嫁は?」、とテーブルクロスに惨劇を振り撒いた地獄少女の所在を訊ねた。

「家に戻ったよ。化粧を直さなきゃどうかこうとか」

「そうか」揃姉は首肯して、何故かそこで相好を崩す。なんだろう君。

「今からありすを迎えに行つて、そのまま学校に行くから」食器を

シンクへ運びながら僕は言った。「テーブルクロス、洗濯機に放り込んでおいて」

「わかった」

「あ、洗濯機は回さないで良いから。で、食器は帰ってきたら洗いますので」

「わ、わかった。それはお前に一任する」

「あ、それと財布にレシートしか入ってなかったんだけど」

尻ポケットから財布を取り出して、揃姉に証拠を開示する。

椅子から腰を浮かせた揃姉は財布を覗き込み、眉間を揉みながら嘆息した。

「財布は、私の部屋のキャビネットにある」合法的に、勇者のアウトローな搜索を許可される僕。合法ついでに筆筒も捜査の対象に加味しようか。なんだかオラわくわくしてきたぞっ。というのはもちろん冗談ですの、あはっ。「好きなだけもっていけ」

「いや、揃姉凹みすぎだから」自暴自棄のステータス異常に罹^かった揃姉を嗜める。ちなみに頬は林檎病を患っております。

「わ、私は、凹んでなど、いない」唇を尖らせて抗議を漏らす揃姉、いとかわゆす。

感情複合バッドステータス18

揃姉の言葉に軽い機知感を覚えつつ、僕は廊下へと足を運ぶ。

そして、廊下へと差し掛かるうとしたそのとき、

「ときどき、お前は嫁への配慮に欠けることがある」ふと、揃姉がそんな呟きを漏らした。

振り返らずに鼓膜だけを反応させる。

思考は幼い日のありすを想起していた。

まだ、揃姉に嫁とも呼称されず。

まだ、僕に幼馴染とも定義されていない。

マンシヨンのエントランス。挨拶を交え入居してきた旨を朗らかに伝える母親の後ろで、僕をやぶ睨みする名前も知らない女の子。

彼女の両手に抱えられていた人形が、ビスクドールだと教えられたその日の夜。その夜に付属して、怒っているような泣いているような、そんな顔の揃姉が海馬から抽出された。

「僕はいつだってあんな感じだよ」遡行し心の底で鬱血し始める白黒映像を言葉で融解させる。

「自覚はあるみたいだな。しかし、うかうかしているとお前はおいでけぼりだ」

口端に苦笑を宿らせたふうな声調で、僕の未来予想図を展開する揃姉。

まあ、揃姉がそんなことをするまでもなく。

既に僕はおいてけぼりなんだけど。

すわすわ、笹鮎ヘラフナに目を輝かせる女の子の成長は著しいようで。

まいったまいった。

「どうでも良いけど、フナってコイ目コイ科コイ亜科フナ属の魚なんだよね」

「何の話だ？」

「ちよっとだけ湿っぽい話し」首を旋回させたあと、そうおどけて

みせる僕。

「意味がわからないな」胡乱に僕を眇め見ていた揃姉も、やがて視線を外しおもむろに首を旋回させた。それから、カップに唇を漸近させて、「お前も寝不足か」と泥濘とした液体に息を吹き掛けた。

感情複合バッドステータス19

さて、登校中でも僕はおいてけぼりなわけですが……。
いや、メンタルではなくフィジカルになんですけど。

アスファルトが昇華する熱気に噎せ返りそんな気分になりながらも、どうにか僕はありすの追隨に尽力する。なんというか僕の歩調に合わせて加速度を増している感じで、まったく追いつけないし。可笑しいな。寝不足気味なのは僕ではなく奴のはずで、こうして僕が憔悴と酷似した空転に苛まれる謂れはないんだけど

とにかく、今日もありすさん元氣一杯な様子で、ツインテールをアナログコントローラみたいに上下左右、変幻自在にゆんゆん躍動させていらつしやる。そのアナキーな拳動に意図の読めない不機嫌の予兆が垣間見えるのは気のせいだろうか。食事中的あれは、僕の流血という意趣返しで落ち着いたと思うんだけどな。さしずめ心当たりがあるとすれば、玄関先で見た奴の勝ち誇ったポーズだろうか。腰に両手を添えながら顎をしゃくりあげて僕を見下ろす様は、さながらお姫様というより女王様然としてそれなりの雰囲気は演出していたけれど、その雰囲気^{かしず}に当てられて傳^{かしず}いてしまうほど僕は忠誠を捧げていないのだよ、きみい。

そんな益体のない思考を巡らせる中、ふとありすが歩調を緩め振り返った。

探りを入れるような視線を皮膚が察知して、思わずそぞろ歩いてしまう僕。当然、距離は一定の間隔を保持したまま、僕とありすとの間に生じた空間に熱で爛れた空気が滞留する。

「な、何か？」額に滲む汗を拭き吹き、僕はありすに訊ねた。

「別に……」そう吐き捨てて、鼻を鳴らしてそっぽを向くありすさん。その際に、ローファーがアスファルトを強く打ちつけたのは、何かのサインかはたまた不機嫌が具現化された表れなのか。「ああもうつ……、これだからにぶちゃんは」

ふむ。どうやら両方を兼任していらっしやるようで。

しかし、僕が何らかの評価を下すほど眼前の幼馴染に変化のほどは見受けられないけど……。だが強いて挙げるならば、奴の膝上までをコーティングしている靴下が漂白されたくらいなものだろうか。あとはその日本の慣用句的な代物にひらひらなレースが装飾されていることを言及しておく。まあさして意味はない微細な変化だとは 思っけどね。

さっきのありすの物言いに多少の憤りは覚えたが、結局僕は愚鈍であるということを楽し受して妥協することに落ち着いた。まあ僕もまだまだってことで、お姫様のお眼鏡に適うよう尽力する次第で御座いますわ。その方向性は皆目見当もつきませんけれど。おほほ。

感情複合バッドステータス20

「ごめんあさーせ」

歩調を緩めたのを好機と見て取り、アスファルトを踏みしめる回数を上昇させる。茹だるような外気に伴い背中 of 皮膚が落涙を訴えているが気にしない。優しさと余計なお世話をワイシャツに兼任させて、本懐を遂げるべく僕は歩を進める。それでも世間では姉思いの弟で通っているのだよ。一部でシスコンと評されているところが不本意では　！？

「そーい」

顎をかすめる暴力に思考がぶつ切りになった。

重心を失い、太陽に干された眼球がたちまち黒焦げになり視界を酩酊させた。眼球が覚える酩酊に便乗して身体を後退させ、両脚に少しだけその余韻を愉しませる。それから目蓋越しに指をそつと当たて酩酊したそれを押し潰した。

やがて素面しづふに復旧した眼球が、撲殺天使（未遂だけど）の認識を開始する。

腰に右手を当てて前屈みになって、僕を眇め見るありすさん。暴力を持て余し振り子時計の道化へと変じた鞆を一瞥したあと、おもむろに姿勢を正し再度僕に視線を投射する。

「隣に立たせてあげてやんない」そしてにべもなくそう吐き捨て、一度頬を膨らませてから「今日のところは」と、舌でマシユマ口をくるみ込んでいそうなもごもごとした声調で補足する。

「どうしても？」

僕の質疑にありすは無言の首肯で応答し、

「だから今日は私のお尻でも堪能していりよっ！」ひとしきり僕を睨みつけ、上擦った声でそう宣言した。

「……………」

「……………」

いや、言ってる傍から動揺されちゃあこちとら立つ瀬がねーんですけど。まあ幾ら幼馴染とはいえ、視姦は御免こうむりたいところだけど。

僕の意向などてんで意に介さずに、ありすは踵を返しぶんすか歩き始める。もちろんありすの言葉を鵜呑みにするのはちゃんちゃら狂っているので、全体のシルエツトが視界に収まるようにして所在のほぞを固めた。仕方がない。今日のところは見習いのスタンスに甘んじようではないか。情報が不足しているのも確かだからな。

揃姉はあんな調子だし、ありすに至ってはときどき思わせぶりに振り返る顔から察したところ、あいつから情報を抽出するには困難な気がした。もし仮に今すぐありすから情報を得ようとするならば、僕は性格の修正を早急に図らなければならない。

しかし、鈍いなりにもさっきの言葉が含蓄を持った表現だとは概ね理解できるけど。

だったらスカートの中を透視でもすれば良いのか、と思うところが僕の限界を如実に表していて笑えてくる。

「何か面白いことでもあったの？」

「いや、面白がるほうが変態だろ」

振り返り不機嫌そうに訊ねるありすに、僕は平静を取り繕って応えた。

「意味わかんない」

わからんでよろしい。

感情複合バッドステータス21

昇降口にて、僕達の爛れたアバンチユールはひとまず終息を迎えた。

で、結局僕は韜晦するありすを解さぬままここに至ったわけで、その際蕩尽し湯豆腐みたいになっていた脳みそは、「それでどうなのさ？」と僕の心中などお構いなしに詰問する奴によって木っ端微塵に打ち砕かれることとなる。僕がその詰問に応えあぐねるのはむべなるかな、「そんなことより上履きに履きかえようぜ」などと鼻孔からゴーヤがひり出せそうな嘔いた切りかえしができるわけもなく、ぐしゃぐしゃにされた頭の中の湯豆腐があたかも襟元へ流れ込こんだようなアンニュイな面持ちで、こうして僕は黙して因果の応報に身をつまされているわけなのだ。

つまり、手段が目的へと刷りかえられた好例ともいえる。

しかし

スカートの丈が短いと、自然とそちらに目が向けられるものだよ。

誰ともなしにそんな感想を漏らしてみた。さて異論はあるかね？
いや……、

諸君気にしないでくれたまえ僕の思考は今やチャンブルーしている。

泥濘とした思考に苛まれながら僕が口を噤んでいると、ありすは短く鼻息を漏らしそのあとに『やれやれ』と言葉を追隨させそうな雰囲気を見せて指定の下駄箱へと姿を消す。

「随分と堪能されたご様子」

そして起伏を損なわせたプラスチックみたいな声が、消失したありすに入れ替わり僕を再び苛み始める。眉間を揉みしだきながら嘆息を繰り返す。振り返って確認するまでもない。

「お前は這い寄る混沌なのですか？」そう。我らが秘密結社同好会

を束ねる人外、ナイアラルトホテプとはこいつのことだった。「桜庭……、つけてたのか？」

「心外」トリックスターの予兆を垣間見せて、桜庭灰霧が僕を横ぎする。「良い感じの雰囲気」に声を掛け辛かっただけ。特に恩田君が「

「お前の眼は節穴だな。あと最後の言葉は聞かなかったことにしておく」

「恩田君の眼にはオセロが張りついていそうね」

「耳にポップコーンでも詰め込んでいそうな意味のわからなさだ」

「恩田君は猫を耳に飼っているのかしら？ 煙に巻いてこの場が丸く収まると思っていいたらとんだお笑い種だわ。罪を悔いて、しかるのちに根無し草を芽吹かせなさいな」

あれ？ 益体のない言葉の応酬だと思っていたんだけど。

もしかして、いつの間にやら僕は貶められていたりする？

「ストーリーカーの捕縛は、風紀委員のお仕事なのかしら？」首を傾げてから、桜庭は下駄箱から上履きを取り出した。そしてどうしてか上履の底を打ち合わせ金属製円盤の真似事に興じる。「とにかく……、迎撃する」

感情複合バッドステータス22

ばんばん、と乾いた音を断続的に立てながらにじり寄ってくる桜庭。あらぬ誹りを受けて遺憾極まりない心持ちだったが、しかし身体のはうはそうではないらしい。汗顔し桜庭の歩調に合わせて後ずさる様は、まるで崖っぷちに追いやられる犯罪者みたいで滑稽ですらある。

「心当たりがあるからそういうふうな行動にでる」桜庭が、僕の深層のメッセンジャーを請け負う。さもありません。「大人しく靴底のガムにおなりなさいな」

「いや待て桜庭、話を聞いてくれ」

「何やら恩田君の唇が蠢いているようだけれど、聞こえないわ。だって私鼓膜揺らいでいないもの……、耳にポップコーン詰まってるから」

「変なところで複線張っちゃった!」

叫び、さらなる後退を僕は余儀なくされる。しかし、もう後がない。板張りの段差は緩慢ながらもその差分を確実に失いつつある。

その先にあるのは、無機質なまでに慈悲の欠片も窺えないコンクリートの大海原。足元を取られ赤潮を広げるほど僕はプラנקトンになりきってはいなかった。だから、自ずと身体はその場に踏み止まる。コンクリートに頭を打ちつけるより、ゴムで引つ叩かれたほうがまだマシというものだ。

そして、とうとう僕は桜庭と対峙する格好になる。

大きな破裂音を昇降口に轟かせて、僕を見据える桜庭。好奇心な視線を衆目が投射しているけれど、もちろん桜庭はそんなことで物怖じする女の子ではなかった。右腕が灯台みたいに聳えて、その頂には上履きが警告灯ばりに激しく回転している。ここまでくるともう腹を括るしかなかった。あとは黒い眼が裏返らないよう念じるばかりだ。目蓋を閉じ心の中で思わず十字を切る　おっといけねえ、

脳みそが蕩尽しているあまり間違つて手刀を切つてしまつたぜ。
てがたな

固唾を飲んで、頭頂部に上履きが振り下ろされるのをじつと待つ。いつそ深層に燻っているエロい気持ちごと吹っ飛ばしてほしいものだ。そう思えばこのいささか不条理じみた肅清も僥倖とすら捉えられるというもの。さあこい桜庭。僕は世界の中心でこつつあんですを叫ぶであらう。

ところがどうすこい、僕は無事だった。「あ……、れ？」

「何をしているの？ キスの練習？」聞くとたちまち赤面どころか、すっかり黒焦げになりそうな言葉をのうのうと桜庭は世に解き放つ。痛覚を伴わない頭頂部の感触を不思議に思い、僕はおずおずと目蓋を押し上げた。

まず桜庭の白い腕を視認した。だけど上履きはその先に付属していないはず。見下ろす視界に桜庭の性格をそのまま具現したような上履きが映っていたからだ。几帳面に、板の上に揃えられている。

感情複合バッドステータス23

「恩田君、可愛いわ、恩田君」

こいつ犬みたいに僕を扱っていやがる……。さっきまで上履きを掴んでいた手で、僕の頭を撫で擦る桜庭。冷たい手のひらにも関わらずそれは意外と柔らかかった。こいつを構成する物質が、プラスチックではないと認識を改めるときなのかもしれない。しかし桜庭、生憎お前に振る尻尾は、僕は持ちあわせていないのだよ。「一体、何の真似だ桜庭？」

そう訊ね眇め見る僕に、桜庭は小さく鼻息を漏らす。それからおもむろに頭から手を離して携帯電話を取り出し、僕の鼻先へと差し出した。

「可愛い恩田君をもっと可愛くするアイテム」顎を引いて桜庭は言った。「これは謂わば……、骨っこよ」

「すっかり犬扱いだな」嘆息と一緒に言葉を漏らした。

どうやらまだ耳にポップコーンが詰まっているらしい。僕の質疑には応答せず意味不明なことをのたまう桜庭に、痙攣する目蓋が眼球を疼かせて仕方がない。

「さあ齧りなさい」

「僕はお前の聞き分けのない耳を齧りたいよ」

「聞き分けの良い恩田君は、私の韜晦もすぐに気づきそうね」そう言つて、桜庭は僕の鼻先にある携帯電話を一瞥する。「ちなみにこれ、ロジカルに味わうものなの」

あ、それと　ロジカルとデジタルって少しだけ似ているわね。と、最後に桜庭はそんな言葉を空気に昇華させた。

その瞬間、蕩尽していた思考が燎原の如く機能を取り戻した。

まずは僕のセクハラ発言を突っ込めよ　ふと湧き上がった桜庭に対する賞味期限切れの突っ込みは心の箆笥の隅にひとまず仕舞つて　目の前に提示された携帯電話と、昇降口の空気へと昇華した

桜庭の言葉を思考に関連づけさせる。

そして、桜庭灰霧という人格をそこへ加味したとき、答えは自ずと導き出されるわけだけど……。

「いや、まさか……、お前撮ってた？」

それでも、僕の口からひりだされるのは、困惑のオブライトで包まれた上擦った現実。

しかし、否定も肯定もしない起伏を損なわせた桜庭の表情が、その不確定な要因に地に足を着かせる。

感情複合バッドステータス24

「な、何が望みだ？」

上擦った現実を継続したまま、僕を見据える桜庭にそう尋ねる。自身の部位ながら思慮の深い唇には凶らずとも感心してしまった。諦めが早いとも捉えられるが、桜庭相手ではこれが最適の手法であるのはまず間違いない。メンツド

「殊勝な心掛けだわ」

短い鼻息を漏らしたあと、桜庭は口の端を不適に歪める。きらりんつ、と語尾に星マークでも踊りそうなくらい、奴の眼鏡は昇降口の照明を乱反射中だ。そのマッドな演出に、夏休みに出会った科学者が重るのは心的外傷おもいでが魅せる妄想かしらん。無理難題を推しつけた拳句、よもや僕の腕をドリルやらパイルバンカーやらに改造する気ではないだろうな……。

「ちょうど喉が渴いていたところよ。何か飲み物でも買ってきてきなさい」

「どうるるる……」桜庭の不条理な提案に思わず舌を巻いてしまふ僕。巻いたついでに巻き舌で威嚇してやるつ　って、あれ？

「え？　そんだけ？」

「そう、それだけ。投げたフリスビーを取りに行くくらい、簡単なことだと思っけれど？」

「いや、まあ確かに簡単だが」不本意ではあるけども　というより結局犬扱いなのね僕。「で、お前は何か飲みたいの？」

「懐は痛めるけど、心は痛まないのね恩田君は……」

「申し訳御座いせんっ！　ご主人様は何をご所望でしょうか！　？」僕何も悪いことしていないんだけどねっ！　おかしいなあ！

「もちろん、ありすの分も買ってくるのよ？」まんまと桜庭のペー
スに嵌り、哀れ犬畜生と成り果てた僕は喪失している尻尾の代わり
に頭を激しく上下に揺さぶる。揺さぶる「さあ、お行きなさいビヤッキー」。

早くしないと黄金の蜂蜜酒がなくなつてよ？」

「どっから突っ込んで良いんだよそれは？」

訊ね返す僕に桜庭は何も応えなかった。ただ無言で携帯電話を力スタネットを叩くみたいにして開閉を繰り返し、桜庭とのやり取りを盗み見している（なんだかなあ……）ありすの気配に僕が気づいた頃、ようやく桜庭はおもむろに口を開く。

「それともまずは私と遊んで欲しいのかしら？ 仕方がないわね恩田君は……。じゃあ、この携帯電話を放るから拾ってきなさい」

感情複合バッドステータス25

と言いつつ……、さては桜庭、ありすとラグビーに興じる腹づもりだな？

視線がのたまう背中に痒みを覚えながら、ちらりと後方に首を捻る。下駄箱の隅から半身を乗りだしているありすさん。どうやらジエラシックパークの園長さんを襲名しているらしいやうで、さっそくその本懐を遂げているご様子。目は据わっていますが、爪はぎりぎり立ちまくっているのですよ。

「しかし、あいつお前とスクラムを組む気はないようだけど？」と自ら立てた推理を声に出してあっさりとは否定。桜庭も異論がないことを無言の首肯で示し（やっぱりやるつもりだったのか）、「心のキャッチボールすら困難」と分析を吐露する。微妙に会話が成立していないのは、ありすが醸し出す空気のせいにする。さつきから下駄箱の歯軋りがまあ煩いのなんの。

「あんなありす初めて」さすがの桜庭さんも驚きを禁じえないように、目を大きく見開いたままそんな感想を漏した。むべなるかな。僕も実際目の当たりにするまで、ありすがあんな娘だとは思っていなかったしねえ。「よっぽど、恩田君のストーカー行為が気に入らなかったのね」

「そっちかよ！ いや……、だから僕はやってないっの！」

「まあ良いわ。でも恩田君、罪は忘れてもジュースを奢るのは忘れないで」と桜庭、何故か僕の背後へと回り込み、それからついつと背中を後押しした。「私の中の気象予報士が血の雨を予報しているわ」

あー、それはないと思うけどねえ。まあ桜庭なりの気遣いと解釈して、敢えてそれに甘んじてみましょうかね。「へいへい、じゃあ適当に何か買ってきますよ」

そして、昇降口に剣呑な雰囲気をばら撒いた元凶は、すごすごと

その場を立ち去るわけですが

「お？」人工的な引力が、今だそこに僕を留めさせる。「おいこら桜庭、引っ張つても黄金の蜂蜜酒は奢つてやれないぞ」

「どこへゆく？」

おや桜庭さん。一体どこでそんな声帯模写を？

そんなことよりも桜庭さん、二の腕に爪が食い込んであいたたなのですよ……。

威圧的な声音とバイオレンスな痛みに苛まれた僕は、思わず後ろを振り返る。しかし、僕を留めているのは桜庭灰霧ではなく、

「どこへゆく？」ジェラシックパークの園長さんであるところの夢枕ありすさんなのであった。「あ、あたひをおいて、どこへゆくつてーゆーの？」

どうやら駄々っ子も兼任していらっしやるようです。

感情複合バッドステータス26

いや つくづく日和見主義者だなあ、と。

え？ 何がって？

そりゃあ……、自分のことですよ。

「ふござっ！？」

右折しそこなつた身体に追隨して、ありすの顔面が背中に接触する。

「あぎやつ！？」

重心を失い思わず身体がつんのめりそうになつたけれど、僕の二の腕を掴んでいた手がサルベージを試みたようであつた。かた勢を維持することができた。しかし、その対価として細胞が壊死したのは明らかであり、鼻の穴がミントの香りで充填されそうな、そんな爽やか極まりない早朝の廊下が提供する空気に不純物を混入させたもまた無理からぬこと。

「痛い……、止まるなっ」

「痛い……、パチくな」

まるで水差し鳥の申し子みたいに、おでこで背中を小突くありすを嗜める。噎せ返るくらいの衝撃ではあるのだが、しかし如何せん神経は二の腕に収束しており、それに追隨する僕の弱った声音ではありすの蛮行を阻止するまでには至らなかった。寧ろ衝撃が呼び水となつて心身は衰退の一途を辿るばかり。抵抗する気概も湧かないまま、薬指と小指の爪が皮膚に埋没するのを人事のように僕は眺めていた。

うーん、これは……、いつぞやの似非吸血鬼アルビノに噛まれたのを喚起

させるくらいの流血だよなあ。

このままだと自動販売機にたどり着くまでに致死量へと至りそう
だ。

ありがとうございます！ これ以上はらめくっ！ 今日ありがとうございます、
マニキュアにラメ入っちゃってるよつ。はあと と、同伴する万
力娘に抗議をしたいのはもちろんだが、しかし、先ほどのやりとり
から察するにそれも徒労に終わることは間違いないだろう。そし
て、僕達を通り過ぎる際に視線を送信する生徒達もまた、僕とあり
すの間に生じている密度を剥離する効果は期待できそうもない。皆
さん、のべつまくなし直ぐ視線を外しているからねえ。

しかし、僕とありますが厄介者扱いされる要因は……、まあ観察者
からすればバカップルに見えなくもないか……。当事者としては余
計なお世話だよと意義申し立てたいところだけど。それとも、神聖
な学び舎に流血を贈与しているのが起因しているのかな？

「ここは僕的に後者の方を推奨したい」

感情複合バッドステータス27

「ひっ!?!」

というより、寧ろそっちの線が濃厚かもしれなかった。

まさか、悲鳴のあとに続く言葉が「バカップルだわ」じゃないよな。足早で教室に向かう女の子の背中を眺めながら思案に耽り嘆息する。まあどちらにせよ、僕としては歓迎できる代物でないことには変わりはない。背中でセッションしている、猟奇的な彼女の方とはかくとして。ああ、これは前者に限っての意味なんだけど。日本語難しいですね。

「あぎやぎやぎやっ」

このまま立つてるだけでは埒が明かないので、前進を試みようとは僕はもがく。パチくのを止めないありすさんをずりずり引きずったり、ときどき立ち止まっては腕を穿っている爪の進行具合を確かめたりして僕達二人の前途は目下多難を極めず。

随分と交流が途絶していた故に、尚更自分の迂闊さが身につまされる。

しかし、剥き出しにされた感情がここまで厄介だったとは。

幼馴染の気持ちに気づかなかった当時の僕としては無論杳として知れないわけで、しかし、知ったところでそれを持て余してしまうのは物理的な損傷を被っている時点で既に実証済みだ。どうにかなるかなと思っ、幼馴染との因果の修復に勤しもうと日和ってみたけれど、これは……、僕がどうかしないといけないみたいだ。いや、それよりもまずは、現在置かれている僕の状況をどうにかしないと。

こつも感情に雁字搦めにされていると、思考すらもままならない。「うう……、あの馬鹿。私を置いて、一体どこへ行くって言うのよ」

「ありすさん、僕はここにいますよっ!」

嫉妬と猜疑の果てに視野狭窄に陥った幼馴染に、僕は自我を主張し所在のほぞを固めてみる。だけど、ありさん全然聞いちゃくれねえわ。流れる血も止まっちゃくれねえわ。行き交う人はもう目もくれねえわ。さすが一階がインフェルノと揶揄されるくらいはある。いつそ食人鬼になるくらい目一杯弾けてくれりゃあ、と強がってみても絶望を上塗りするだけで益体ない。

感情複合バッドステータス28

「大丈夫？」

おや、渡る世間は鬼ばかりだと悲観したときに声が掛かった。地獄も存外捨てたものじゃないな、希望を胸に僕は停止し声の主の識別を開始する。

が、僕に寄生しているありすの体重が背中に負荷をかけ識別に支障をきたした。再び重心を失った僕は前のめりに転倒しそうになる。視界にリノリウムが漸近し、そこでどうしてか腕を握り潰されたような錯覚と激痛。そして、自ずと咽頭は絶叫をひりだそうと収縮を始めた。なんて冷静に状況を描写している場合じゃなさそうださつき喉からどろりと鉄の味が競りあがった気がしたけれどもちろん気のせいだよな！？

「ぎいいいいいいいっ！？」　かはっ　「圧縮と開放を一気に味わい行き場を失っていた音が空気に触れた。

思考が現実との接続を試み、矢継ぎ早に腕の所在あrikaを眼球が求める。腕は綺麗にその形を保っている。そのままパックして出荷しても恥ずかしくないかな。でも、タグに加工品とでも表記したほうが良さそうだ。赤色の傷跡を指でなぞったあと、半透明の爛れた皮膚を筆記取る。

「そういう夢枕ありすは斬新かも」

その女の子の声で顔を上げる。身体から乖離した僕の皮を指で持て余しながら。

それで、気づいたんだけど、どうやら僕は尻餅をついているらしいかった。

ジャージ姿みくだの女の子が僕を見下ろしている。

いや、見下みくだしているといったほうが正しいかな？

まあ僕のこととはとりあえず置いておいて。

でっかいヘッドフォンつけたそこの君、一体だゝあゝれ？

感情複合バッドステータス29

「さしずめ、キミ達二人はあな／＼き／＼ってところ？」鈴を転がしたような声でそういったあと、女の子は缶ジュースのプルタブに指を掛ける。

圧縮されていた空気が弾けて、白い飛沫が散見したかと思うとそれは僕の胸に降り注いだ。

服に付着していた血痕が淡く滲む。その近くには女の子の小さな指。ロマンティックエンジン全開さながらに、『白い小さな指』と表現できないで申し訳ない。遺憾ながら、彼女の指は既に僕の血液で汚染されてしまっている。

「恋愛に明確な戦術は存在しないって信じているけれど、キミ達……いやキミのやっていることは出鱈目だね。無秩序は無秩序なりにそれなりに秩序を保っているものだよ、まったく」敵愾心はそのままに、僕を見下ろしている女の子は嗤う。「それでは異端ではなくまるで道化だ」

ふむ、その口振りからすると、もしかしたら眼前におわしやすのは噂に聞く風紀委員の方かね？アークエンジェルズそれで、神聖な学び舎を血で血を洗っている、バイオレンス咲き乱れる僕らのバカップルぶりを見かねて権力を行使しにきたと？ うーん、それこそ異端だと僕は思うなあ。何故なら僕達は見た目と違って、清い間柄なのだよ、わはは。でもそれは無垢の白ではなく、虚無の白だけだな。

しかし、糾弾している対象が限定されているのが、どうも気になるな。良く観察してみると、女の子の目線は僕を捉えてていないみたいだし……。

「それで、夢枕ありす」「女の子から視線を外して、染色された服を僕は一瞥する。そこに添えられている指が不快に蠢いた。「そこまで至る、キミの心情の変化は一体何なのかな？」」

「どうして今頃……、今になってあんたが現れてくるのよ？」

「そりゃあ決まっている。キミが新しいからだよ、夢枕ありす。人間新しいものには自然と目がいつてしまうからね……、違うか？」

感情複合バッドステータス30

ああ、確かに夢野先生（変態外科医のほうじゃない人ですよ。念のため）のあの胸部は、僕にとつて斬新ではあったな。

控えめとつるぺたの板挟みだった人生にひとしきり思いを馳せたあと、慇懃に首肯する。もし声に出して肯定したものなら、そのま
ま調子に乗ってS・O・Tになだれ込んでしまいうだったので、
スーパー・おっぱい・タイム
もちろん口は噤んだまま。ついでに開きっぱなしの右脳も引き締め
てみた。その際、「おっぱい万歳」などと言葉が練り歯磨きみたい
に格好悪くはみ出したのはここだけの秘密だ。

「知ったふうなことを……」

「知っているから訊いてみたんだけどね……」

さて、いまいち締まらないどこぞの馬骨野郎の冗談はそこそこに
して

二人の言葉を皮切りにして、僕達を取り巻いている電子が一気に
密度を増す。

すっかり蚊帳の外にいる気分で、出会った頃からまるで成長の兆
しすら窺えない幼馴染の胸に凭れながら日和っていたけれど、この
剣呑な雰囲気には僕は流石に息を吞まざるを得なかった。

呼吸ですら化学反応を誘発せそうな 危うすぎる雰囲気。

電子の嵐が吹き荒ぶ廊下で、チリチリと、音にならない幻聴がさ
らに不安を急き立てる。

開いたジッパーから伸びるコードを弄びながら、女の子はときど
き僕に柔和な表情を見せる。女の子の顔は仄かに朱色を帯びてい
かんはせ
瞳孔の焦点は定まらない。苛々しているんだかもじもじしているん
だか、状況が状況だけに裁量を量りかねるな。

しかし まあ僕と彼女の関係は概ね把握した。

それと、彼女と彼女の関係もまた然り。

前者のほうはもう少しだけ検証する必要があるけれど、後者に至

つては検証の余地すらないだろう。

後ろからベアハグきめているありすの反応から、彼女の感情は窺い知れる。そう。僕に触れているのを忘れるくらいに、こいつは平静を維持できていない。

「夏休みの間になにがあつた？」女の子の声が1オクターブだけ低くなる。「キミに変化を生じさせる起因があつたなら、その期間以外に考えられないからね。違うか？ 夢枕ありす？」

女の子の質問、いや、詰問にありすは応えない。

ありすの反応に女の子は微かに唇を歪めただけで、それが沈黙を前提とした詰問であつたことを僕は理解した。

感情複合バッドステアース31

そして女の子の対象がありすだけではなく、僕も含まれていたというこも。

まいったなあ……。

フライパンの上で踊っているポップコーンみたいに、色々な感情が口から飛び出しそうになったけれど、女の子に舌を巻くことでどうにかそれを塞ぎ止める。きっと女の子の眼には今ごろハリセンボンが写されているに違いない。迂闊に触れると怪我しちゃうぜ？ わはは。

僕も後ろのベア子ちゃんに倣ってぐわぐわ吠えずに大人しくする（感情の流出を防ぐための処置だったけれど、沈黙という行為に関してならば、それはきつと同義だよな？）。

しかし、こうも膠着状態が続くとすると僕の高校生活における皆勤賞の夢が僅か半年足らずで潰えることになるな。いや、思ってもいないクリームゾンな嘘なんですけどね。

だけど、現状を打破しない限り僕たちはこのまま停滞し続けるであらうことは、揺るぎのない事実。

さて、どうやら馬骨野郎が水差し野郎にクラスチェンジするときが訪れたようですな。

おもむろに腰を浮かせながら、身体に密着しているありすを引き剥がす。思わず嘆息してしまうのは仕方がない。メランコリックな気分になってしまふのも然り。最も今置かれてる僕の立場ではなく、これから先の僕の立場のことなんだけれど……。

「まったく……、これから先、桜庭に弄られることを考えると、S A N 値が減少していくのが否応なしにわかるな」

感情複合バッドステアース32

「恩田君のあまりにも役立たずぷりにー」桜庭灰霧は嘆息をしたあと、僕を見下ろす。「私のSAN値は激減の一途を辿るばかりだわ」

ジューズを買い忘れたくらいで、お前は正気を失うのかよ……。「なにを大袈裟な……」

思考がひり出した言葉は上手く音に変換できず、ザラザラした呼吸と一緒に出がらしのお茶みたいな声が外気に触れる。

声も震えているが、身体も酷い有り様だった。

無理もない。いくら女の子とはいえ、それなりの体重をもった立派な物体だ。それが動かないときたら尚更、死体を運んでいるのと同じことだろう。

それを一階から三階まで引きずってきたのだから、僕の身体もさすがに悲鳴を上げざるを得なかった。もっとも、内に潜在する野生が顕現していれば、こんな惨めな状態は回避できたんだけれどーまあ、いずれにせよ後の祭りだ。

夏休みは、もうとづくに終わっている。

「それでー」桜庭の抑揚を欠いた声に、僕は再び顔を天井へと上げる。「本来私のジューズを握っているであろうその右手に握られているティディベアは……、一体どういことかしら？」

感情複合バッドステアース33

おや？ 僕はそんな可愛いものを握った覚えはないぞ。第一ぬいぐるみが汗ばむわけがないじゃないか。

「今日のクラスの話題はもっぱら恩田君たちの噂で持ちきりね。放課後あたりには学校中にその噂が広がることでしょう」

「なにを言っている？」

「私の中にいる気象予報士はなかなかあなどれないものよ」

「いや……、だからどういうことだ？」

「それは、恩田君自身の眼で確かめた方がよろしくってではなくて？」

あはは、こいつうお嬢様言葉になつてらあーなどと、どうやらツツコミを挿入している場合じゃあなさそうだ。

教室に蔓延する剣呑な雰囲気を知覚した僕は、恐々と周囲を見回す。

ふむ、とひとり勝手に頷いてから、壁にある時計仕掛けを確認した。

「なあ桜庭？」

「ん？ なあに？」

「このクラスって……、ホームルームぎりぎりに教室に這入ってくる生徒を引くような眼で見る。そんな敷居の高いクラスだったっけか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5024f/>

深層心理レメゲドン

2010年10月11日23時57分発行